

西の口遺跡第1次発掘調査概要

—市立繩手中学校分教場建設工事に伴う第1次調査—

1987

(財) 東大阪市文化財協会

序

東大阪市における埋蔵文化財保護行政の進展については、年々目ざましいものがあり、昭和61年までに埋蔵文化財包蔵地分布図を2回改訂いたしました。改訂のたびに新発見の遺跡が登録されているわけで、現在までに137ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

遺跡の発見の契機となるのは、各種の土木・建築工事によるもので、以前は工事中に土器片などが不時発見されることが比較的多かったのですが、最近では、遺跡のないところでも、共同住宅や病院など大規模な建造物の建設については、事前の試掘調査を行い、偶発的ではなく積極的に遺跡の発見や保護に努めているところであります。

今回報告いたします西の口遺跡も市立中学校分教場建設予定地内での試掘調査の結果、新たにその存在を確認したものです。

本調査により、西の口遺跡が弥生時代から平安時代にいたる複合遺跡であることが判明し、とりわけ古墳時代後期の溝で囲まれた掘立柱建物を5棟検出するなど大きな成果を得ました。本遺跡が東大阪市東地区で最南端に位置するところから、川を隔てて、北に位置する馬場川遺跡との関係はもとより、八尾市域の楽音寺遺跡や西の山古墳、花岡山古墳などの関連も考えていかねばならないと思われます。また、別の観点からすれば、東大阪市を中心とする地域史にも新たな1ページを書き加えることになるわけで、本書が考古学的な文献としてだけではなく、広く文化財の保護や活用のために資することになれば幸いであります。

最後になりましたが、調査の実施にあたり格別な御協力を頂いた関係諸機関各位、とくに東大阪市教育委員会に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月31日

財團法人 東大阪市文化財協会

理事長 木寺 宏

例　　言

1. 本書は、東大阪市立緑手中学校分教場建設に伴う西の口遺跡第1次の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、東大阪市教育委員会の委託を受けて、財団法人東大阪市文化財協会が実施した。
3. 現地における調査は、昭和60年4月30日より9月6日まで、同年11月26日より12月25日まで2回にわたり実施した。
4. 調査および整理は、次の事務局体制により進めた。

理事長　木寺 宏（東大阪市教育委員会教育長）
事務局長 寺澤 勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）
庶務部長 吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）
調査部長 原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶務部員 安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
調査部員 上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査担当 下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）
菅原章太（東大阪市教育委員会文化財課）

5. 遺構の略号は下記の通りである。
S B……掘立柱建物、S D……溝、S E……井戸、S K……土坑、S P……ピット、
N R……自然流路
遺構番号は検出した順に1、2、3、……と付している。
なお、遺構実測図でのピットについて、◎とあるのは、柱痕、掘形ともに検出できたもの、○とあるのは掘形のみで柱痕が不明であるものを示す。
6. 現地の土色名および土器の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に準じておらず、記号の表記もそれに従った。
7. 本書の執筆は、I、III-1)、6)、IV-5)を下村、Vを下村・菅原が共同で行ない、その他の項および編集を菅原が行った。遺構写真は、下村、菅原が撮影した。遺物写真はG・Fプロに委託して実施した。
8. 本書中、石器の実測については、松田順一郎の協力を得たほか、曾我泰子が整理作業に参画した。厚く御礼申し上げる。また調査の実施にあたっては、東大阪市教育委員会施設課、株式会社山田工務店、菊田建設株式会社、安西工務店に格別な御協力をいただいた。記して御礼申し上げる次第である。

本文目次

序.....	
例言.....	
I. 調査に至る経過.....	1
II. 位置と環境.....	2
III. 調査の概要.....	4
1). 地区割.....	4
2). 層位.....	7
3). 平安時代以降の遺構.....	8
4). 平安時代の遺構.....	9
5). 古墳時代の遺構.....	12
6). 弥生時代の遺構.....	20
IV. 出土遺物.....	28
1). 平安時代の土器.....	28
2). 古墳時代の土器.....	31
3). 製塙土器.....	41
4). その他の遺物.....	41
5). 弥生時代の土器.....	42
V. まとめ.....	53
観察表.....	59

挿図目次

第1図 現地説明会風景	1
第2図 遺跡周辺図	3
第3図 調査地区割図	4
第4図 土層断面図	5 ~ 6
第5図 平安時代以降の歴史実測図	8
第6図 SK5土器出土状況実測図	9
第7図 SK3出土額実測図	10
第8図 SE2実測図	11
第9図 SE3上部構造実測図	11
第10図 SE3下部構造実測図	11
第11図 SE3覆屋実測図	12
第12図 NR2実測図	12
第13図 NR2断面図	13
第14図 SB1実測図	14
第15図 SB2実測図	15
第16図 SB3実測図	16
第17図 SK25土器出土状況実測図	16
第18図 SK26土器出土状況実測図	16
第19図 SK26出土羽釜実測図	16
第20図 古墳時代遺構配置図	17 ~ 18
第21図 弥生時代遺構配置図	20
第22図 NR1実測図（上層）	21
第23図 NR1実測図（下層・SD78）	21
第24図 NR1上層出土片口鉢実測図	21
第25図 NR1（SD78）断面図	22
第26図 SE5土器出土状況（上層）	23
第27図 SE5土器出土状況（下層）	23
第28図 SE6土器出土状況実測図	24
第29図 壺棺位置図	25
第30図 壺棺1・2実測図	25
第31図 壺棺3実測図	25

第32図	壺棺1、壺・鉢実測図	26
第33図	壺棺2・3実測図	27
第34図	S K 5出土土器実測図	29
第35図	平安時代造構出土土器実測図	30
第36図	N R 2出土土器実測図	31
第37図	ピット出土土器実測図	32
第38図	S D 65出土土器実測図	33
第39図	S D 67出土須恵器実測図	34
第40図	S D 67出土土師器実測図	35
第41図	S K 25出土土器実測図	36
第42図	第4層出土土器実測図	37
第43図	第5層出土須恵器実測図	39
第44図	第5層出土土師器他実測図	40
第45図	製塙土器実測図	41
第46図	石器実測図	41
第47図	縄文土器拓影	42
第48図	S D 78出土土器実測図	43
第49図	S D 78出土土器実測図	44
第50図	S D 78・81・83出土土器実測図	46
第51図	S D 80・81出土土器実測図	47
第52図	S E 5出土土器実測図	48
第53図	S E 5出土土器実測図	49
第54図	S E 6出土土器実測図	50
第55図	包含層出土土器実測図	51

図版目次

図版一	遺跡周辺の調査前航空写真	
図版二	土層断面	1. 調査地中央部断面 2. 調査地東端断面
図版三	平安時代以降の造構	1. 鉗掘削前の状況 2. 鉗検出状況
図版四	平安時代の造構	1. SK5土器出土状況 2. SK6土器出土状況
図版五	平安時代の造構	1. SE2上部検出状況 2. SE2上部検出状況
図版六	平安時代の造構	1. SE2井戸枠組み合わせの状況 2. SE2最下部検出状況
図版七	平安時代の造構	1. SE3と覆屋検出状況 2. SE3上部構造検出状況
図版八	平安時代の造構	1. SE3下部構造検出状況 2. SE3下部構造検出状況
図版九	平安時代の造構	1. SE3最下部検出状況 2. SK3土器出土状況
図版十	古墳時代の造構	1. 造構全景掘削前の状況 2. 造構全景検出状況
図版十一	古墳時代の造構	1. SD65、SD67、SB1検出状況 2. SB1完掘状況
図版十二	古墳時代の造構	1. SB2検出状況 2. SB2完掘状況
図版十三	古墳時代の造構	1. SB2の根石検出状況 2. SB2の根回り石検出状況
図版十四	古墳時代の造構	1. SB3検出状況 2. SB4検出状況
図版十五	古墳時代の造構	1. SK25土器出土状況 2. SK25土器出土状況
図版十六	古墳時代の造構	1. SK26土器出土状況 2. SK26完掘状況
図版十七	古墳時代の造構	1. SD65土器出土状況 2. SD65土器出土状況
図版十八	古墳時代の造構	1. NR2検出状況 2. 第5層内有孔円板出土状況
図版十九	弥生時代の造構	1. SD78検出状況 2. SD78完掘状況
図版二十	弥生時代の造構	1. SD78完掘状況 2. SD78土器出土状況
図版二十一	弥生時代の造構	1. SD78土器出土状況 2. SD78土器出土状況
図版二十二	弥生時代の造構	1. SD80完掘状況 2. SD80上器出土状況
図版二十三	弥生時代の造構	1. SD81・82完掘状況 2. SD81・82完掘状況
図版二十四	弥生時代の造構	1. SD83土器出土状況 2. SD83上器出土状況
図版二十五	弥生時代の造構	1. SD83完掘状況 2. SD83完掘状況
図版二十六	弥生時代の造構	1. SE5第1層土器出土状況 2. SE5第2層土器出土状況
図版二十七	弥生時代の造構	1. SE5第2層土器出土状況 2. SE5第2層土器出土状況
図版二十八	弥生時代の造構	1. SE5最下層土器出土状況 2. SE5完掘状況

図版二十九	弥生時代の遺構	1. 遺構全景 2. S E 6 完掘状況
図版三十	弥生時代の遺構	1. 壺棺 1・2・3 全景 2. 壺棺 1 検出状況
図版三十一	弥生時代の遺構	1. 壺棺 1 内部の状況 2. 壺棺 1 完掘状況
図版三十二	弥生時代の遺構	1. 壺棺 2 検出状況 2. 壺棺 2 内部の状況
図版三十三	黒色土器・土師器・須恵器	1. SK 3・SK 5・SK 6・SE 2・SE 3 出土土器
図版三十四	土師器	1. SK 5 出土土器
図版三十五	黒色土器・土師器・須恵器	1. SK 5・SK 6・SE 2・SE 3 出土土器 2. 第 4 層出土土器
図版三十六	須恵器・土師器	1. NR 1・NR 2 出土土器
図版三十七	須恵器	1. SD 65 杯身
図版三十八	須恵器・土師器	1. SD 65 出土土器
図版三十九	須恵器・土師器	1. SD 67 出土土器
図版四十	須恵器	1. SD 67 提瓶
図版四十一	須恵器	1. SD 67・第 5 層 逸・増
図版四十二	須恵器・土師器	1. SD 67・SK 26・SK 25 出土土器
図版四十三	須恵器・土師器	1. SK 25 出土土器
図版四十四	漢式系土器・土師器	1. SK 25 出土土器
図版四十五	須恵器	1. SD 65・SD 67 杯・甕 2. 第 5 层 甕
図版四十六	須恵器	1. 第 5 层 杯蓋 2. 第 5 层 杯身
図版四十七	土師器	1. SD 67・第 5 层 出土土器 2. 第 5 层 羽釜
図版四十八	須恵器・土師器	1. 第 4 层、第 5 层 出土土器
図版四十九	須恵器・製塙土器	1. NR 2・ピット・第 4 层 出土土器 2. 製塙土器
図版五十	その他の遺物	1. 石鎌、有孔円板、菅玉他
図版五十一	縄文土器・弥生土器	1. 包含層 深鉢・浅鉢 2. 壺棺 1・壺棺 2
図版五十二	弥生土器	1. SD 78 鉢
図版五十三	弥生土器	1. SD 78 壺・高杯・甕
図版五十四	弥生土器	1. SD 78 甕 2. SD 78 甕
図版五十五	弥生土器	1. SD 78 高杯脚部
図版五十六	弥生土器	1. SD 83 壺・甕、SD 85 甕、SD 81 高杯・甕
図版五十七	弥生土器	1. SD 80 甕、SD 83 甕、SD 81 甕、SD 78 壺 2. SD 80 高杯、SD 81 甕、SD 82 甕、SE 6 壺
図版五十八	弥生土器	1. SD 78 甕・高杯、SD 80 甕、SE 5 第 1 层 鉢・甕 壺棺 1 片口鉢、壺棺 3 壺
図版五十九	弥生土器	1. SD 78 高杯、包含層 高杯

図版六十一	弥生土器	1. SE 5 第2層壺・甌・高杯・鉢・小型器台
図版六十二	弥生土器	1. SE 5 第2層甌
図版六十三	弥生土器	1. SE 5 第1層甌・高杯・鉢、第2層壺・甌 2. SE 6 壺
図版六十四	弥生土器	1. 包含層甌底部・高杯脚部 2. SD78甌底部

I. 調査に至る経過

西の口遺跡は、東大阪市横小路町3丁目1508番地外に所在する縄文時代から中世期まで続く複合遺跡である。本遺跡が所在する横小路町付近一帯は、都市化がすすむ本市にあって、唯一田畠を残す市街化調整区域であった。この結果、開発に伴う発掘調査はこれまでおこなわれておらず、幸か不幸か遺跡の空白区になっていた。

この地に、東大阪市教育委員会では市立縄手中学校の生徒増に対応するため分離校の計画があり用地買収がすむなかで、本市施設課より文化財課へ遺跡の有無について照会があった。文化財課では、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内ではないが、周辺には馬場川遺跡、萩山遺跡など重要な遺跡があるので、工事予定地については、新遺跡が発見される可能性が高いと判断し、試掘調査が必要と回答された。その後、文化財課と施設課の協議がおこなわれ、とりあえず、用地買収が完了した土地を対象として試掘調査を実施することになった。試掘調査は、昭和59年4月10日～4月15日まで延6日間、東大阪市教育委員会の主体で計6ヵ所の試掘トレンチ（計24m²）を設定して実施された。

試掘調査の結果、No.1～2・No.4トレンチで縄文時代・弥生時代の遺物包含層が確認され、造構が検出される可能性が高いと考えられ、工事予定地全域の全面調査が必要であると判断された。その後、両者で再三の協議がおこなわれ、校舎建築等で破壊される部分について全面調査を実施し、当初予定されていた切土による造成を変更し、できるだけ盛土による造成をおこない、一部どうしても切土をおこなう場所は全面発掘調査を実施することになった。発掘調査は、用地買収の関係で二回に分けて実施した。1回目は、昭和60年4月30日～9月6日まで2199m²を対象として実施し、2回目は昭和60年11月26日～12月25日まで168m²を対象として実施した。この間、後述のとおり予想以上の重要な造構・遺物が検出され、あらたに西の口遺跡と名付けるとともに、調査中の60年8月11日の日曜日を現地説明会の日にあて、研究者や市民の方々に現場を見せていただいた。

た。

今回の調査は、用地買収が一部完了していない段階での作業であったため、周辺の土地所有者の方々に大変なご迷惑をかけ、またご協力をいただいた。記してお礼申し上げます。



第1図 現地説明会風景

II. 位置と環境

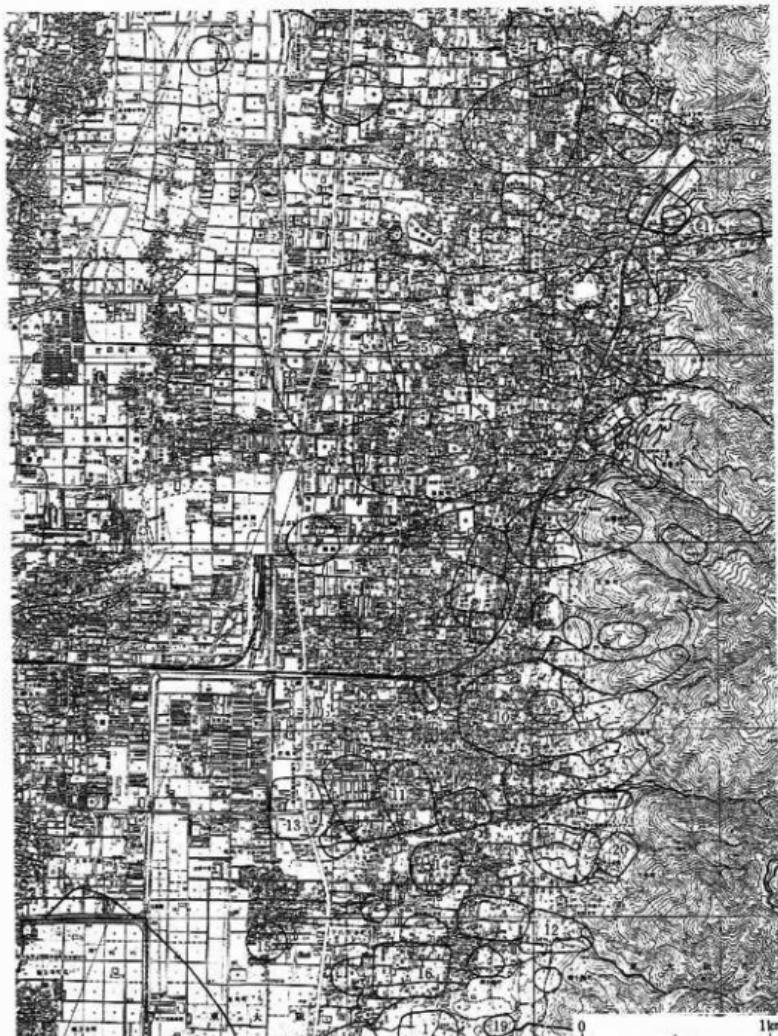
西の口遺跡は、大阪府と奈良県の境にそびえ立つ生駒山地の西麓、東大阪市東地区（旧枚岡市域）の最南端に位置している。行政区画でいえば、東大阪市横小路町2丁目～4丁目が遺跡の範囲であり、南隣の八尾市栗音寺の集落とは指呼の間にある。遺跡は前章で述べたように、遺跡確認のための試掘調査によってその所在が明らかになったもので、今後の調査の進展が期待されるところだが、今回の調査成果から、弥生時代から平安時代にわたる複合遺跡と思われる。今回の発掘調査を実施した地点は横小路町3丁目1508番地他で、分譲建設予定地約15,000m²のうち2,367m²が調査の対象となった。

生駒山地は大阪府側に急で、奈良県側に緩やかな山系をもち、西麓部では、谷あいを流れる小河川による、発達した扇状地の形成がみられる。西の口遺跡も、そうした小河川の一つ、箕後川左岸の扇状地上、標高21～22mの間に立地している。

さて、東大阪市東地区における縄文時代以降の遺跡の立地の状況を観察すると、大きく分けて次の三つのグループを想定することができる。

- ① 山麓から扇状地発端にかけて標高150m前後につくられる古墳時代後期の群集墳。北は辻子谷古墳群から南は淨土寺谷古墳群まで分布している。
- ② 旧東高野街道以東、扇状地中央、標高15～20mに所在する遺跡。北より日下、芝ヶ丘、神並、西ノ辻、鬼塚、繩手、船山、馬場川、西の口など、1～2kmの間隔をおいて点在している。
- ③ 旧東高野街道以西、現国道170号線（外環状線）にかけて、扇状地末端から平野の低湿地へ移行する部分、標高5m前後に営まれる遺跡。鬼虎川、北鳥池、池島などがあげられる。以上のうち②と③に関わる旧東高野街道の存在は大きいと言わねばならない。遺跡分布図で標高15mの等高線と、②の遺跡群は無関係ではありえないのであって、旧東高野街道が②の集落遺跡を結ぶルートとして早くから機能していたことが想定できる。

従観的に西の口遺跡周辺の歴史的環境を見てみよう。繩手遺跡、馬場川遺跡がまず縄文時代に営なまれはじめる。いずれも前記分類の②に該当する。これは、縄文時代の河内平野が河内湾という入江であることに起因するとみられる。この入江が旧大和川の堆積作用により湖沼となり、集落が営なまれるようになるのは弥生時代に入ってからである。鬼虎川遺跡のような弥生時代中期の大集落跡は当地域では、現在のところ発見されていないが、後期に入ると、北鳥池遺跡が出現してくる。ここでは、既往の調査により弥生時代後期～古墳時代中期にいたる複合遺跡であることが判明している。古墳では、4世紀後半の西ノ山古墳、花岡山古墳の前期古墳やえの木塚古墳、心合寺山古墳の中頃の古墳が量は少ないながら点在し、山麓には、山畑古墳群などの後期群集墳が分布している。従って弥生時代後期から古墳時代後期にかけて、西の口遺跡周辺には、さまざまな遺跡が断続的に営なまってきたのであった。



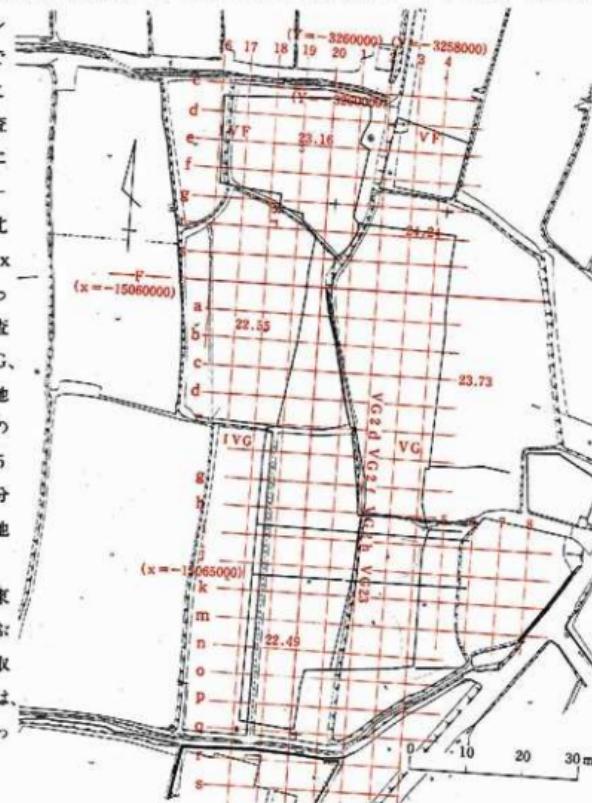
1. 西の口道路
2. 日下道路
3. 荘ヶ丘道路
4. 桐原道路
5. 西ノ辻道路
6. 神立道路
7. 丸虎川道路
8. 兔塚道路
9. 山畠道路
10. 山畠古墳群
11. 鶴手道路
12. 清土寺谷古墳群
13. 北島池道路
14. 鶴山道路
15. 池鳥東道路
16. 馬場川道路
17. 辻子谷古墳群
18. 安吉寺道路
19. 茂山
20. 往生院金堂路

第2図 進跡周辺図

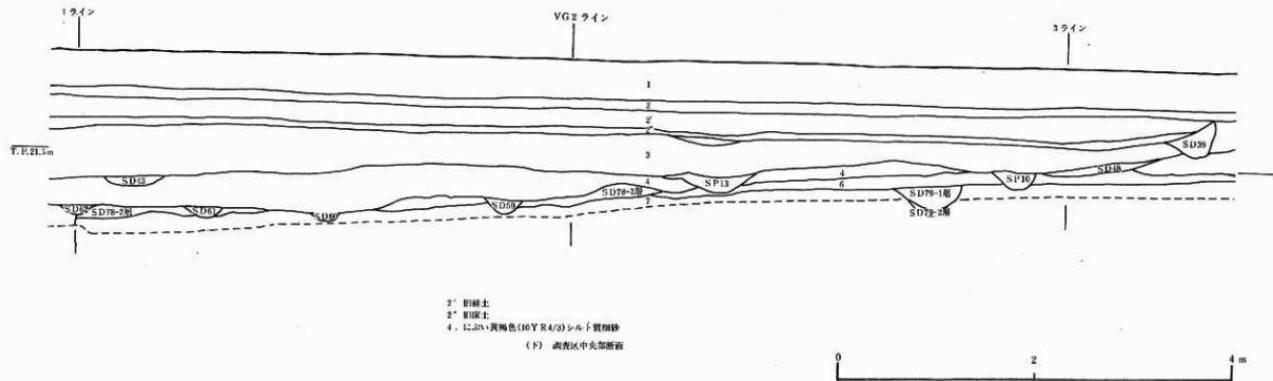
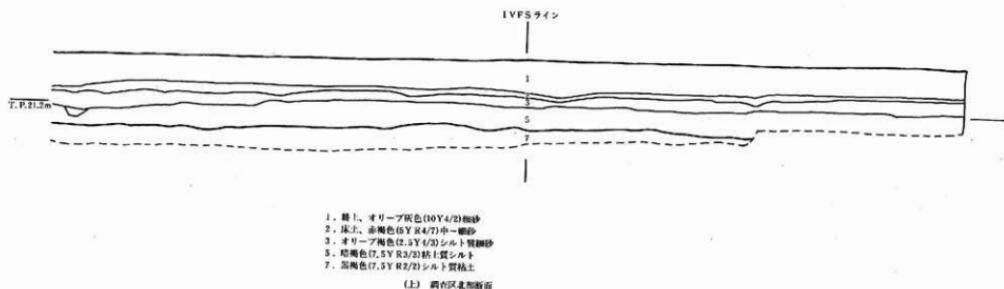
III. 調査の概要

1) 地区割

今回の調査は、第1次調査であり、今後周辺の調査が続く場合を想定し周辺を含めて地区割をおこなった。地区割は、国土座標系に基づいて100m方眼の大区画とさらにその中を5mメッシュの方眼の小区画とした。地区割の基点(0点)を造跡外の西北($x = -150000.00, y = -32500.00$)に置いて100m毎の大区画のX軸を西から東へI・II・IIIとローマ数字で表わし、Y軸を北から南へA・B・Cのアルファベットの大文字で表記し、それぞれの南東の交点をその地区名とした。小区画は、100m方眼の大区画を5mメッシュで区画し、X軸を1・2・3の数字で表わし、Y軸をa・b・cのアルファベットの小文字で表わすようにした。この地区割を今回の調査地点でみると、中央にY軸IVライン($y = -32600.00$)が通り、北寄りにX軸Fライン($x = -150600.00$)が通っている。このため調査地は、大区画IV F、IV G、VF、VG地区の4大地区に区分される。その大区画の中をさらに5m方眼で小区画に区分しているため、調査地の西北端の地区名は、IV F17 dとなり、南東端は、IV G20 Pと呼ぶことになる。遺物の取り上げ、遺構の表示は、この地区名にしたがっておこなった。



第3図 調査地地区割図



第4図 土層断面図

2) 層位

今回の調査地においては、面積が広く、調査地南側で検出した自然河川(NR2)に向かって南側へ傾斜するため、調査地北側、中央東側、中央西側、南側では、それぞれ、堆積している土層が相違している。そこで、全地区で確認した土層をすべて列挙した上で、各地区的特長を記していくことにしたい。基本層序は以下の通り。

- 第1層 耕土層。オリーブ灰色(10YR5/2)細砂。部分的に粗砂を含む。層厚28~36cm。
- 第2層 床土層。赤褐色(5YR5/2)中~細砂。酸化マンガン粒を含む。層厚4~10cm。
- 第3層 オリーブ褐色(2.5YR5/5)シルト質粗~細砂。江戸時代の染付椀を含む。層厚10~45cm。
- 第4層 にぶい黄褐色(10YR5/2)シルト質細砂。律令国家成立期(7世紀中葉)から平安時代の遺物包含層。平安時代の造構面。層厚12~45cm。
- 第5層 暗褐色(7.5YR5/2)粘土質シルト。細礫~粗砂を多量に含む。古墳時代後期の遺物包含層。層厚18~26cm。
- 第6層 黒褐色(10YR5/2)シルト質細砂。弥生時代後期末の遺物包含層。層厚13cm前後。
- 第7層 黒褐色(10YR5/2)シルト。弥生~平安時代の造構面。縄文時代晩期後半の突帯文土器を微量に含む。層厚20cm。
- 第8層 明黄褐色(10YR5/2)シルト質粘土。遺物は含まない。層厚30cm以上。

まず、第1層、第2層については調査地全域に分布している。調査地中央東側では、もと2枚の水田があったのを、第2次大戦後、地上げを行い、1枚の水田にして拡大したため、2'層、2''層として旧耕土、旧床土を確認したが、江戸時代に遡るものではない。第3層は全域に広がるが、やや起伏のある旧地形を平坦にするための客土の可能性があり、北から南、東から西へ向かってかなり厚くなっている。下面において、この層よりもやや粗砂を多く含む層を埋土とする欲状造構が検出されている。

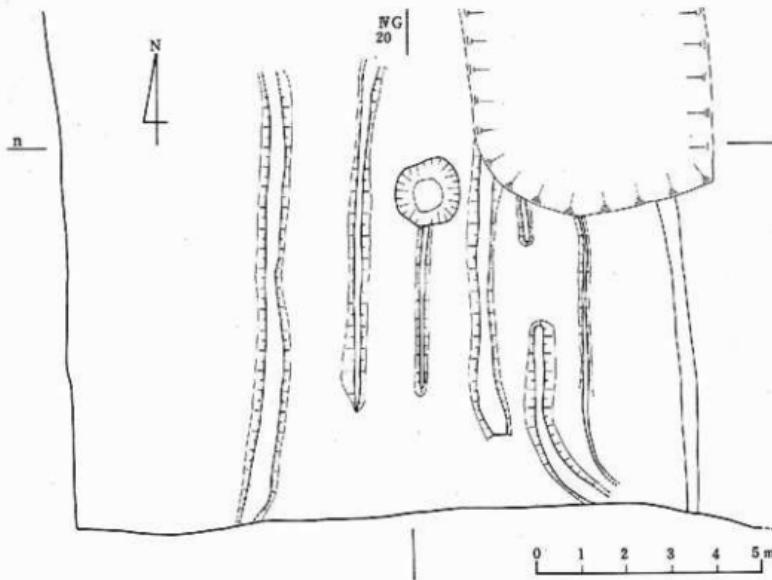
次に、第4層は調査地中央の一部(VG1~2付近)にのみ分布している。調査地中央西側では、近世~近現代の耕地拡大により完全に削平されており、未確認である。この層を切りこんで平安時代の土坑が3基検出されているが、江戸時代の削平のため、本来の造構面は不明。第5層は、調査地北側から中央部にかけて広がる。これは、古墳時代後期の集落造構の分布と一致するものである。第6層は第5層の分布とは逆に、調査地中央から南側にかけて広がりをもっていた。とくに調査地東端では、後世の削平を比較的まぬがれたためか層が厚くなる傾向があった。第6層と第7層とは土色、土質の点で非常に近似している。ただ、第7層は北側のごく一部分で遺物が確認されたのみで、ほとんど遺物を含まないこと、また、第6層に少量ながら砂粒を含むのに比べ、全くそれを含まないこと、などから分層を行った。第8層はいわゆる洪積層に相当するものと思われる。遺物は全く含まれていなかった。本遺跡のベースを形成する層と考えられる。

3) 平安時代以降の遺構

第3層上面で調査区中央を北から南へ流れる近現代の溝5条と、方形の池状落ちこみを1ヶ所検出。山麓部での段々状水田の灌漑施設と思われる。南東部では同じ用途の野井戸(SE1)を確認した。池状落ちこみは一辺5mの方形で一隅のみ丸くなっており、池状落ちこみの南辺で溝と接続していた。その溝には太さ2~3cm大の竹を丸く束ねたものを管状にした装置が施されていた。水量を調整するためのものであろう。

第4層~第6層上面では、調査区全域で溝、畝状遺構を多数検出している。溝は断面カマボコ形を呈し、深さ2~3cm、幅6~7cmの規模であった。畝状遺構は、精査時には溝状で検出したもので、溝の両肩の間に1条から数条の瘤状隆起を造り出したものである。瘤状隆起は、断面の観察によると、4~6層を削って造ったもので、置き土をしたものではない。溝と畝状遺構は、畠地の耘耕時の跡路であろう。埋土は3層とよく似たもので、粗砂の混入がやや少なかった。時期的には、埋土中より瓦器片を確認しているので、中世期の所産であろう。

第5図は、南西部(IV~V G、20-2j~1)で検出した5条の畝状遺構を示す。瘤状隆起の端が不明だが、畝と畝の間が0.8~1.7m、検出した畝の長さ3.5~9.5m、畝の幅20~40cm、深さ6.5~10.8cmを測る。畝の方向はほぼ磁北を示し、南北に造られていた。



第5図 平安時代以降の畝実測図

4) 平安時代の遺構

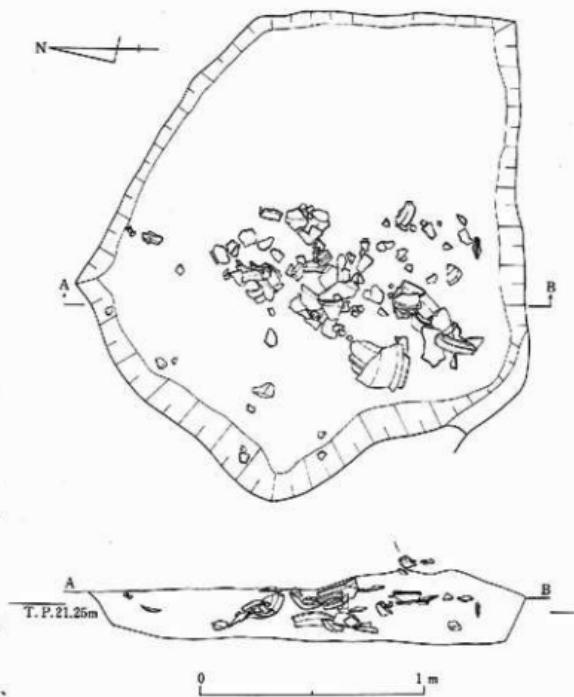
平安時代の遺構として、調査区中央、第4層上面で土坑3基、調査区北東部と中央部西端で第7層上面において井戸2基とそれに付属する柱穴群が検出された。土坑はV G 2 f周辺に偏って存在し、井戸は互いに隔てて位置していた。これは、第3層堆積時の耕地拡大に伴う整地作業に伴って、当該期の遺構を削平したために、土坑や井戸など、遺構として比較的深い規模をもつものだけが残存したことによるものと思われる。遺構面の広がりや集落の具体相など、今後の調査の進展が望まれるところである。

土坑

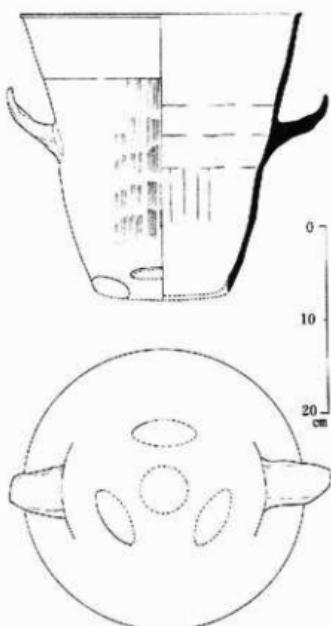
S K 5 (V G 2 g 区) 調査区中央で検出。前述したように、本来の遺構面は、現状よりもう少し高かったものと思われる。東隣のS K 6と同じく、遺構の南部を鉢状遺構 S D 52によって切られているために、

遺構の全容は不明である。検出した規模を記すと、東西2.1m、南北2.0m、中央部での深さ40cmを測る。不整形な土坑で、埋土は、黒色(7.5 Y R 3/6)シルト質細砂で炭の混入が認められた。土色、土質とも第4層に非常に近似していたため、精査したにもかかわらず、規模、性格などについて不明な点が多かった。

ただ、出土した土師器羽釜のなかに底部を打ち欠いたものがあり、何らかの祭祀を行うための土坑であった可能性がある。遺物は、こぶし大の砾に混じって、土師器羽釜、甕、黒色土器楕、須恵器片が一



第6図 SK 5 土器出土状況実測図



第7図 SK 3 内出土箇実測図

井戸

SE 2 (VF 1 r - s 区)

調査区北部で、第7層上面精査時（古墳時代造構検出作業時）に検出した。初め、検出面から古墳時代の土坑と考えていたが、出土遺物より平安時代の造構であることが判明した。掘形は東西2.1m、南北2.2mのやや歪んだ隅丸方形である。井筒は東西1.0m、南北0.9mの長方形をなし、深さは1.2mを測った。井筒内の施設として最下部に円形曲物を置いて取水口とし、その上部と側面に人頭大の蝶を組み合わせ、さらにその上部に掘形に枠板を差し込んで井桁としていた。井桁は東西方向の横板をL字状に切りこんだものに、南北方向の側板を差し込んだものであった。土層観察から、この井戸の構築法が復元できる。即ち、①掘形を掘り、②曲物、石組のあと、③掘形2、3層で裏込めをし、④井桁を何段か差し込んで、⑤掘形1層で再び裏込めを行い、完成したものと思われる。井戸の地上構造は、削平をうけ不明であるが、おそらく枠板を何段も積み重ねて井桁にしたものと考えられる。掘形および井筒の土層中より出土した遺物はきわめて少なく、黒色土器碗、鉢、土師器碗、甕の各破片のみを数えるにすぎない。とくに、この井戸廃絶後の埋土と思われる井筒1層内からは、全く遺物は出土しなかった。井戸周辺に平安時代の集落を示す他の造構がないことから、飲料に供していたかどうかは不明である。

括出土している。

SK 6 (VG 2 + 3 g 区)

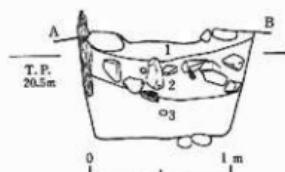
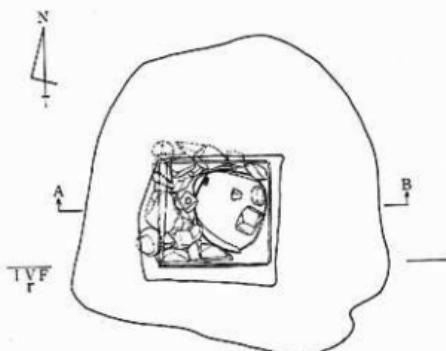
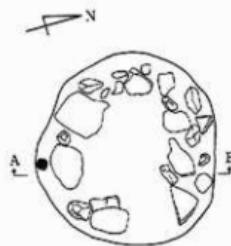
SK 5 のすぐ東に位置している。実長、東西1.3m、南北1.9mを測り、深さ20cm。壁面は直に落ちる、楕円形の土坑と思われる。埋土はSK 5 と同じく黒色シルト質細砂で、微量に炭が混入していた。遺物は一括出土したが、SK 5 と比べると少量で、土師器小型甕、杯、須恵器杯などであった。

SK 3 (VG 3 f 区)

SK 6 のすぐ北に位置。造構の東部を不整形な落ちこみ状造構SK 5 によって切られているため全体の規模はわからない。現存する規模は、東西0.9m、南北1.0m、深さ12cmであった。造構内より土師器甕が約1個体分出土している（第7図）ほかは、土師器と須恵器の細片のみであった。埋土は、SK 5・6 と同じく黒色シルト質細砂で、炭の混入のほかに、中粗砂が混じっていた。これは、後で述べる自然流路の影響と考えられる。造構の性格は不明だが、廐棄坑的なものとは思われない。

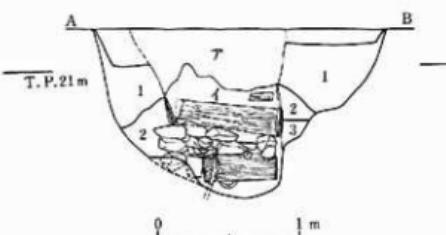
SE 3 (WG 20 f 区)

調査区中央西端、第7層上面で検出。掘形は不明。井筒は一辺1.3mの円形をなし、深さ1.3mを測る。最下部に小型の曲物を二段に据え、その上に入頭大の礫を組み込み、さらにその上部に枠板を差し込んだ構造をもつと思われるが、枠板の遺存状態が悪く不詳の点が多い。井戸上面から多量のこぶし大の礫が検出されたが、これは廃絶時に礫を投棄したものと思われる。出土遺物はきわめて少なく、黒色土器壺の破片を1点確認したのみであった。



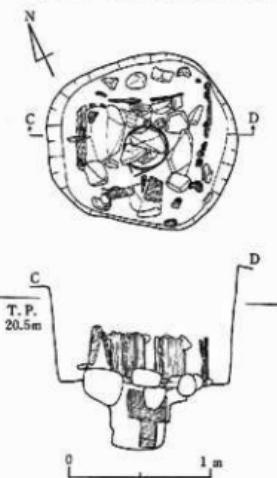
1. 黒褐色(2.5Y3/2)細砂
2. 粘結灰(7.5G Y3/1)粘土
3. ハオリーブ灰色 砂混粘土

第9図 SE 3 上部構造実測図

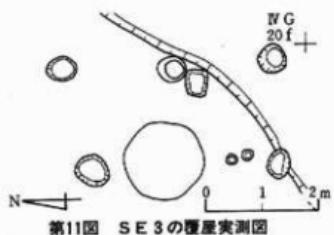


1. 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土に地山がブロック状に混入
 2. 黒色(10Y R2/10)粘土質シルト
 3. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土
 4. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト
- イ. オリーブ色粘土質シルト

第8図 SE 2 実測図



第10図 SE 3 下部構造実測図



第11図 SE 3 の覆屋実測図

S E 3周辺の柱穴群 (NG 20f 区)

S E 3の周辺で合計6個のピットを検出した。検出面は第7層上面で、自然流路による削平をうけ、ピットの深さは5cm程度しか遺存していない。径は40cmを測る。柱穴群が周間に見られないことから、S E 3の覆屋と考えられる。規模は東西1間（柱間2m）、南北2間（同）で、柱穴群内の遺物は皆無であった。

5) 古墳時代の遺構

調査区北部を中心に、古墳時代の集落の一部を検出した。遺構は、掘立柱建物5棟、土坑3基、溝10条、自然流路1本、柱穴群1ヶ所を数える。検出面は第6層ないし第7層上面であった。以下、遺構毎に略説したい。

自然流路

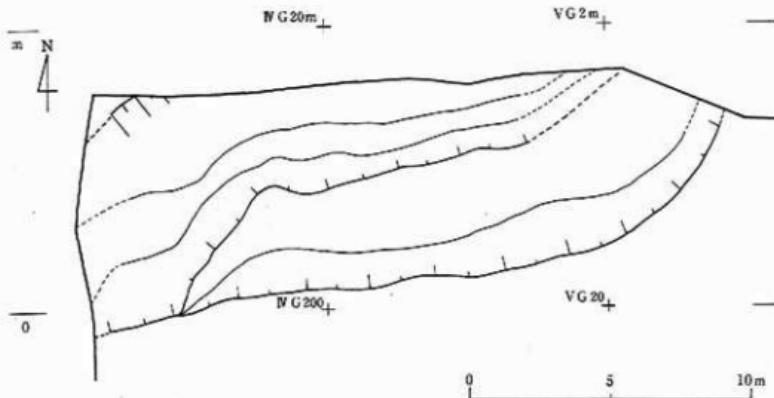
N R 2 (NG 20n~0、VG 4n~0区)

調査地最南端を北東から南西へ流れる自然流路。幅7m、最深部1.6mの規模をもつ。遺物のとり上げは1~2層を上層、3層を下層とした。流路内の堆積土は砂層を主体にしている。調査区南東部の2つの溜池はこの自然流路を塞ぎ止めて築造したものであろう。上層より須恵器壺、下層より須恵器杯蓋、身が出土したが、出土の密度は高いものではなかった。

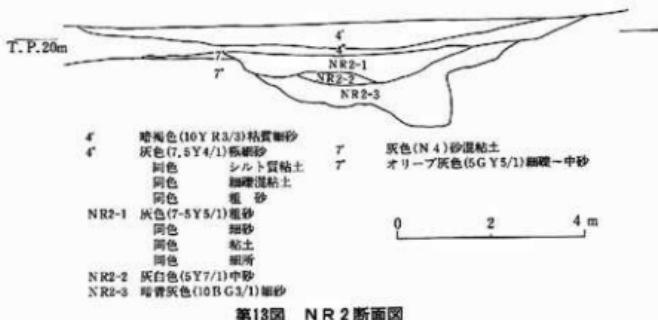
掘立柱建物

S B 1 (WF 20r~s、VF 1r~s区)

調査地北部で検出。桁行3間（柱間1.7m）、梁間2間（柱間2m）の東西棟掘立柱建物。主軸の方向は、N-73°-Wである。東側梁間の中間の柱穴はS E 2によって切られている。柱掘形



第12図 NR 2 実測図



第18図 N R 2 断面図

は一辺60cmの隅丸方形または円形をなし、柱痕跡の径は30~40cmと大きく、今回検出した5棟の掘立柱建物のうち、もっとも規模の大きいものである。集落の中心的な家屋であろう。かなりの削平をうけながらも柱の根入は30cmの深さに達していた。

S B 2 (NG20a~VG1a区)

S B 1 より S D 67の対岸、約8m離れた地点に位置する。桁行3間(柱間1.3m)、梁間3間(柱間1.3m)の正方形をなす掘立柱建物。西側の柱穴列のうち1個は、平安時代以降の落ち込みにより失われていた。方位は、N-3°-Eであった。柱掘形は不整形な円形で径80cm、柱痕跡は径30~40cmを測る。柱間が短く、柱掘形が巨大であることから、倉庫的建物と推定されよう。柱穴の1つ、S D 98は柱痕跡の周囲に3個の花崗岩質の根回り石を配していた。柱の根入は30cm。S P 45、47は根石が残存していた。

S B 3 (VG3~4C区)

調査地中央北側、S B 2 より南東12mに位置。桁行3間以上(柱間1.5m)、梁間2間(柱間1.8m)の南北棟掘立柱建物。桁行側、南端の柱穴は自然流路により欠失。S B 1、2と比べて、柱穴の規模は小さく、柱掘形は径40cmの円形ないし梢円形を呈し、柱痕跡は径25cmを測る。方位はほぼ磁北を示す。付属的な家屋と考えられる。根入は35cm。

S B 4 (VF4r~5r, 4s~5s区)

調査地北東部、S B 1 より東へ16mに位置。桁行3間(柱間1.2m)、梁間2間(柱間1.6m)の東西棟掘立柱建物。主軸の方位はN-80°-Wである。柱掘形は径50~60cmの円形で、柱痕跡は径20~30cmをなす。柱根入は20cm。

S B 5 (VF4s区)

S B 4 のすぐ南に接している。柱穴の切り合い関係からS B 4 より新しい建物である。桁行2間(柱間2m)、梁間2間(柱間1.7m)の東西棟掘立柱建物。方位はN-80°-Wで、S B 4と同じ。S B 4 の跡で替えて住む家屋であろう。柱掘形は径50cmの円形で、柱痕跡は径20cmであった。柱根入は23cm。

各建物の柱穴より須恵器、土師器の破片を確認した。遺物はほぼ6世紀前半におさまること

ろから、これら建物群が同時に存在した可能性は大きいと思われる。

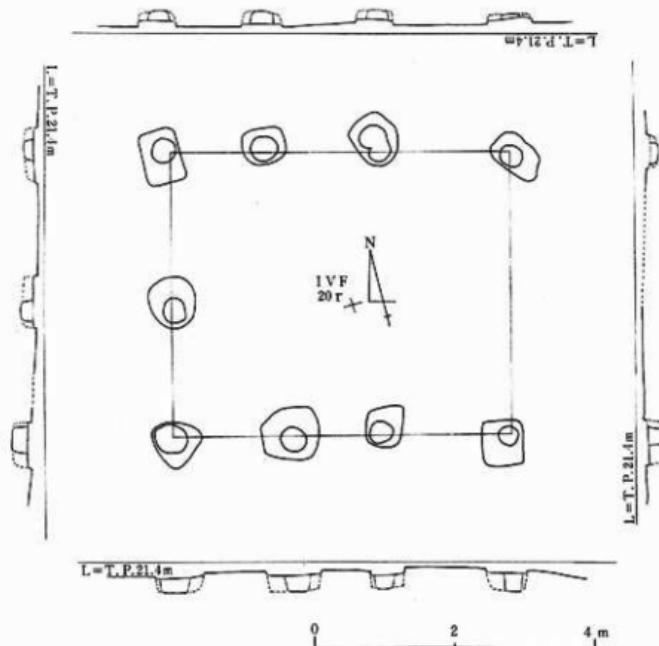
土坑

S K25 (V F 5 s~t区)

調査区北東部で検出。造構の東側は調査区外へ延びているため全容は不明。東西1.6m以上、南北1.9mの円形の土坑である。造構北端では2層に分かれており、その凹みに多数の遺物が出土している。遺物は、土師器甕、壺、高杯、羽釜、須恵器無蓋高杯、壺、平瓶、韓式系土器の甕を検出した。時期的には、5世紀後半から6世紀後半を含みこむもので、他の集落造構とは趣を異にしている。深さ25cm。

S K26 (V G 2 g区)

調査区中央で検出。東西0.5m、南北1.4mの帆立貝形の土坑。深さ20cmを測る。造構の北側で土師器甕が1個体分出土し、その口縁部を打ち欠いているところから、甕棺墓の可能性がある。第19図は、S K26より出土した土師器羽釜である。現存口径42.4cm、器高63.8cmを測る。体部外面から底部にかけてハケメ調整し、内面にはユビオサエが残る。



第14図 SB 1 実測図

柱穴群

調査区北西部（IV F18ライン以西）において密集した柱穴群を検出。何棟かの建て替えによるものと思われ、東西1間以上、南北3間の建物を想定しうるが、現状では詳かにしない。柱穴は径50cm、深さ20cmのものが多い。

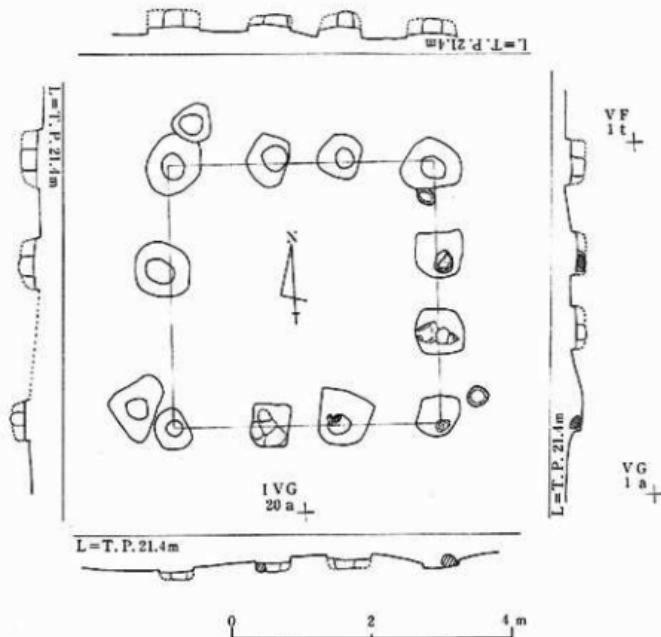
溝

S D 65

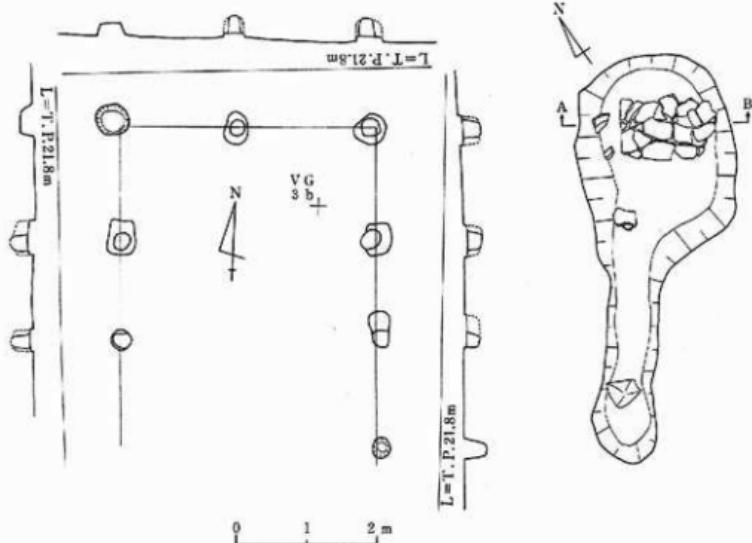
調査地北端より南へ流れる溝。幅0.3~2.0m、深さ25cmを測る。溝の南端はS D 67と交わって広がりつつ終わっている。北端がきわめて狭くなっているのは、S D 65の起点を示すものであり、そのことから、S B 1の西辺を区画する機能をもっていたと考えられる。溝内より、須恵器杯蓋、身、高杯、聴、平瓶、土師器甕、杯、鉢、羽釜が多量に出土した。

S D 67

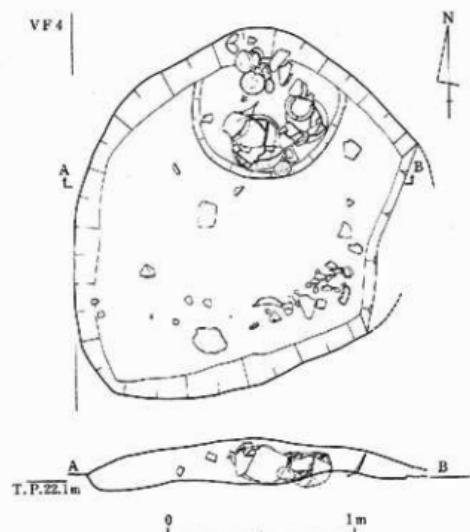
調査区北東から西へ流れる溝。幅1.3m、深さ30cmを測る。精査したが、S K 25との先後関係は不明である。S B 1、4、5の南辺を区画する溝であろう。



第15図 S B 2 実測図



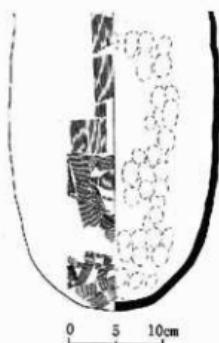
第16図 SB 3 実測図



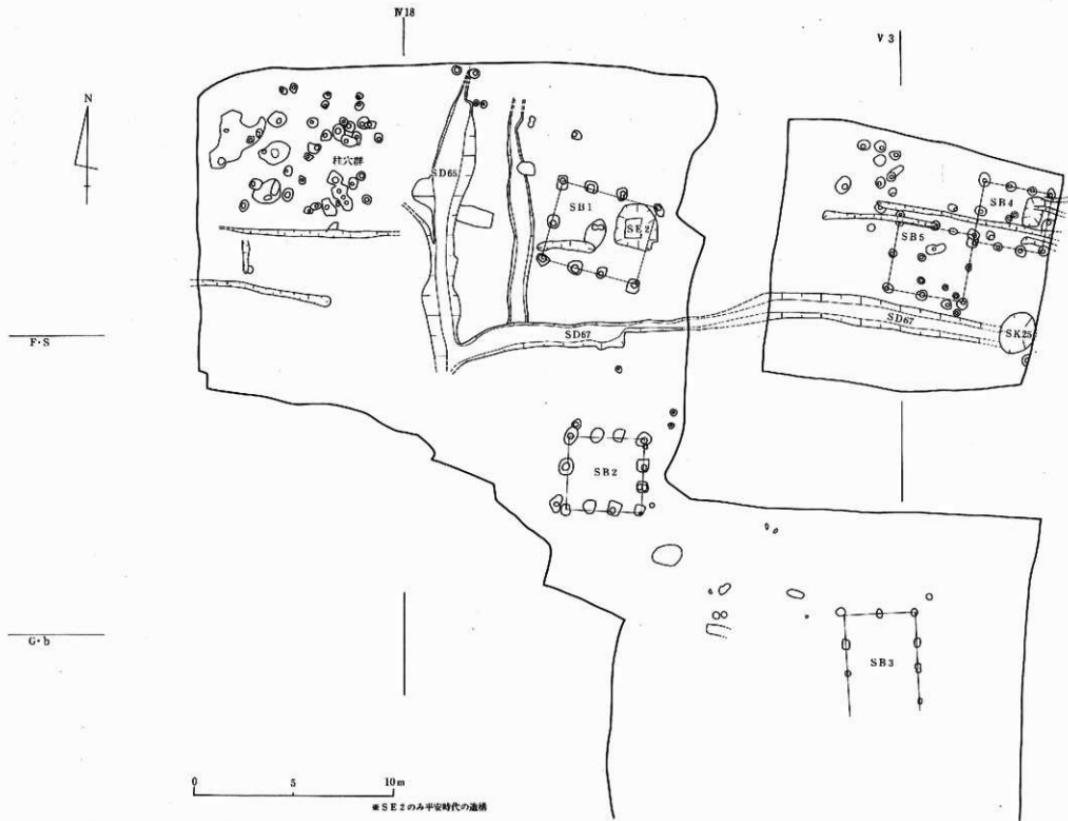
第17図 SK 25内土器出土状況実測図



第18図
SK 26土器出土状況実測図



第19図 SK 26内出土羽茎実測図



第20図 古墳時代造構配置図

小結——西の口遺跡における古墳時代の集落について

ここでは本遺跡での古墳時代遺構をめぐる若干の問題点を挙げ、本節の小結としておきたい。

(1) 古墳時代の遺構の範囲

昭和60年11月～12月に追加して調査を実施した地区（VF 3r-s～4r-s）において、調査地最北端部で地山面を切りこんだ自然の落ちこみを検出している。これは北方へ延びているものと思われ、掘立柱建物の柱穴は、落ちこみを避けて掘られていた。また、遺構群の北方には箕後川が流れ、地形的に、今回の調査地から北へ傾斜することが予想されることからすれば、当該期の遺構分布の北限は自明の理として限られよう。南限としては、SK 26を除いて、ほぼ後述のSD 78上層（NR 1）までに限定されている。従って古墳時代の集落は箕後川の河岸段丘上最高位にあり安定した地盤に立地しているといえるだろう。その範囲は南北約50mの幅で東西方向に広がりをもち、集落としてはコンパクトにまとまった景観が想像される。

(2) 掘立柱建物について

今回の調査により、SD 65とSD 67によって区画された中にSB 1、4、5が、区画外にSB 2、SB 3が配置されていることを確認した。周辺部の調査の進展により、集落の具体相が明らかになると思われる。現状での考察はあくまで予測にしかすぎないが、柱穴の規模からいえば、SB 1が在地の豪族の主家であり、SB 2が倉、SB 4、SB 5が住居、SB 3が副的な建物になると思われる。

SD 65とSD 67の先後関係は、遺構面精査の段階では詳かにしなかったが、後述するように出土した須恵器の年代観からすれば、SD 65がSD 67より先行するようである。

さて、市内における掘立柱建物については、中西克宏氏により資料の集成がなされている。^{注1)}それによると、現在までに、芝ヶ丘遺跡、神並遺跡、鬼虎川遺跡、鬼塚遺跡、西岩田遺跡及び西の口遺跡で、合計6遺跡25棟が確認されている。時期的には、4世紀から6世紀後半に及んでいるが、5世紀後半から6世紀前半までの時期に築かれたものが多いようである。規模では2×2(間)、または2×3(間)のものが多い。従って本遺跡における掘立柱建物は、市内出土例からすれば、最大公約数的だといえそうである。

次に、建物区画施設として今回、柵列を確認できなかった。このことが、本遺跡の建物区画の特徴なのか、あるいは今回のものがそうなのか、周辺の調査例の増加を俟って考えねばならないが、ここで問題提起をしておく。時期的にも、小笠原好彦氏が明らかにされたように、濠(溝)^{注2)}で囲まれた古代豪族の居宅の出土例は7世紀以降に下るようであり、今回のSD 65やSD 67のように後世の削平を考慮しても深さ30cmの溝を濠と呼べるかどうか、今後の課題としたい。

注1) 中西克宏「東大阪市域における古墳時代の掘立柱建物」(『協会ニュース』1-3、1986年)

注2) 小笠原好彦「古代豪族の居宅の類型」(『帝塚山考古学』4、1984年)

6) 弥生時代の造構

ここで記述する弥生時代の造構とは、弥生時代末から庄内期に属する造構である。この時期の造構は、古墳時代の造構及び平安時代以降の田畠の整地作業によってかなり削平されており溝、井戸といった比較的深い掘削を伴う造構のみが検出されている。

今回の調査で検出した弥生時代の造構は、溝6条、井戸状造構2ヶ所、土塙1ヶ所、ピット3ヶ所である。以下順に説明を加えていくことにする。

S D78 (N R 1)

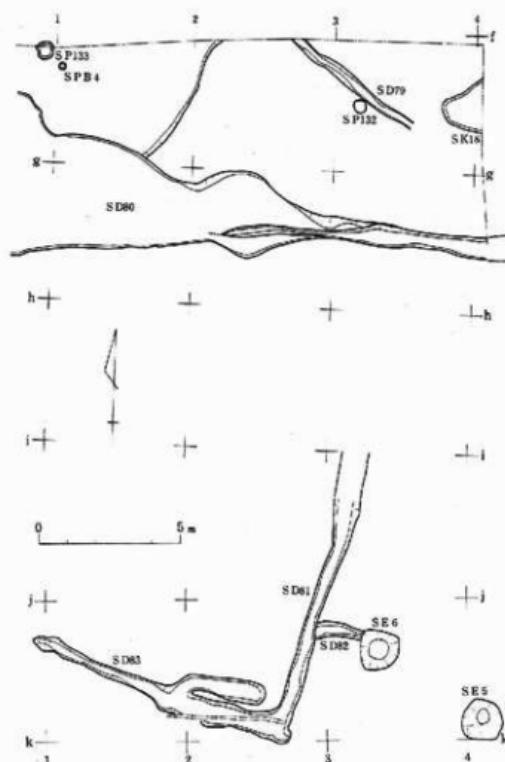
第3層(オリーブ褐色土)下部、第6層上面で検出した。検出当初は、両肩の輪郭が不明瞭であり、内部には細砂～粗砂が認められるところから比較的新しい時期の自然流路と考えていた。その後、流路内の掘り上げをおこなった結果、下層より弥生時代後期の土器が多量に出土したことから、弥生時代に機能していた自然流路が古墳時代以降に埋没し、その後も凹みとして残っていたものと思われる。

S D78は、VG 4 C区からVG 1 e区まで延長約20mを検出した。東北から西方へ蛇行しながら、西側で浅く大きく広がっている。トレンチ東端では比較的明瞭に溝の肩を検出することができるが、西端では、明らかにすることはできない。

トレンチ東端での規模は、幅3.8m、深さ0.5mを測る。但し、ベース面の第6層は、南から北へ低くなってしまい、南肩での深さは約0.9mになる。S D78の上層の堆積土をトレンチ東壁で観察すると

- 1層 耕土
- 2層 床土
- 3層 オリーブ褐色シルト

質粗～細砂



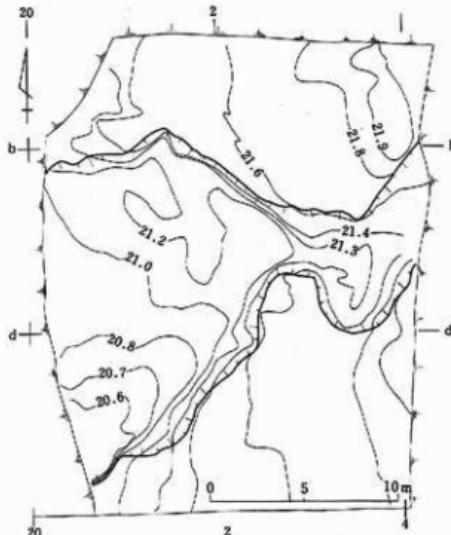
第21図 弥生時代造構配置図

となる。層序の項でも記したように第3層はほぼ中世期以降の堆積層と考えられるところから、SD78は少なくともこの時期には完全に埋没していたと思われる。

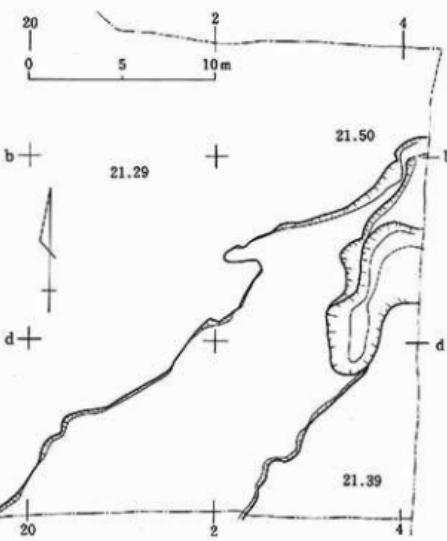
次に流路内の堆積土を観察すると
 A層 オリーブ褐色粗砂～極細砂
 B層 黒色細砂
 C層 黒色シルト質細砂
 D層 黑色粘質シルト

となるが、大きくはA層とB層以下の2層に分層できる。また、A層とB層の間にはSD78北端で^ご層黒褐色細砂(7.5YR 2.5%)が認められる。第5層は、基本層序にもあるとおり、古墳時代に比定される層であり、古墳時代中頃にはSD78の下層はほとんど埋没し、西側の深いところは中世頃まで浅い凹みとして残っていたことが想像される。この状態は、第22図に示したとおりである。出土遺物は、B層以下から弥生時代後期後半の土器が出土しているが、土器の大半は溝の肩から出土し、流路底にはほとんど遺物は認められなかった。A層の上層から古墳時代の須恵器片、奈良時代の片口鉢(第24図)などが少量出土している。

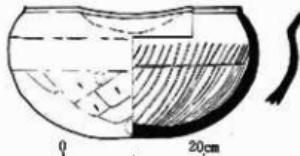
これらのことから、SD78は弥生



第22図 SD78(NR1)平面図(上層)



第23図 SD78(NR1)平面図(下層)



第24図 NR1上層出土片口鉢実測図

時代後期後半に掘削された溝の一部を検出したと考えられ、溝は東側の調査範囲外へ広がると思われる。また弥生時代末の土器が溝肩に集中して認められ、一部は溝内に落ち込んだ状況を示しているところから、集落の中心も溝に囲まれる東側に存在すると判断される。

出土遺物は、溝内及び肩の部分から弥生時代末の土器が多量に出土している。庄内裏は2点と少なく他の溝とは違っている。弥生時代末の土器の中でも高杯の出土量が多く、壺の出土量が少ないのが特徴である。

S D79～S D83

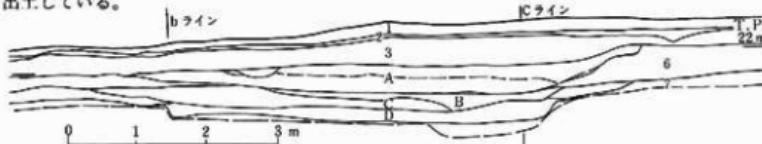
S D79からS D83までの5本の溝は、調査地の東南端で集中して検出されていた。この地域は、調査地の中で最も高い位置にあり、中世以降の整地によってかなり削平されていることが予想された。結果は当初の予想どおり、弥生時代の包含層は中世期の整地で削平されており、溝、井戸など比較的深い造構のみが検出された。

S D79は、VG 4g地区で延長約5.0mのみ検出された。幅0.4m、深さ0.2～0.3mで東北から北西に向かって流れる。東南端は、後世の削平によって失なわれたものと考えられる。溝内には何らの遺物も認められなかった。

S D80は、1h地区～4h地区で検出された。東から西へまっすぐに伸びている。東端では幅0.7m、深さ0.5mの規模を測り、西にいくにしたがって徐々に幅が広がっている。トレンチ東端から西へ9m付近(VG 3 h区)で溝は深さ0.15～0.2m程度に浅くなるとともに幅約2m以上と急に広くなり、さらに西では広く浅くなり両肩も不明瞭になる。溝内より弥生時代後期末の甕、高杯、床内裏などが出土している。

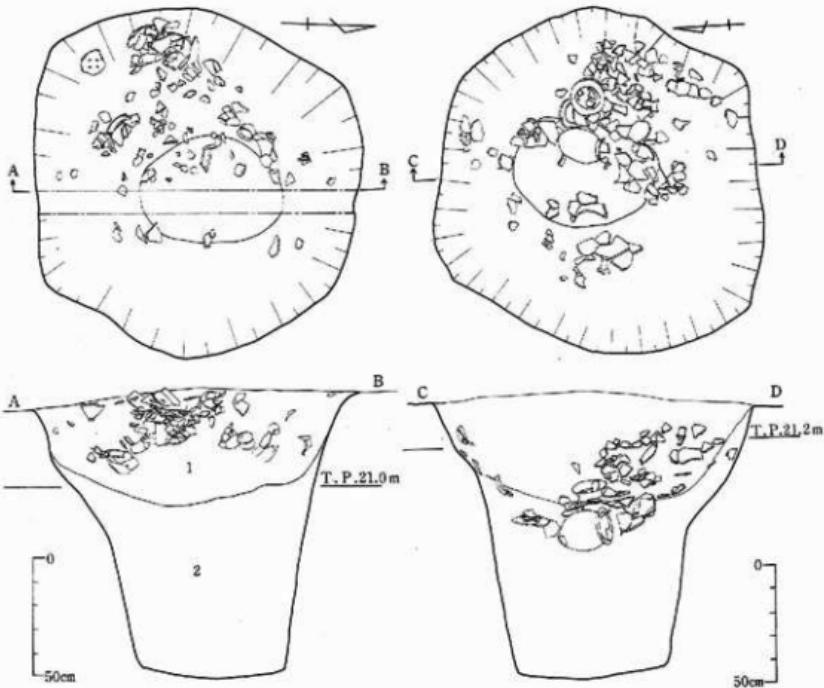
S D81～83は、検出した順に番号を付したが、もとは同一の造構と考えられる。S D81は、北端を後世の削平によって失なわれているが、ほぼ幅0.8m、深さ0.3m～0.5mの規模で北から南へ続き3k区で直角に西へ方向を変え、同様の規模で約10m検出できた。西端は、後世の削平によって失なわれているのか、ここで終るものか判断できない。西端では幅0.5m、深さ0.15mの規模になる。S D82は、東端でSE 6に西端をS D81に切られている。造構の切り合い関係からもっとも古く掘削された造構と考えられるが、出土遺物からはほとんど時間差はない。

出土遺物は、S D81と83から多く認められ、弥生時代後期末の短頭壺、甕、高杯と庄内裏が出土している。



1. 細土 6. 黒褐色(10Y R3/3.5)粘質シルト A. オリーブ褐色細砂～極細砂(2.5Y4.5/3) D. 黒色粘質シルト(10Y R1.9/1)
2. 床土 7. 地山. 黑褐色(10Y R2/2)シルト B. 黒色細砂(10Y R2/1)
3. オリーブ褐色(2.5Y4/3.5)シルト質粗一頗細砂 C. 黑色シルト質細砂(7.5Y R)

第25図 NR 1 (SD78)断面図



第26図 SE 5 土器出土状況（上層）

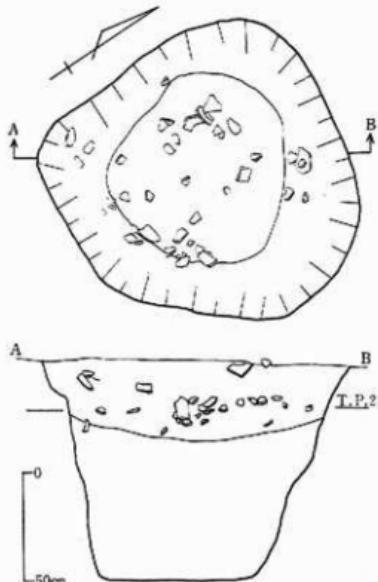
第27図 SE 5 土器出土状況（下層）

SE 5

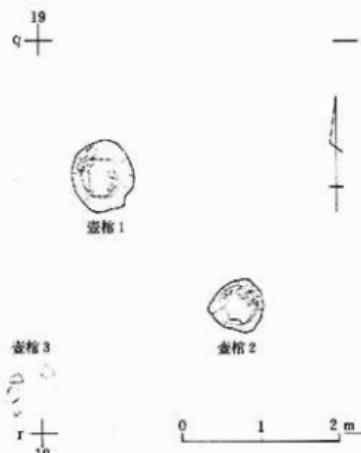
SE 5は、トレンチ南東端（VG 5地区）で検出した。上部は、削平されていると思われる。井戸は南北1.4m、東西1.5m、深さ1.25mを測り、圓丸方形形状を呈する。素掘りで井桁、井筒等の痕跡は認められなかった。地表より約0.5m下位までゆるやかに斜めに掘り込み、それより以下はほぼ垂直に掘り込んでいる。底部は、ほぼ平坦になっている。現在では、ほとんど湧水もなく、実際に井戸として機能していたものかどうか判断できない。

井戸内の堆積土は、大きく1層と2層に分けることができる。1層は、黒褐色（10YR%）粗砂混リシルトで多量の土器が出土している。2層は、オリーブ黒色（5Y%）シルト質粘土層でほとんど遺物は認められない。1・2層の境界は、遺物の出土状況によって明瞭である。

上層では、井戸西側肩部に壺を中心として破壊された土器が認められた。上層の土器を取り除くと井戸東側肩部にかたまって壺の完形品を中心とした下層の土器を検出した。土器は井戸の東肩から斜めに落ち込んだ状況を呈しており、底に並べられたものではない。これらの状況



第28図 SE 6 土器出土状況実測図



第29図 壺棺位置図

から土器は、井戸が半分近く埋まった段階で祭祀などの行事がおこなわれ、その後東側と西側から土器を内部に落し込んだものと思われる。このことは、完形の土器が多く含まれていることからもうかがわれる。

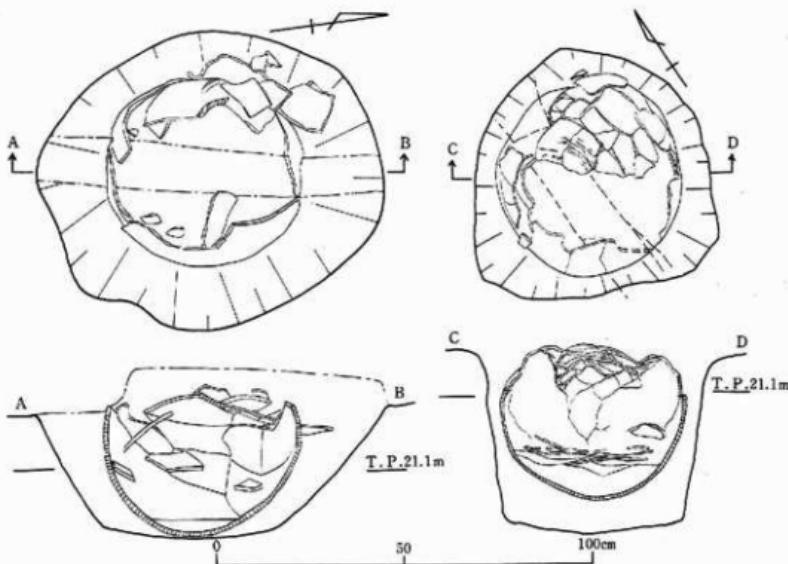
SE 6

SE 6 は、SE 5 の北西約3m (VG 4 k区) の位置で検出した。東西1.38m、南北1.35m 深さ1.1m を測る。隅丸方形を呈している。井戸は、素掘りでSE 5 と同様井桁、井筒等の痕跡は認められなかった。内部は、若干斜めに掘り下げており、底は平坦になっている。堆積土は、1層(黒褐色10YR%)粗砂・中砂混シルト)と2層(黒色7.5Y%)シルト質粘土に分けることができ、1層内より弥生土器壺・甕・高杯などが出土しているが、いずれも破片で完形になるものはない。

壺棺 1

壺棺 1 は、今回の調査地区のもっとも北側の地点 1 VF 20 r 区で検出された。南北0.9m、東西0.78m、深さ0.45m の皿状に凹む墓底底部を上にして、ほぼ正立の状態に据えられていた。壺棺の蓋及び上部は、後世の削平によって失なわれているが、完全な形に復元することができた。壺の頸部から上の口縁部を打ち欠いており、これは埋葬時に口縁部を大きくするため故意に打ち欠いたと思われる。また頸部付近に鉢形土器の破片を検出しているので、これが蓋になると考えられる。内部からは何らの遺物も認められなかった。

片口鉢 (第32図-4)・口縁部の約1/2が残るのみで底部は欠損している。すり鉢状の体部にゆるやかに外反する口縁部がつき、口縁端部は角張って終る。口縁部に幅4.0cm の片口が付く。壺棺周辺には、これ以外の土器は出



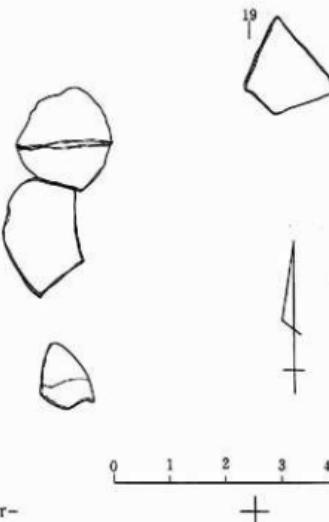
第30図 壺棺1・2実測図

土していないので、鉢を蓋に転用したものと考えられる。

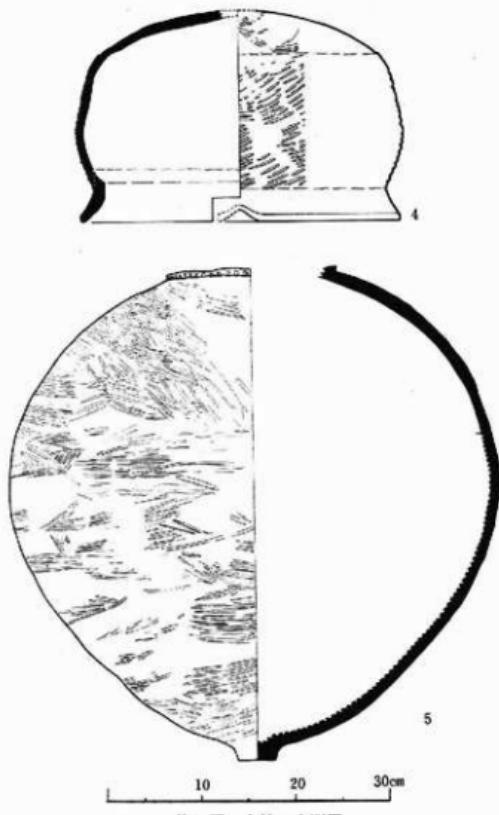
壺（第32図-5） 口縁部を欠損している以外は、ほぼ完全な形をとどめる。残存の器高52.2cm、最大復径52.0cm、底径4.2cmを測る。最大復径が体部中位にある球形の体部にわずかに突出する小さな平底の底部がつく。頸部に刻目を施した突帯を1条めぐらす。体部外面はヘラミガキ、内面はナテ調整により仕上げている。弥生時代末から庄内期の前半に属するものと考えられる。

壺棺2

壺棺2は、壺棺1の南東約2mの地点(NF20r区)で検出した。南北0.67m、東西0.64m、深さ0.5mの隅丸方形状の墓壇内に底部より約10m浮いた状態で、壺棺1と同様に頸部を上



第31図 壺棺3実測図



第32図 壺棺 1 実測図

器の周辺の精査をおこなったが墓塙などの施設も認められず、壺も他の壺棺と比較して小型であるため、壺棺と断定することはできない。ただ他の壺棺と近接していること、單一で出土していることから可能性が高いと考え、ここで取り扱うこととした。壺は、体部の中央部分を残すのみで、口縁部、底部は欠損している。同一個体が、4片となり散乱しており、蓋となる土器は認められない。

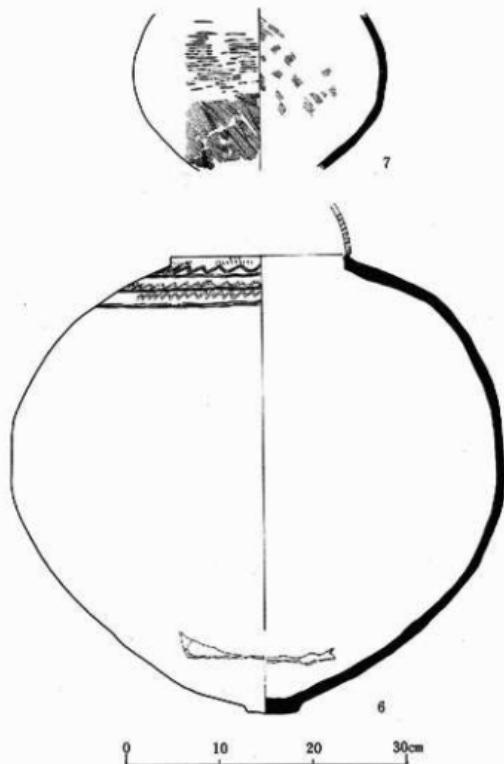
壺（第33図-7） 口縁部、底部を欠損しており、全体像は不明。残存の器高17cm、復元の復元径26.8cmを測る。体部外面は、上半部はヘラミガキ、下半部は比較的細い叩目（2条/cm）のちヘラミガキ調整で仕上げている。内面は刷毛目で調整している。胎土に長石、石英などの石粒を含む他地域産の土器である。

に向けて正立の状況に据えられた。墓塙は、ほぼ垂直に掘り込んでいた。壺は、頭部から上の口縁部を故意に打ち欠いているが、周辺からは蓋として使用されたと思われる土器は検出できなかった。

壺（第33図-6） 口縁部を欠損している以外は完存。残存の器高45.2cm、復元52.3cm、底径5.1cmを測る。最大復元が体部中位にあり、わずかに扁平な器体に突出する小さな平底がつく。頭部に刻目を施す突帯が一条付き、体部下半には長さ15.6cmの横長の孔があけられている。体部外面の調整は、風化が激しく不明、内面はナテ調整により仕上げられている。壺棺1と同様、弥生時代末から庄内期の前半に属すると考えられる。

壺棺 3

壺棺3は、壺形土器が散乱した状況で検出した。壺形土



第33図 収穫2・3

SK 18

トレンチ東端(VG 4 g区)

で検出した。東側部分が調査地外へ広がるため、全体の規模、性格などは不明である。今回の調査で検出した規模で、南北2.0m、東西1.4m、深さ0.2mを測る。底面は平坦で、旧地形にそって東から西へゆるやかに傾斜している。内部より、少量の弥生時代末期の土器片が出土している。

その他の遺構

ピット状の遺構を3ヵ所検出している。SP 133は、VG 1 g区で検出した。径50cm、深さ30cmの規模を測る。SP 132は、VG 4 g区で検出した。

径40cm、深さ30cmの規模を測る。これらのピット状の遺構は、第6層(地山)上面で検出しているが、この遺構につながるピットもなく、単独で検出していることやピット内部より出土遺物がまったく

く認められることなどから、弥生時代に属するものか全く不明である。

この他に今回の調査では確認できなかったが、縄文時代の遺構が今後検出される可能性がある。縄文土器は、IV F 18 f区周辺で縄文時代晚期後半の土器が出土しており、IV G 20 h区では後期後半の土器が出土している。特にIV F 18 f区で検出した土器は、古墳時代、弥生時代の遺構のベース面・第6層中より出土している。このことから、縄文時代の遺構が今回の調査地より西あるいは北側で検出される可能性がある。本遺跡の150m北側には縄文時代晚期の馬場川遺跡という大遺跡もあり、今後周辺の遺跡の調査がすすめば、明らかになると考られる。

IV. 出土遺物

1) 平安時代の土器

まず器形毎の分類概要を試みたい。

(1) 黒色土器

椀3点、鉢1点を数える。椀は田中塚氏分類のA類のみで、見込みのヘラミガキ調整の有無により大別(A₁, A₂)され、A₁は体部外面の調整法によりA_{1-a}, A_{1-b}に分類できる。

(2) 土師器

杯は高台の有無により大別(A, B)する。Aは体部内面の暗文の有無によりA₁とA₂に分類できる。

椀は低い貼り付け高台をもち、口縁部内外面での強いヨコナデのため、口縁下端に鋭い稜線⁽¹⁾がつき、それ以下は未調整のまま残している。これは平城宮分類のe手法にあたる。

羽釜は、半球状の体部に短く斜下方に鉗がつくもの(A)と、長胴形の体部に鉗がつくもの(B)に分類される。Aは、鉗の機能を重視すれば、「壠」と称呼すべきかもしれない。

S K 5 出土土器

良好な一括の状況で出土した。とくに土師器羽釜の出土は顕著であった。

土師器 杯A₂(II)、椀₁は、高台の有無の点を除外すれば、調整法では前述のe手法によっている。即ち口縁部内外面を強くヨコナデ調整する他は未調整で、体部外面には成形時のユビオサエ痕が顕著に認められる。

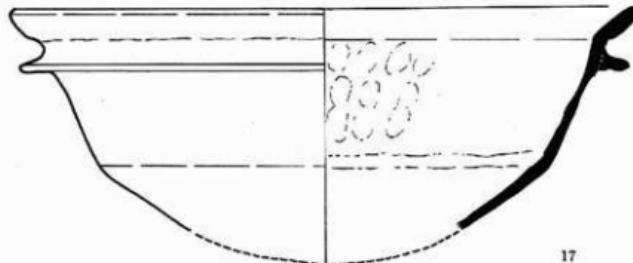
羽釜A(17, 18, 19)は今まで市内で出土したことのない新資料である。器形の全容が把握する17で言えば、丸底から外へ開き、体部下位で大きく屈曲し、外反しながら口縁部へ続いている。これは、土器の煮沸用具としての機能によるものか、または竈などとの接続形態を反映したものであろうか。ただ、17, 18とも体部外面下半には煤状の付着は認められず、17には底部を打ち欠いたとも思われるでの、羽釜棺として二次使用された可能性が考えられる。編年的には、菅原正明氏の型式分類⁽²⁾で言えば、河内A型とB型との狭間、即ち、長胴形羽釜から半球形羽釜に移行する段階(体部下位に棱をもつのがその折衷形と考えられる)に位置付けられる。胎土は、石英、長石の他、角閃石、雲母を多量に含んでおり、いわゆる「生駒西麓産の土器」である。

S K 6 出土土器

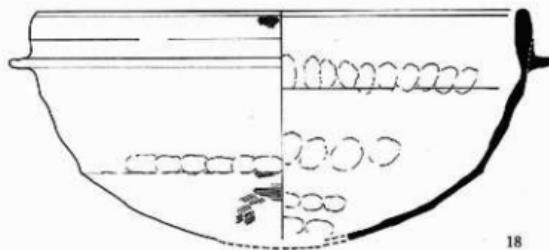
S K 5 に比べて出土量は少ない。閑化したもの以外には、土師器、須恵器の細片を数えるのみである。

須恵器 24の立ち上がりは短く、大きく内傾する。ヘラケズリは底部のみに行われている。25は、底部のヘラ切り後未調整で、体部との境の狭い範囲にのみヘラケズリが施されている。それぞれ滋賀県美園遺跡杯身A-IIa~IIIb, B-IIaに比定される。

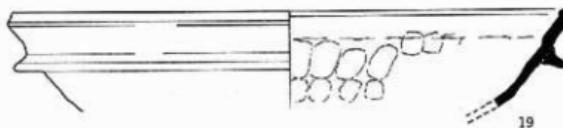
土師器 瓢⁽³⁾は、球体に近い体部から「く」の字状に外反し、口縁端部でさらに外折して面



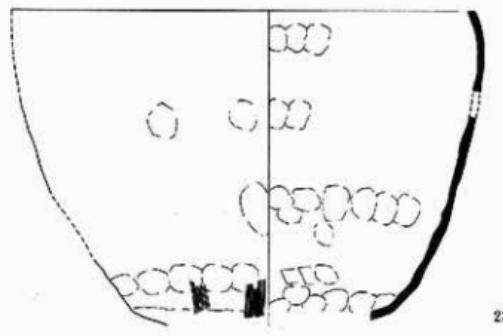
17



18



19



23

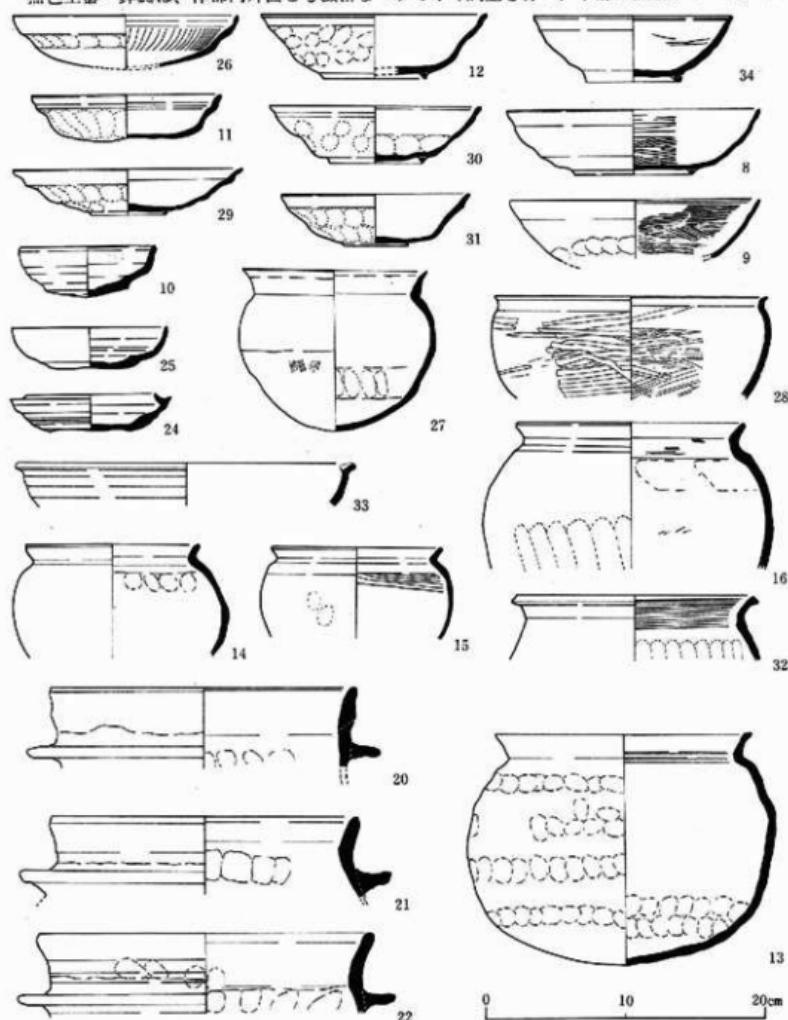
0 10 20cm

第34図 SK5出土土器実測図

をなしている。体部外面は摩耗が著しいが、ハケメ調整がわずかに認められる。

S E 2出土土器

黒色土器 鉢28は、体部内外面とも緻密なヘラミガキ調整を行い、平滑に仕上げている。口



第35図 平安時代遺構出土土器実測図

縁部はごく短く外反し、端部でさらに外折して面をなす。丁寧なつくりである。

土師器 杯B⁽³⁾と椀12(30、31)はともにe手法。皿池遺跡の杯、椀に相当するものか。

S E 3 出土土器

出土量は極微量で2点を数えるにすぎない。

黒色土器 梗30は、高台の断面が台形状になっている。体部内面のヘラミガキ調整はやや粗いものの器厚は厚く、10世紀代に属するものであろう。

須恵器 鉢33は、口縁部から体部内外面ともヨコナデ調整によっており、ヘラケズリのあと認められない。京都府藤古窯跡群の前川2・3号窯⁽⁴⁾に最も近似するタイプである。

注(1) 田中琢「畿内」(『日本の考古学VI』所収 1967年)

(2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書』1976年

(3) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論丛』所収 1983年)

(4) 滋賀県教育委員会他『美園遺跡発掘調査報告』1975年

(5) 東大阪市遺跡保護調査会『瓜生堂土居遺跡・皿池遺跡』1979年

(6) 石井清司「窯窓跡群出土の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第7号、1983年)

2) 古墳時代の土器

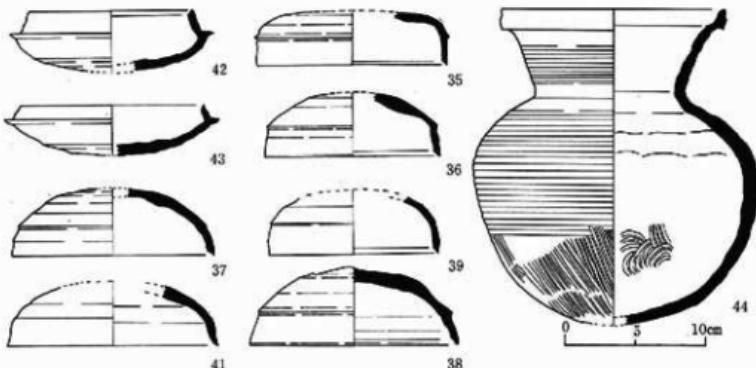
本節では、古墳時代造構及び第4層・第5層出土須恵器、土師器他を考察の対象とし、製塙土器は次節で取り扱うこととする(ただし、第4層内には、一部奈良-平安時代の土器が混入しているが、便宜上、本節で取り扱う)。

まず、土器概観の導入として、N R 2 及びピット出土土器について考えてみたい。

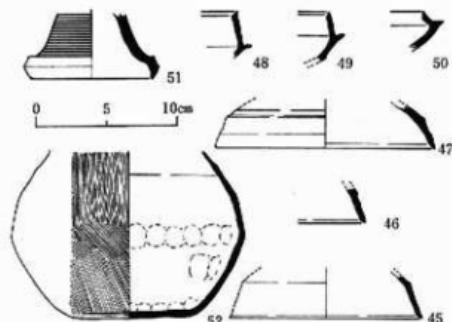
N R 2 出土土器

造構の大きさの割には、出土量は稀少である。

須恵器杯蓋には、天井部と口縁部とを分ける稜が鋭く張り出しているもの飼から、その境界



第36図 N R 2出土土器実測図



第31図 ピット内土器実測図

こでは、建物の築造年代を考える際の参考となるべきものを選んで図示した。須恵器杯蓋は大概天井部と口縁部とを分ける棱は短く鋭いが、杯身では立ち上がりの長いもの⁴⁸の他に、⁵⁰のように、立ち上がりは0.7cmを測るのみで、逆「1」の字状に短く外反するにすぎないものがあり、掘立柱建物の築造期と廃絶期を示すものと推測される。土師器壺⁵²は平底で体部中央で最大径をもつ。外面はやや粗いハケメ調整を施している。

以上、NR2及びピット出土土器を手がかりにして、古墳時代土器の概観を試みた。その結果、出土量の豊富な須恵器を中心に、型式分類を行うのが、適切と考えられるので、以下にその概略を記すことにする。

(1) 須恵器

杯蓋

A. 天井部と口縁部との境界に稜や凹線などを施すもの。

A₁ 天井部と口縁部とが稜によって分かれるもの

A₁-a 稲が短く強く張り出して鋭いもの。

A₁-a' 稲は鋭いが、やや丸味を帯びるもの。

A₁-b 稲が丸く鈍いもの。

A₂ 天井部と口縁部とが凹線によって分かれるもの。

A₂-a 強い凹線

A₂-b 弱く浅い凹線

A₃ 凹線が退化し、ナデ(指頭)による稜線がめぐるだけのもの。

B 天井部と口縁部との境界に稜や凹線のみとめられないもの。

杯 立ち上がりの有無により分類する。

A 立ち上がりのあるもの。

B 立ち上がりのないもの。

Aは立ち上がりの高さによって

A₁ 高さが2cmを超えるもの。

には稜や凹線の認められないもの⁵¹まであり、河川という性格上、土器の時期差は当然と思われる。須恵器壺は、体部外面に平行タタキメを施して後、カキメ調整が行われている。その他に土師器壺(図版三十六、イ)がある。平底で、体部内面にはヘラケズリが著しい。

ピット出土土器

土師器壺⁵⁰以外全て細片である。

こでは、建物の築造年代を考える際の参考となるべきものを選んで図示した。須恵器杯蓋は大

概天井部と口縁部とを分ける棱は短く鋭いが、杯身では立ち上がりの長いもの⁴⁸の他に、⁵⁰の

ように、立ち上がりは0.7cmを測るのみで、逆「1」の字状に短く外反するにすぎないものがあ

り、掘立柱建物の築造期と廃絶期を示すものと推測される。土師器壺⁵²は平底で体部中央で最

大径をもつ。外面はやや粗いハケメ調整を施している。

以上、NR2及びピット出土土器を手がかりにして、古墳時代土器の概観を試みた。その結

果、出土量の豊富な須恵器を中心に、型式分類を行うのが、適切と考えられるので、以下にそ

の概略を記すこととする。

(1) 須恵器

杯蓋

A. 天井部と口縁部との境界に稜や凹線などを施すもの。

A₁ 天井部と口縁部とが稜によって分かれるもの

A₁-a 稲が短く強く張り出して鋭いもの。

A₁-a' 稲は鋭いが、やや丸味を帯びるもの。

A₁-b 稲が丸く鈍いもの。

A₂ 天井部と口縁部とが凹線によって分かれるもの。

A₂-a 強い凹線

A₂-b 弱く浅い凹線

A₃ 凹線が退化し、ナデ(指頭)による稜線がめぐるだけのもの。

B 天井部と口縁部との境界に稜や凹線のみとめられないもの。

杯

立ち上がりの有無により分類する。

A 立ち上がりのあるもの。

B 立ち上がりのないもの。

Aは立ち上がりの高さによって

A₂ 高さが1.5~2.0cmのもの

A₃ 高さが1.0~1.5cmのもの

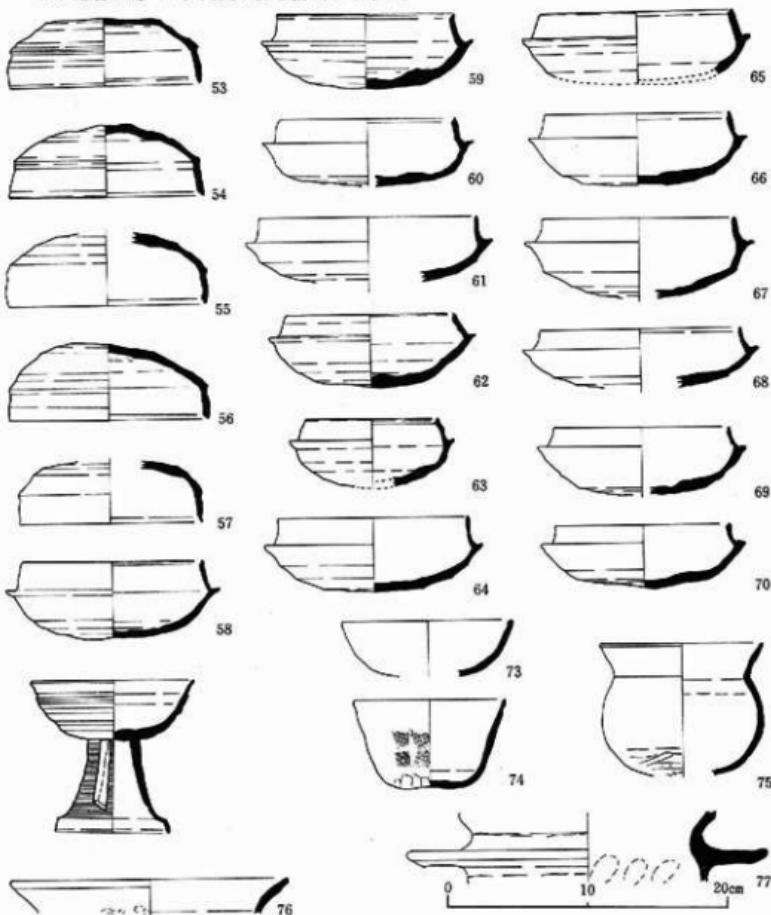
A₄ 高さが0.5~1.0cmのもの

A₅ 高さが0~0.5cmのもの

A₆ 立ち上がりが受部端と同高のもの。

と、6種に細分でき、また立ち上がり先端の形状により、

a. 先端が鋭いか、内側に段を構成するもの。



第38図 SD 65出土土器実測図

b. 先端は丸く終わるもの。

の2種に区分できる。従って杯の分類は、A₁-a、A₁-b、A₂-a、A₂-b、A₃-a、A₃-b、
A₄-a、A₄-b、A₅-a、A₅-b、A₆-a、A₆-b、Bと13のタイプ分けが可能となる。

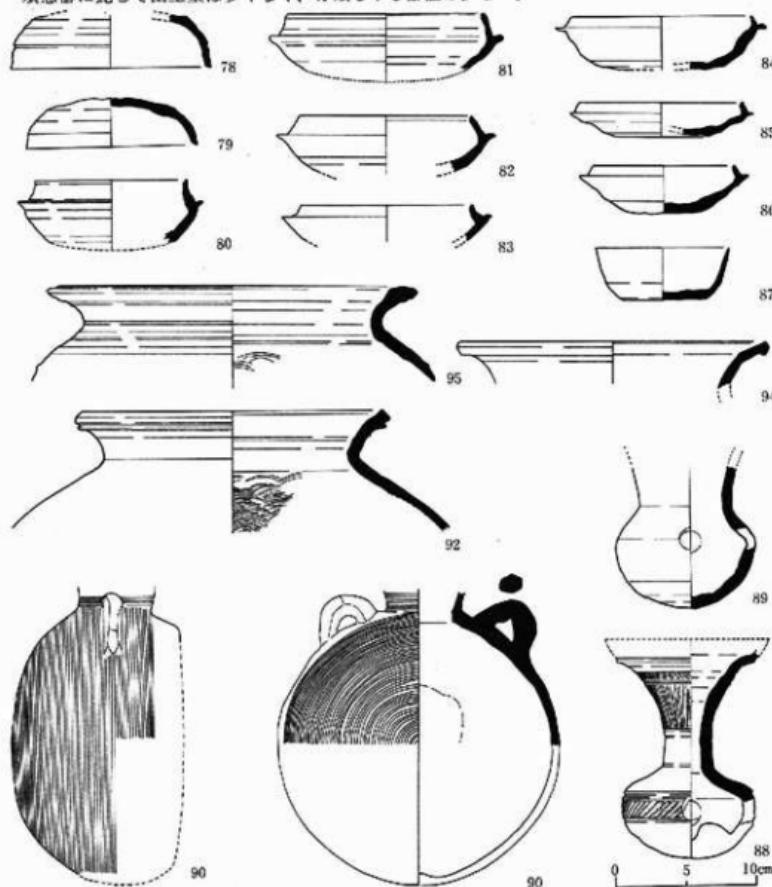
甕、2種に分類できる。

A. 口頭端部を、上下ないし上方に拡張させて、面をなすもの。

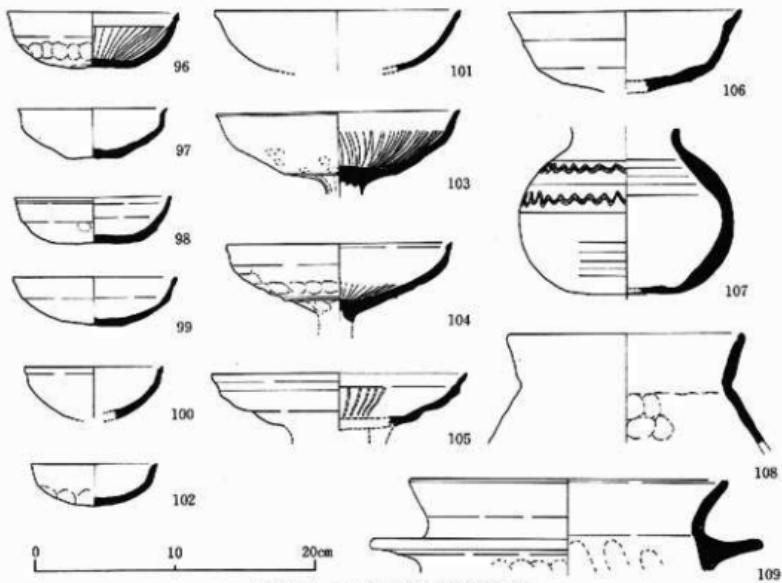
B. 口頭端部は、丸く終わるもの。

(2) 土師器

須恵器に比して出土量は多くなく、分類しうる器種は少ない。



第39図 SD67内出土須恵器実測図



第40図 S D67内出土土器実測図

杯、2種に分類できる。

A. 体部内面に放射状の暗文をもつもの。

A₁ 口径が大きいもの（大概15cm以上）

A₂ 口径が小さいもの（大概15cm以下）

B. 体部内面に放射状暗文をもたず、ナデ調整により仕上げているもの。

高杯 2種ある。

A. 杯部は深い楕形を呈し、体部内面には放射状暗文が認められないもの。

B. 杯部はAに比して浅い皿形で、杯底部と杯体部を粘上でつぎたすため、外面に接合時の段がつくもの。

甕

A. 口頭部内面に横方向のハケメ調整を施すもの。

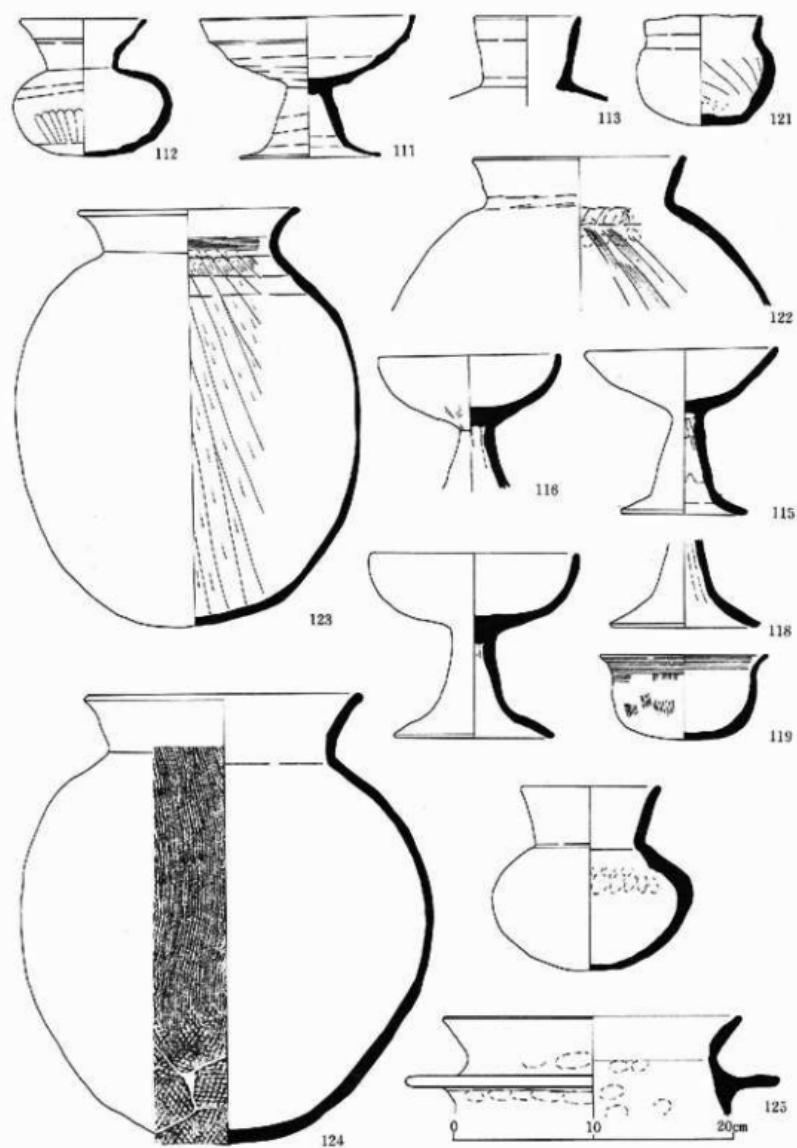
A₁ 端部は面をなすもの。

A₂ 端部は丸く納めるもの。

B. 口頭部内面はナデ調整をするもの。

B₁ 端部は面をなすもの。

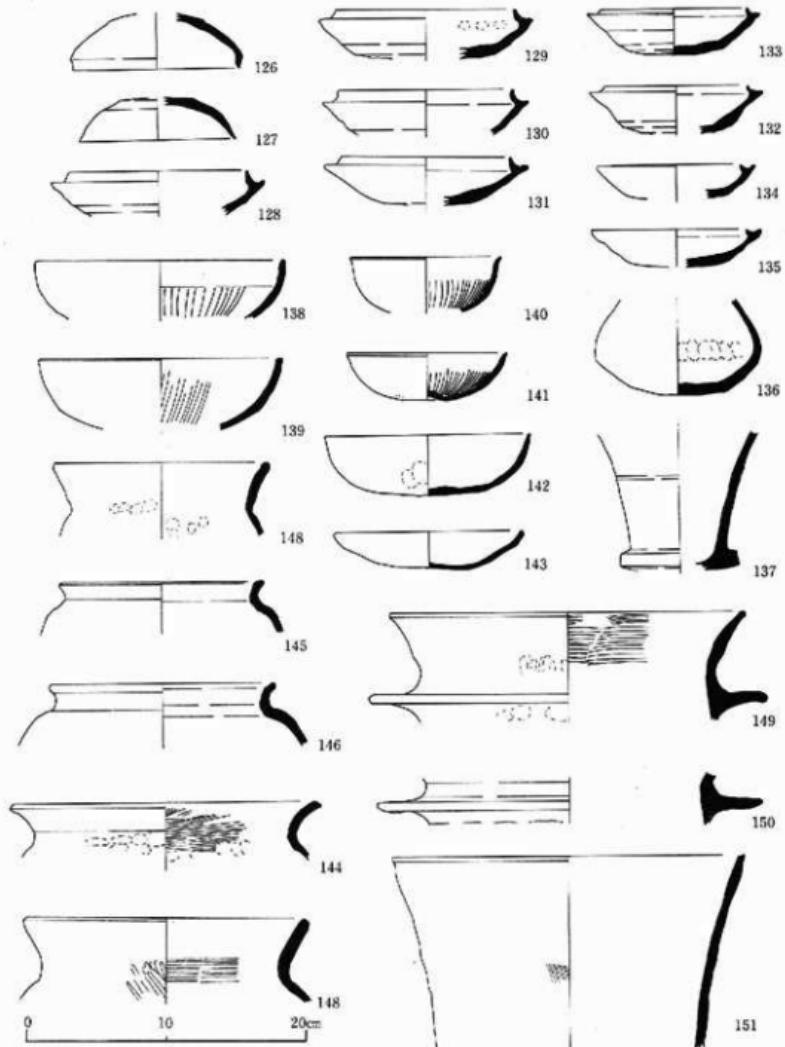
B₂ 端部は丸く納めるもの。



第41図 SK25出土土器実測図

S D65出土土器

須恵器 杯蓋は2タイプ5点出土。そのうちA₁-bが4点を数える。杯身は4タイプ13点あり、A₁-aが2、A₂-aが4、A₂-bが6、A₃-aが1であった。A₂タイプに集中していると



第42図 第4層出土土器実測図

ころから、先の杯蓋の傾向を参照すると、陶邑編年のTK47～MT15併行期に位置付けられる。高杯(1)は無蓋で、杯体部を回転力を利用したモコナテ調整により、いくつもの段をつくって裝飾している。

土師器 鉢(49)、壺(48)は水縞を行っており、砂粒の含有は極微量である。他の土師器と比較してきわどっており、特別な用途（例えは祭祀）に供されていた可能性がある。

S D67出土土器

土器取り上げは上層と下層に分けて行ったが、整理作業中、それぞれで出土した須恵器杯蓋が同一個体となったので、溝内の堆積土の違いによる時期差は想定しにくい。

須恵器 杯蓋は2タイプ2点。B型は小型化の傾向を示す。杯身は5タイプ8点出土。A₄～bが4点あり、最も多いが、A₂～aからBまで存在する。美園遺跡杯A III b期を中心とした時期、即ち、6世紀末から7世紀中葉の時期が与えられる。また、立ち上がりの高さが小さくなるにつれて、口径も小型化していく傾向が窺われる。壺は3点出土。88と89は、口頭部の形状、調整法の差違の他、胎土も相違している。これは時期差はもとより、产地差が想定できる。89は千里山丘陵の古窯産のものと考えられる。提瓶2点のうち、91の体部両側の耳は退化して円形粘土粒を貼り付けただけの「痕跡器官」化しているもので、体部前面は丸くふくらましく中央で凹んでいる。

土師器 高杯は4点出土。全て杯部外面に杯底部と杯体部の接合痕たる段がつくBタイプ。船橋遺跡O～V高杯C₂タイプと同型式である。壺(107)は平底で体部に輪描き波状文をめぐらす。

S K25出土土器

須恵器 高杯(111)、壺(112)ともに体部下半～底部は手持ちヘラケズリである。口縁部内外面も両者テイネイなヨコナテを行っている。

土師器 高杯4点のうち、脚部のみ出土した118を除いて全てAタイプ。杯体部の内湾は強く、116はほぼ垂直に立ち上がる。鉢(119)は、出土状況では、口縁を下にして壺(120)の上に覆い破されており、壺の蓋の代用かと考えられる。口縁部内外面とも緻密な横方向のハケメ調整が施される。壺(121)は手づくねの土器。粘土塊より直接ひき出したものであろう。

第4層出土土器

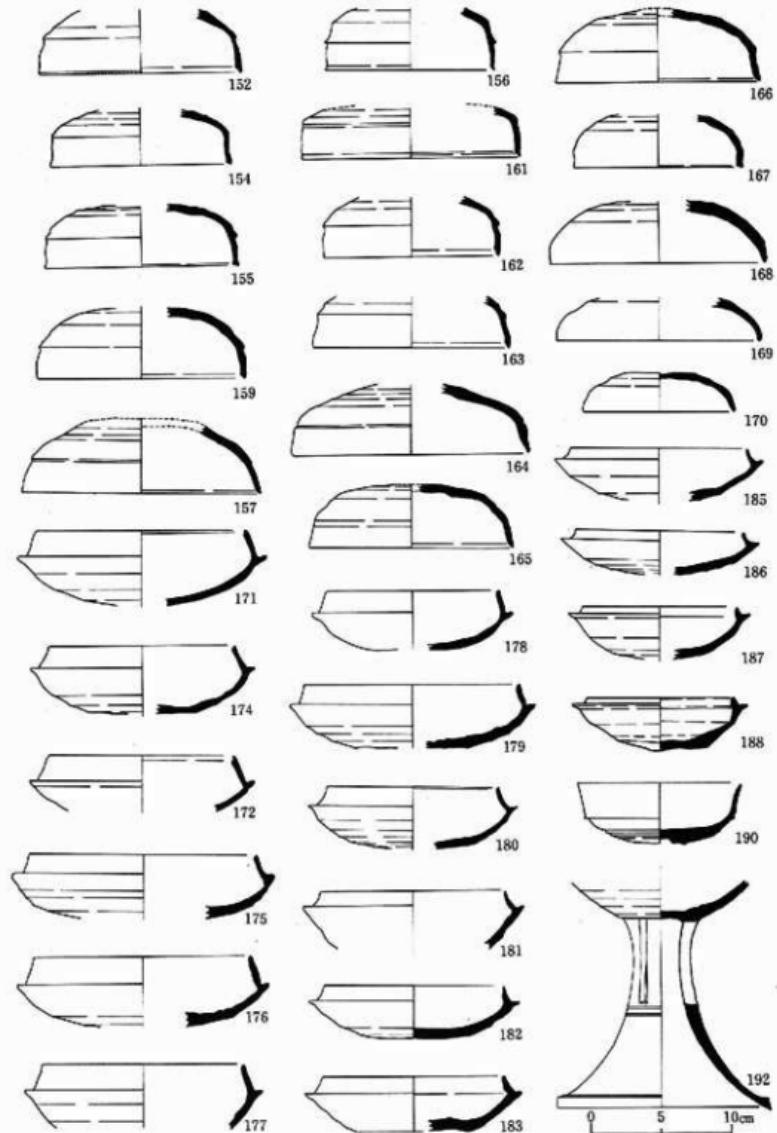
須恵器 杯蓋はBタイプ2点。杯身は3タイプ8点。A₆～aは美園遺跡杯A III c期に比定。

土師器 裹A(145)はSK5出土裹(15)と近似しており、平安時代の所産か。

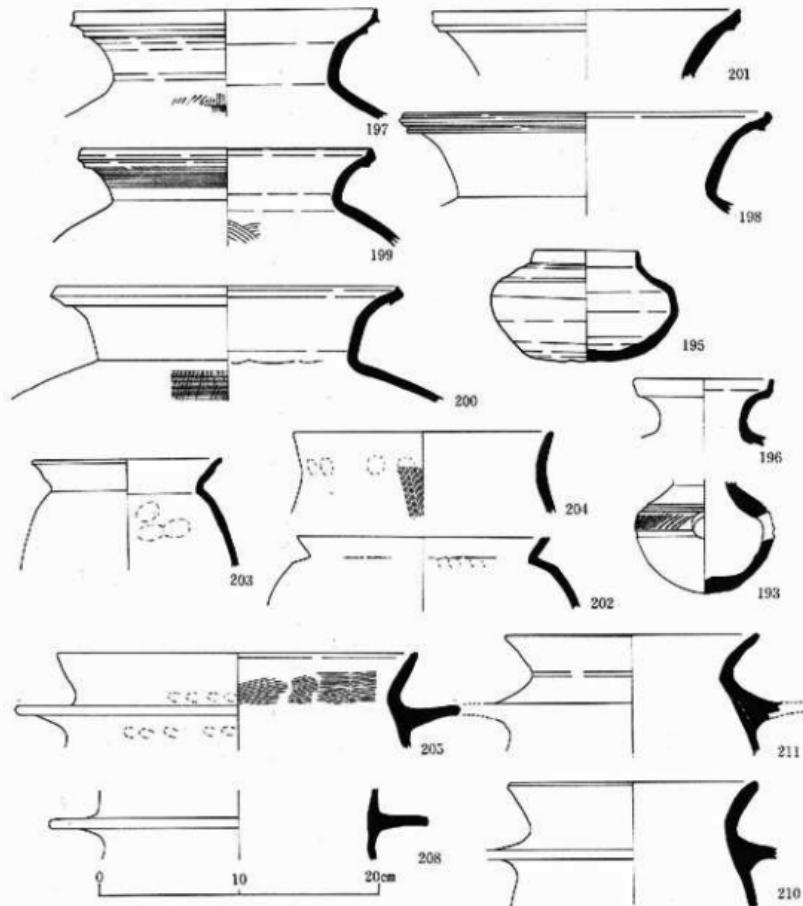
第5層出土土器

須恵器 杯蓋は7タイプ19点。杯身は5タイプ19点。高杯(192)は長脚透しで、陶邑TK209併行期に属す。壺(195)は焼成不良のため、赤紫色を呈する。陶邑TK10併行期と思われる。裹は5点、全てAタイプ。とくに裹(197)は、外面上位に鋭い断面三角形の段をつくり出している。

土師器 裹は3点で、Aが2、Bが1である。A(202)の口縁部はごく短く、強く外反している。また口縁端を平らにナデるため、端部は外折して面をなす。B(204)の口縁部は屈曲が弱



第43図 第5層出土須恵器実測図



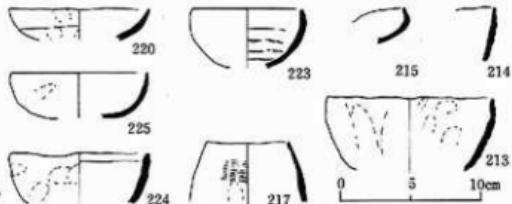
第44図 第5層出土土器他実測図

いま立ち上がるため、内面に縦がつかない。

- (1) 平安学園考古学クラブ「陶邑古窯址群 I」1966年
- (2) 滋賀県教育委員会他「美術道路発掘調査報告」1975年
- (3) 橋本正幸氏から御教示頂いた。厚く御礼申し上げる。
- (4) 平安学園考古学クラブ「船橋 II」1962年

3) 製塙土器

S D 65及び第5層を中心に製塙土器が出土している。才原金弘氏の器形分類に従って順に記す。213、Dタイプ、S D 65出土。214、Dタイプ、S D 65出土。215



第45図 制塙土器実測図

Aタイプ、第5層出土。216、Aタイプ、S D 65出土。217、Cタイプ、第5層出土。218、Aタイプ、S D 65出土。219、Aタイプ、S D 65出土。220、Aタイプ、S D 65出土。221、Aタイプ、第5層。222、Aタイプ、S D 65出土。223、Cタイプ、S D 65出土。224、Aタイプ、S D 65出土。225、Aタイプ、第5層出土。

以上のうち、220、223、224、225は器形については従来知られている漏斗形ではなく楕形であり、新資料だといえる。編年的には漏斗形が5世紀代に出現することからすれば、楕形は6世紀代に下るものと考えられる。これは、S D 65の機能時期と矛盾するものではない。

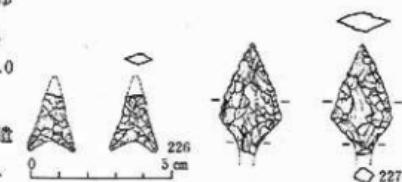
4) その他の遺物

各造構及び包含層より石錐他の遺物が出土している。順に説明していきたい。

226、石錐。圓基でやや長細い二等辺三角形を呈する。基部の抉りは直線的で、基端は尖る。先端部は欠損。予想される先端一基部中央長は約22mm。基端部幅は17.3mm。厚さ3.9mm。重さ1.1g。NR 2出土。サヌカイト製。繩文時代の遺物。227、石錐。凸基有茎。ぶ厚く、鋭利な先端と側縁部を有す。現存長39.1mm。幅21.9mm。厚さ7.2mm。重さ4.8g。第5層出土。サヌカイト製。弥生時代の遺物。228、有孔円板。中央に1ヶ所穿孔(孔径1.5mm)。2.6cm×2.7cm。厚さ2.5mm。滑石製。周縁を面取り。表裏面に研磨痕。第5層出土。229、管玉。長さ2.3cm。径6mm。孔径3mm。上下から穿孔。碧玉製。第5層出土。230、紡錘車。上径2.5cm。下径4.8cm。高さ1.4cm。孔径5.5mm。滑石製。截頭円錐形を呈する。未製品で、裏面に円弧を描いている。表面に石ノミの研削痕が明瞭に認められるところから、その途中で廃棄したものと考えられる。西の口遺跡の集落内でこのような製品の製作が行われていたことが偲ばれる。S D 67出土。231、分鋼形石製品。裏面の径3×2.9cm。高さ3.9cm。孔径4mm。錐部に穿孔している。第4層出土。弥生時代の遺物と考えられる。232、鉄錐。いわゆる有茎三角形式錐に属するものと考えられるが、

銹化が著しい。全長10.8cm。刃部幅3.3cm。厚さ1.0cmで、レンズ状を呈する。第5層出土。

以上のように、出土量は多くないが、各種遺物が検出されている。特に、228、231の如く、祭祀的な遺物が注目されるところである。



第46図 石器実測図

5) 弥生時代の土器

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、各種石器、木器など各種、各時代にわたって、コンテナ収納箱に約 箱程度が出土した。その中でも特に、弥生時代後半～庄内期の造構に伴う土器及び古墳時代中期末～後半の造構に伴う土器が出土量の大半を占めている。ここでは、両時期の造構内出土遺物を中心に説明をおこなうとともに、各時代の遺物も順を追って説明を加えていくことにする。

(1) 縄文土器

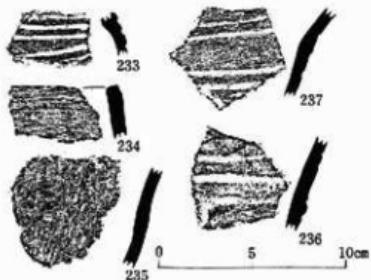
縄文土器は、調査地全域で十数片出土しているが、すべて破片で全体を復元できるものはない。出土地点は限られており、IV G 20 h ~ 20 p 区で第2層及び地山直上で縄文時代後期後半の土器が認められ、IV F 18 f ~ 18 g ~ 19 f ~ 19 g 区の古墳時代造構のベース面となっている第6層より少量の縄文時代晚期後半の突帯文土器が出土している。

第47図(233)～(237)の土器はIV G 20 h ~ 20 p 区第2層から出土した。(236)(237)は、体部より口縁部にかけての破片で頸部がわずかに屈曲している深鉢である。頸部より上方に凹線文を施す。(236)は三条の凹線文に巻貝による扇状圧痕が認められる。(234)(235)は粗製の鉢で、(234)は口縁部、(235)は体部の破片で中央部でわずかに屈曲し、下半にケズリ調整が認められる。(233)は沈線文を施した浅鉢である。

その他に深鉢の底部や、突帯文土器の細片が出土している。

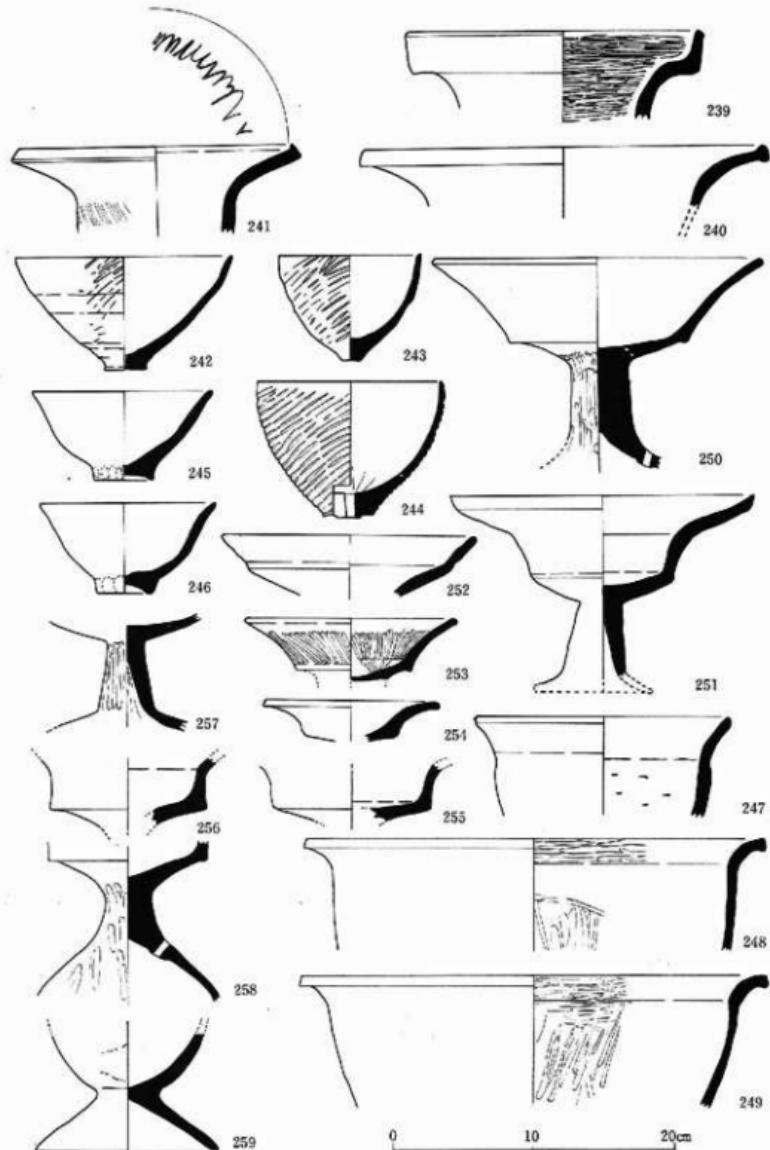
(2) 弥生土器

今回、ここで取り扱う弥生土器とは、弥生時代後半から庄内期にかけての土器を含んでいる。従来、弥生土器と庄内式土器を区別し、時期差として庄内式を古墳時代に含めて考える考え方もある。しかしながら、今回の調査では河内地方の弥生時代最終末の形式と考えられる北鳥池下層式に統くと考えられるタイプの土器に従来の庄内式が併なって出土しており、両者の時期差は区別できない。また、弥生時代最終の造構と考えている S D 78 や S E 5などの造構は、溝

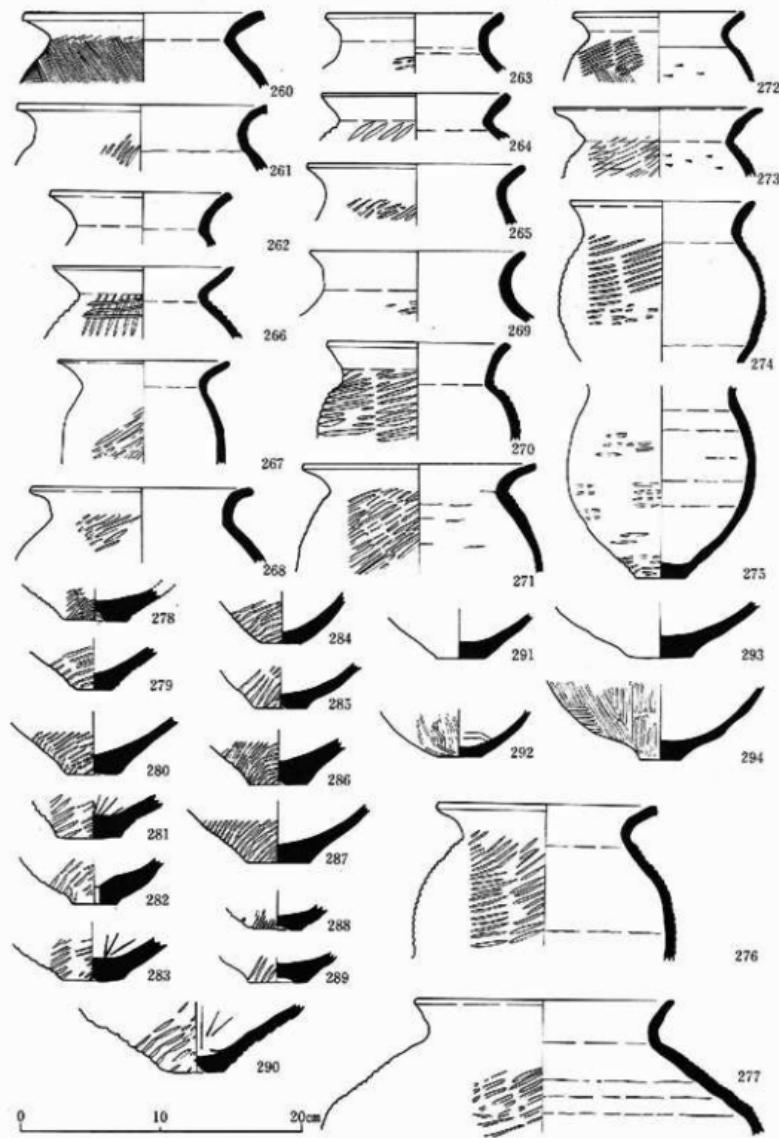


第47図 縄文土器拓影

や井戸状造構であり、他の造構と明確に区別されるものであり、ほぼ同時期に存在していたと考えられる。これらのことより、弥生時代の最終末から庄内期にかけて連続した造構と考え、ここではこれらを弥生時代に属する造構・遺物と考えておきたい。そこで弥生土器の分類についても、器種毎の分類をおこない、庄内式と弥生土器との区別はタイプ分けでおこない時期差では分けていない。以下器種毎のタイプ分けの説明をおこないたい。



第48図 SD78出土遺物



第49図 S D 78出土遺物実測図

壺 5タイプに分類をおこなった。壺aは中期段階の壺(377)、壺bは2重口縁の壺で、加飾する大型のものをb₂(5)(6)(296)(375)それ以外のものをb₁(239)、壺cは口縁部が大きく外反する広口壺(240)、壺dは外反する口縁端部を内側に折り返す広口壺(241)、壺eは口縁部が直口する壺で大型で口縁部の短いものをe₁(365)、小型で口縁部が長いものをe₂(308)(309)に分ける。その他に小型壺(348)がある。

甕 4タイプに分類できる。「く」の字形に外反する口縁部をもつもので端部に面をもつものの甕a(261)(262)、丸く終るもの甕bとし、甕bの中で内面をナデ調整するものをb₁(263)(359)(360)、ケズリ調整するものをb₂(312)に分けた。甕cは「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部をもつもので、口縁端部を上方へつまみ上げ受口状にするものをc₁(361)(362)、丸く終るものをc₂(273)(310)とする。甕d(370)(371)は、所謂布留式甕である。

高杯 3タイプに分類できる。水平方向にのびる杯部から大きく外反する口縁部をもつ高杯a(250)(252)(253)と水平方向にのびる杯部より角度をかえて直立したのちに外反する口縁部をもつ所謂二重口縁の高杯b(251)(255)に大きく分けられる。その他に半球状の杯部がつく高杯c(259)がある。

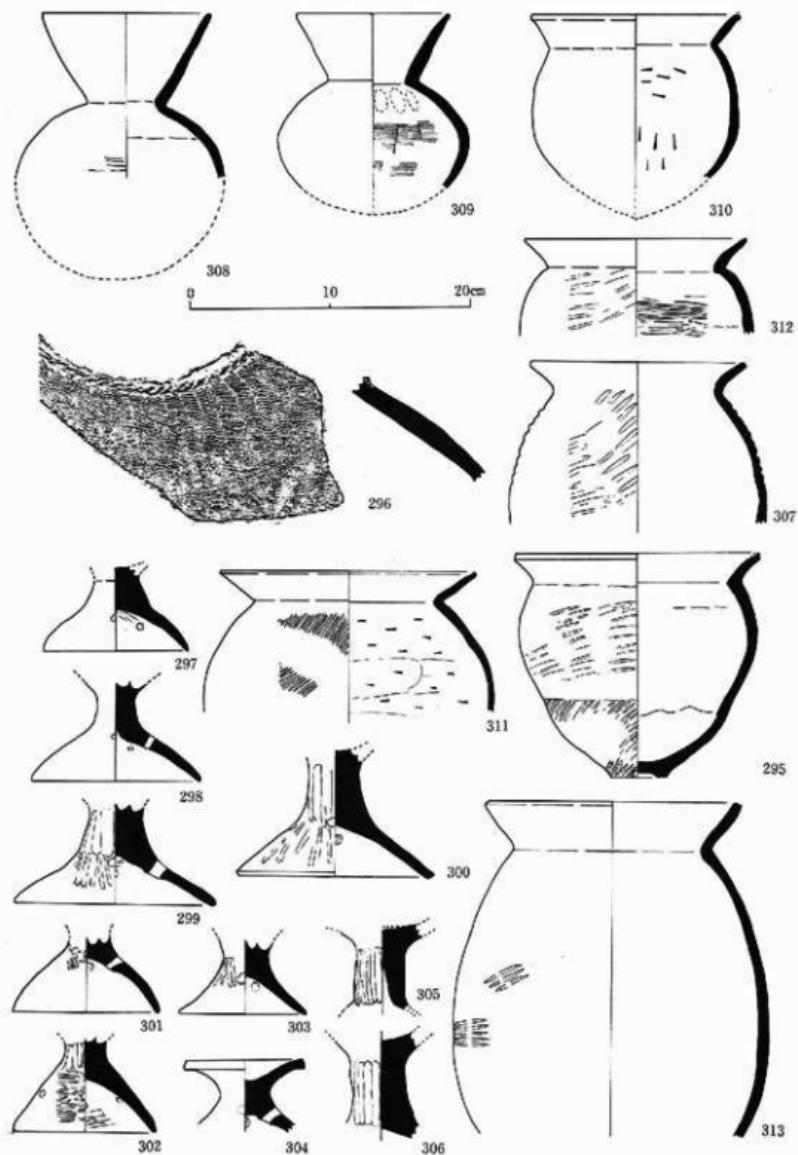
鉢 4タイプに分類できる。鉢a(247)は、外反する口縁部をもつもので内外面の調整から縄文土器と考えられる。鉢b(242)(243)(244)は、平底の小さな底部から内弯気味の口縁がつくもので、甕の下半と同形態のタイプである。鉢c(245)(246)は、高台状の底部にすり鉢状の体部から外反する口縁部をもつもので当初から鉢として製作されたもの。鉢dは大型のもの(248)(249)。その他に小型鉢がある。

S D78内出土遺物

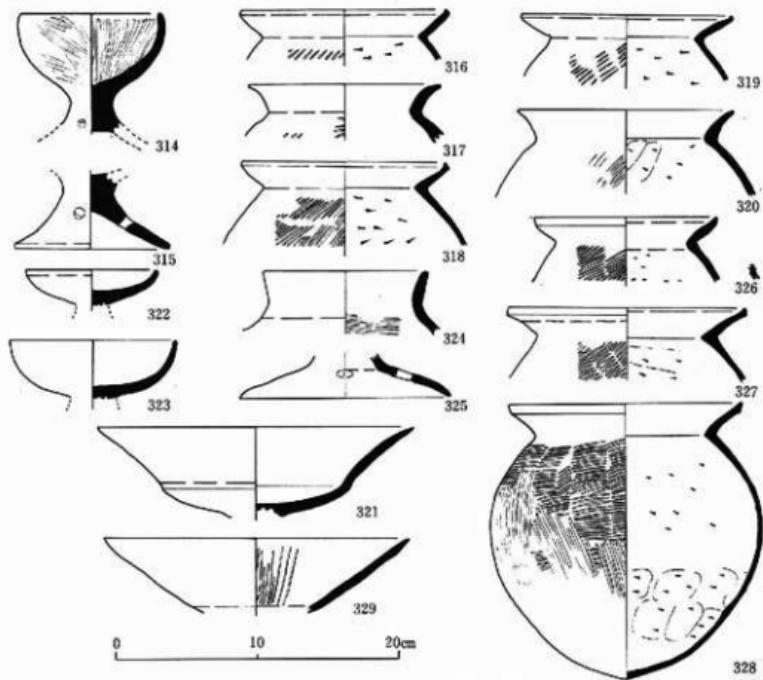
S D78内からは、大量の弥生時代後半の土器が出土しているが、溝あるいは自然流路の性格上多少他の時期の土器も混じて出土した。第23図の土器は上層から出土している片口鉢である。又鉢a(247)は、縄文土器と考えられる。これらの遺物を除けば比較的まとまった資料である。器種として壺類の出土が少なく、高杯の出土が多いことが特徴である。壺bの所謂二重口縁の壺は出土しているが、壺cの広口壺の出土はほとんどない。壺d(241)は1点だけで他地域からの搬入品である。

甕の出土量は多く、全体の4割を占める。その中でも甕b₁の出土量がもっとも多い。甕a(260)は、口縁端部に面をつくり、体部外面に刷毛目調整しており、古い様相をもっているが、出土量は少ない。体部外面に細かな叩目を施し、内面をヘラケズリ調整で器壁を薄くする甕cの出土量は甕b₁に比して極端に少ない。甕c₁(272)は河内産の庄内甕と呼ばれるもので、c₂(273)は他地域からの搬入品である。

鉢は、比較的全体を復元できるものが出土している。鉢b(242)(243)(244)は、甕の体部下半と同じ形態であり、分割成形の第一段階のものである。このタイプには、底部中央に円孔を穿つものが多く認められる。鉢bはV様式後半に認められる形態である。鉢c(245)(246)は、最初から鉢を意識して製作されたもので、口縁部成形後に輪状の粘土紐で底部を高台状につくり



第50図 SD78-81-83出土土器実測図



第51図 S D80-81出土土器実測図

出している。鉢cはV様式に通有に認められる形態である。

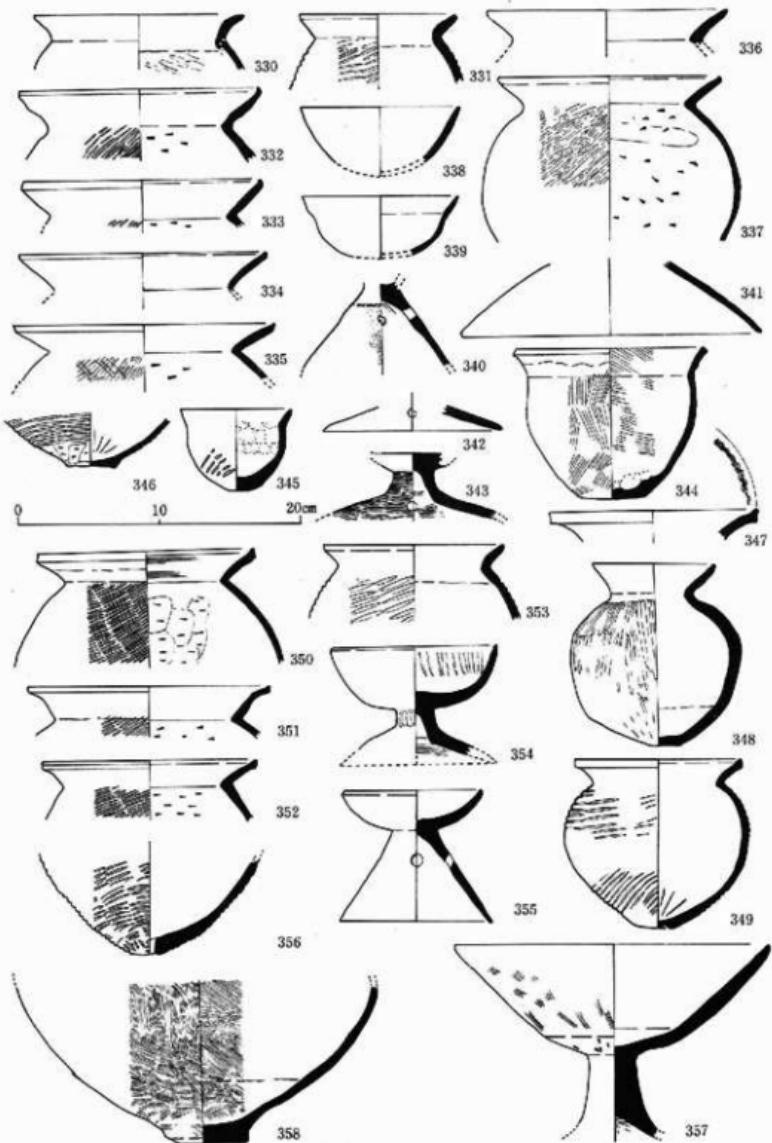
高杯a(250)(252~254)(257)は、水平方向の杯部から大きく外反する口縁部がつく。中実の脚柱部をつける。高杯aの出土量が比較的多い。高杯bは二重口縁蓋の形態をとるもので中空気味の脚柱がつく。(251)(255)(256)は他地域産の土器である。(259)は高杯cで半球状の杯部に裾広がりの脚台がつく。出土量は少ない。

S D80出土遺物

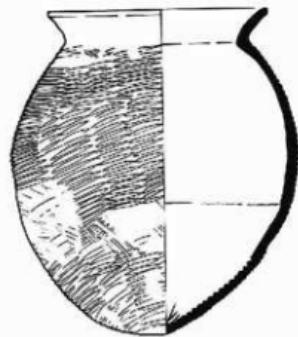
高杯a、bと蓋b₁、c₁、c₂が出土している。蓋b₁の比率が少なく、蓋c₁の比率が多いのが特徴である。高杯c(314)は、半球状の杯部に短い脚柱部がつく形態で内外面とも丁寧に仕上げられている。蓋c₂(320)は、内面に弱いケズリ調整が認められ、他地域からの搬入品である。

S D81~83

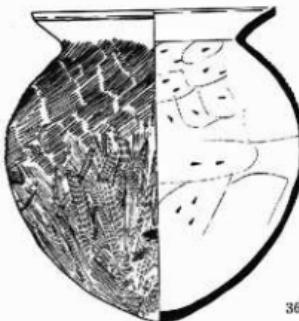
蓋e₁・e₂・蓋b₁・b₂・c₁・c₂、高杯a・c、小型器台が出土している。蓋c₁(328)は、口径16.6cm、器高19.6cmを測る。珠形の体部に「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部に、端部は上方へつまみ上げ受口状につくる。体部下半は、ヘラまたは半裁状の竹などの工具で丁寧にミガキ、外面の叩目を消している。体部内面もヘラで粘土をケズリ取り、器壁を薄くする努力が認めら



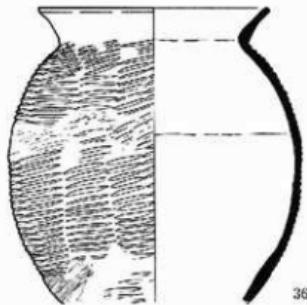
第52図 SE 5 出土土器実測図



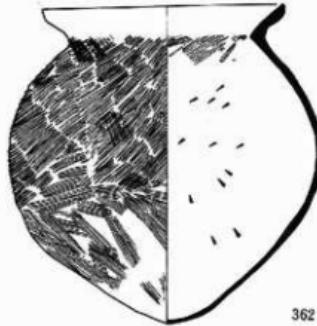
359



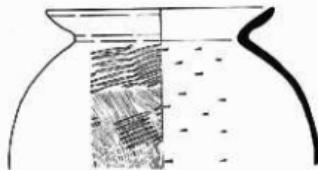
361



360



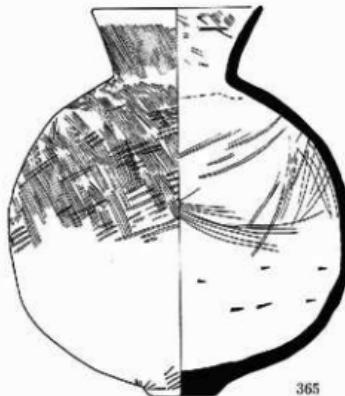
362



363



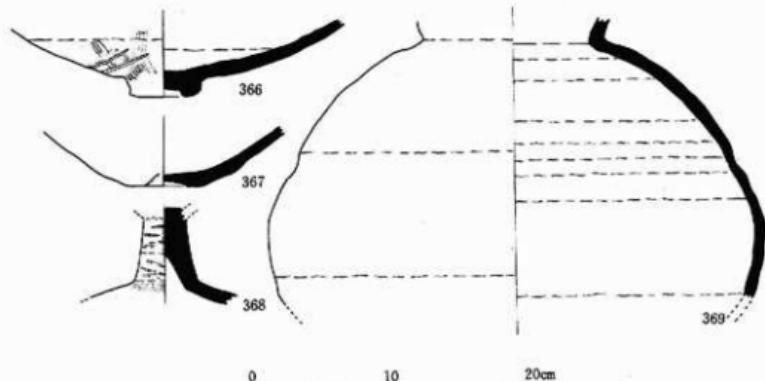
364



365

0 10 20cm

第53図 S E 5 出土土器実測図



第54図 SE 6出土土器実測図

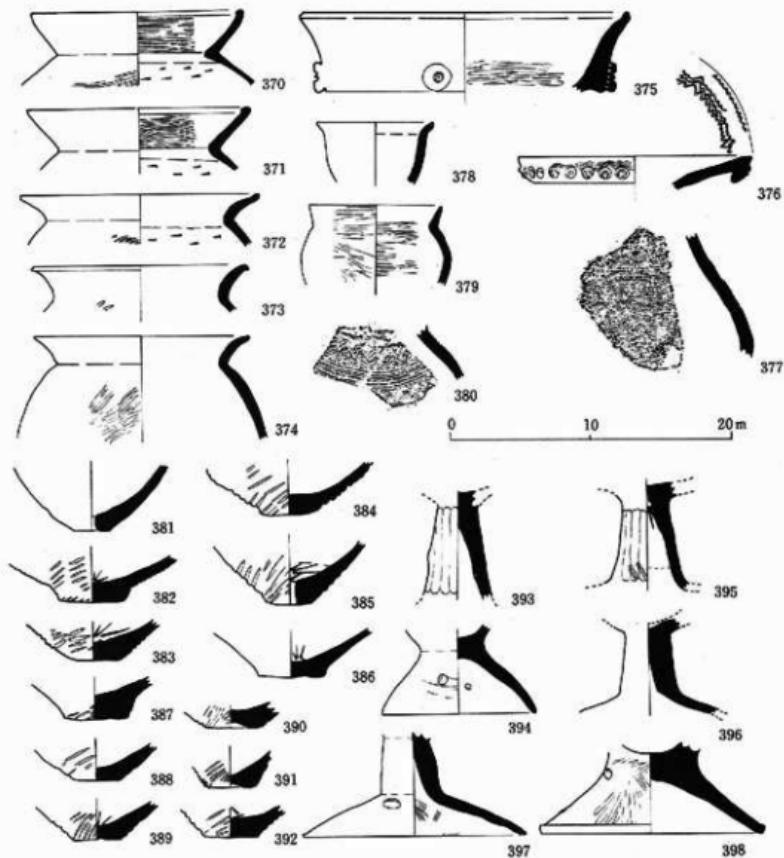
れる。底部はわずかに尖り気味で丸底化の傾向が著しい。

壺e₁(324)は、短く外方に聞く直口の壺口縁部である。壺e₂(308)(309)は、直線的に外方へ大きく広く直口の口縁部に、体部は球形ないし扁平な形をとる。底部は欠損しているが、丸底と考えられる。壺e₁は、V様式の後半の直口壺につながる器形であり、壺e₂は、庄内期に認められる器形である。SD 81~83の溝内土器では甕b₁の出土量が少なく、甕c₁(326~328)の比率が増加している。出土量は少ないが、SD 78の溝とは出土土器の組成に大きな違いがある。高杯(329)は、杯底部が平坦で小さく、斜め上方に大きくのびる口縁部がつく。壺e₂(308)(309)、高杯a(329)などは、他地産の土器であり、他地域産の土器の出土量が増えることも特徴の一つである。

SE 5

SE 5の出土遺物は、出土状況から第1層（上層）と第2層（下層）に分けることができる。第1層からは甕b₁(330)(331)、c₁(332~337)、小型鉢(339)(338)(345)、高杯(342)(343)が出土している。甕b₁の比率が少なく甕c₁の比率が多くなっている。小型鉢(339)は、底部を欠損しているが、浅い椀状の体部に屈曲して斜上方にのびている口縁部がつく。高杯(343)は、細く短い中空の脚柱部から屈曲して水平に大きく広がる脚部をもつタイプで新しい要素をもつ。(338)(339)と(340)(342)とはともに他地域からの搬入品である。

第2層からは、甕b₁(359)(360)、c₁(350~352)、(361~364)、壺c(347)、e₁(365)、高杯b(357)、c(354)、小型器台(355)、小型甕(349)などが出土している。(359)は口径15.5cm、器高23.0cm、「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終わる。最大部径が体部中位にあることや、底部にわずかに平坦面を残す平底がつくが球形丸底化の傾向が強くうかがわれる。体部外面の下半は、板状の工具でナテつけ、叩目を消して調整を施こし、内面はナテ調整により仕上げている。(361)は口径17.2cm、器高22.2cm、「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部に端部は上方へ



第55図 包含層出土土器実測図

つまみ上げ面をなす。底部がわずかに尖り気味になるが丸底である。体部外面下半は刷毛目で印目を消して丁寧に仕上げ、内面はヘラケズリで器壁を薄くしている。第2層においても表びの比率が少なく、c₁の比率が大きいことがわかる。(365)は、口径12.1cm、器高27.7cmの大型の直口壺。短く斜上方に向く直口の口縁部に球形の体部と比較的しっかりとした底部がつく。体部外面は印目調整ののち、刷毛目で仕上げている。また、体部外面の下半全面に煤が付着しており、2次焼成を受けたことがわかる。(365)の壺は、器形的には壺であっても、成形手法及び、用途は甕などと何らかわるところはない。この時期になると、壺、甕、鉢の器形別用途に変化がうかがわれる。その他に小型器台が出土している。口径9.8cm、器高9.3cm、浅い皿状の受部

に直線的に幅広がりとなる脚台がつく。(355)

このようにSE5からは甕b1、c1、壺e1、小型器台が一括出土している。又、第1層と第2層を比較した場合、土器の形式上の差は認められず、ほぼ同一時期と考えられる。このことからSE5出土土器は、良好な一括資料として取り扱えるものである。

SE6出土遺物

SE6内からは、弥生時代末の壺・高杯・庄内期の甕などが出土している。壺(369)は、胴部下半の張る扁平な体部で口縁部、底部は欠損している。(366)は、小さな突出した平底に球形の体部がつき、(367)は底部外面が凹む丸底の底部である。(368)は、細い中空気味の脚柱部に角度をかえて、水平方向に広がる幅部がつく。これらの出土遺物の特徴から、SE6埋没時期は、庄内期の前半頃と考えられる。

包含層内出土遺物

包含層内からは各時代の遺物が出土しているが、ここでは弥生時代から古墳時代前半にかけての遺物を取り扱う。

(377)は、弥生時代中期に属する壺である。頸胴部に櫛描直線文を3条を施す。弥生時代中期の土器片は、この他に数点出土している。

弥生時代後期末～庄内期にかけての土器もコンテナに10杯程度出土している。特に(375)(380)のような壺も出土している。また、古墳時代前半の布留式に属する甕が出土している。(370)(371)は、口縁端部を内方へ丸く肥厚し、内空気味の口縁部に球形の体部をもつ。体部内面をヘラケズリ調整で薄く仕上げる。布留式に属する甕は数少ない。

V. まとめ

今回の調査で、西の口遺跡が弥生時代から平安時代にいたる複合遺跡であることが判明した。平安時代の遺構面は不明瞭だが、古墳～弥生時代の2時期の遺構面は明確に存在しており、後世の削平を受けながらも、古墳時代後期の掘立柱建物5棟、建物内外を区画する溝2条、庄内期の井戸状遺構2基、弥生時代後期の壺棺墓3基を確認できたのは大きな収穫といえる。

ここでは、平安時代～古墳時代の遺構と遺物、及び弥生時代の遺構と遺物の2節に分けた上で、それぞれの内在する若干の問題点を列举し、まとめとしておきたい。

1) 平安時代～古墳時代の遺構と遺物について

平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構としては、土坑3基、井戸2基とそれに付属する覆屋を検出したのみで、集落の具体相を把握するだけのデータは備わっていない。ただ第4層の分布範囲を考えると、当該期の定住集落が本遺跡に広がるとは想定しにくい。むしろ、土坑や井戸などの設定のありようから考えれば、一時的な生産手段としての場としての諸施設と考えるのが妥当であろう。

さて、今回確認した2基の井戸は、ともに、上部構造として井桁を、下部構造(取水口)として円形曲物を設えたもので、平安時代に属するものとしては、瓜生堂上層遺跡^出に出土例がある。出土遺物が稀少なため、開削時期決定は、黒色土器に求めたい。SK5出土例も含め、黒色土器碗は全てA類で10世紀末に下るものではないが、体部内面でのヘラミガキは施されず、A類生産の盛行期を過ぎたものと考えられる。一方、SE3で黒色土器碗^出と共に須恵器鉢^出は、篠古窯跡群前川2・3号窯出土の鉢Cタイプで、口縁部を肥厚させ、玉縁状を呈したものであり、水谷寿克・石井清司両氏により、10世紀中頃の編年的位置が与えられているところから、これら黒色土器(A類)碗の実年代観として、10世紀後半の時期が想定されよう。

古墳時代西の口遺跡の歴史的環境

次に、本遺跡で検出された掘立柱建物群を素材として、古墳時代の歴史的環境を考えたい。本遺跡のすぐ北に生駒山系より発する小河川——箕後川がある。箕後川は、横小路から流れ、旧村を南北に横切り、外環状線の付近で東大阪市と八尾市の境を西に流れ、恩智川に注いでいる。荻田昭次氏の考証によれば、「箕後」は「三野郷」に通じるといわれる。現在、八尾市に編入されている上之島、福万寺地区、及び東大阪市市場(現在の花園、玉串)地区は、明治22年4月1日に三野郷村として発足した地域であり、それ以前においても、例えば、中世、河内郡玉串荘の一部である3地区が古くより「三野郷」と称呼されていた。この三野郷には式内社である御野県主神社が存する(現在の八尾市上ノ島南町1丁目70番地)。大化前代、ヤマト国家の地域的従属機関として国造制及び県主制が運用せられたことは既に知られている。三野県主もその一つであって、若江郡を中心に、河内、高安、大畠の諸郡にその領域をもっていたとき

れている。⁽⁴⁾ それは例えば清寧紀に三野県主小根が反乱に加担し、その罪の許しを乞うために、遠方の難波来目邑大井戸田十町を送ったとされる所伝が証左になろうし、また、八尾市東部の北高安地区の西ノ山古墳^(前期)、花岡山古墳^(前期)、心合寺山古墳^(中期)などの古墳が三野県主一族のものと従来より考えられているわけである。従って箕後川左岸に広がる古墳時代集落が三野県主が治めていたムラの一つである蓋然性は高いといわなければならない。それは、原島礼二氏が三野県の成立を5世紀中葉に求められていることと矛盾をきたすものではない。ただ律令国家成立期以降は三野県主はあまり大きな勢力とはならなかったようであるが、美勢連として若江郡を中心に活動していたことが、正倉院文書や統日本後紀等に散見される。

6世紀前半という時期で考えられるのは、桜井屯倉である。安閑紀元年条に「以桜井屯倉與毎国田部給賜番々有媛」と見え、同二年九月条に「詔桜井田部連……、主掌屯倉之稅」とあることから、桜井田部連が桜井屯倉の管理を掌っていたことがわかる。桜井とは、和名抄に河内郡内に見える桜井郷のことであり、現在も六万寺町に桜井という地名が残っているように、当該地が本拠であったことは申すまでもない。ただ、この桜井郷については河内志に「六万寺村、旧名桜井、是其遺也、接岡直横小路、四条、客坊諸邑、為古郷域」とあるように、かなり広範囲にわたるとする所伝があることに注意を払う必要がある。

S K25出土の韓式系土器について

韓式系土器とは、「朝鮮半島からもたらされた土器、あるいはその影響下で渡来人および在地の者が日本で製作し、彼地の土器の諸特徴を如実に表す土器の総称」と定義される。器種としては、平底鉢、丸底広口壺、長胴甕、瓶、鍋が確認されている。

今回、S K25出土土器中、韓式系土器として認知しうるものに、長胴の甕を挙げることができる。甕(122)と(123)はともに体部外面は板状工具によるナデ調整で、内面にはヘラケズリ及び、当て板の痕跡が明瞭に認められるものである。これに対し、甕(124)は体部外面に1単位2.8cmの綱席文のタタキメが7単位施され、底部には斜格子目文のタタキメが行われている。従って前者を甕I、後者を甕IIとして分類することができよう。胎土はI、IIとも、長石、石英、雲母、くさり礫、角閃石が認められる。共伴する須恵器は杯(110)を除き、甕(112)、高杯(111)からT K208~T K23型式に位置づけられ、5世紀後半の年代が与えられる。ただ、須恵器杯(110)については土坑の最上層から出土したものであり、S K25出土土器が他の遺構出土土器とは編年的に大きな隔たりがあることから、混入した遺物と捉えることもできよう。

2) 弥生時代の遺構と遺物について

今回の調査で検出した弥生時代の遺構は、古墳時代や平安時代の遺構と重複する場合が多く各々の時期の整地や削平をうけているため全体を明確にできず、溝・井戸状遺構・土塹・ピット・壺棺墓などの断片的な資料を検出したにとどまった。ここでは溝・井戸状遺構・壺棺墓についてまとめておきたい。

壺棺墓について

壺棺1・2・3は、調査地点のもっとも北側の地点で周囲3mの範囲内で検出した。特に壺棺1・2は、上部を削平されているものの、保存状態は比較的良好であった。壺棺1・2とも頭部から上部の口縁部を打ち欠いて広げているものの、頸部周りは径17cm、19cmしかなく明らかに小児用の棺として使用されたことがうかがわれる。また、壺棺1のように鉢を転用して蓋としているところから壺棺2にも何らかの蓋があったと思われる。いずれの棺も壺より少しだきめの墓括を掘ったのち、正立の状態で棺を覆している。

さて、本地域において弥生時代中期には、瓜生堂遺跡や鬼虎川遺跡で検出されているように方形周溝墓が群を構成してつくられており、このあり方が中期の一般的な墓制であると考えられている。ところが後期の墓地の発見例が少なく、一部巨摩庵寺遺跡で後期の方形周溝墓が検出されているのみである。また、集落自体も中期の大規模集落から後期には分散的な小規模集落に移っており、この時期に集落の構成や墓制に大きな変化があったものと思われる。

今回検出した壺棺墓の周辺では、同時期の遺構は認められず、また検出地点も調査地の北端にあたるところから、住居跡などの集落の中心から少しだけ離れた地点に壺棺墓だけをつくっていたようである。弥生時代において日常に使用していた土器を転用した壺棺墓・甕棺墓が集落内で見つかる場合は多い。東大阪市内でも鬼虎川遺跡³⁵や西ノ辻遺跡³⁶で検出されている。後期では、鬼塚遺跡で口縁部を打ち欠いた大型の壺棺に鉢形土器を蓋にして正立させた状態で出土している。繩手遺跡でも大型の壺棺が検出されており、いずれも集落より少しだけ離れた地点で単独で検出されており、本例と非常に類似している。畿内における壺棺墓や甕棺墓が、このような例のように一般的なものかどうか、類例の増加を待って考えていく必要がある。

弥生時代の遺構の範囲

その他の遺構として、溝・井戸状遺構を検出している。井戸状遺構は、深さ130cmと190cmと比較的浅く、湧水点にも達していないように思われる。井戸以外の他の用途をもつ遺構であるかもしれない。SD78は、東から西への傾斜が認められ、他の溝も総じて同一の方向をもっている。これらのことより、集落の中心は、調査地外の東側に広がっていると思われ、今後継続した調査が期待される。

出土遺物について

弥生時代の土器は、遺構内より出土した土器が大半を占め、一部包含層出土の土器が認められる。ここでは遺構内出土土器に限ってまとめておきたい。

SE5出土土器は、現場の出土状況から第1層と2層とに分けることができた。しかしながら、1層の出土遺物は少なく2層とあまり大きな違いは認められない。しいていえば、1層には小型の土器が多く、中でも高杯・鉢などはすべて搬入品で占められている。また甕b₁の比率が少なく、甕Cの内面へラケズリ技法をもつタイプの土器が多く出土し、小型の鉢などが含まれていることなどから2層出土の土器よりは若干新しい要素が認められることである。2層の土器は、比較的まとまった良好な一括資料と考えられる。甕では、甕b₁とc₁が共存している。

甕b₁は「く」の字形に外反する口縁部に最大復径が体部中位にある少し胴張の体部がつき、底部はわずかに平坦面を残すが、丸底化の傾向が著しい土器であり、内面はナデ調整しケズリ調整は認められない。叩目は、底部から頸部まで同一方向に叩き上げる。胎土は、生駒西麓地方の胎土であり、器形、胎土とも北鳥池下層式に統く在地の土器といえる。甕c₁は、所謂庄内甕、河内甕と呼ばれるタイプで球形の体部には丸底の底部がつき、体部外面に細かな叩目、下半を刷毛目で調整し、内面へラケズリ技法で器壁を薄く仕上げている。甕b₁は、本地域の弥生時代後半の北鳥池下層式に統く上器であり、北鳥池下層式よりもさらに球形・丸底化が進んでいくが、内面のヘラケズリ調整はおこなわれていない¹⁹。このことは、甕b₁は、甕c₁の内面へラケズリ技法の上器が搬入されているにもかかわらず、その技法を取り入れることなく、従来の伝統的な技法の延長上につくられた在地の土器といえる。一部で(312)のように在地産の甕の内面に弱いケズリ調整が認められるものがあるが、器壁を薄くする目的でなく、軽い調整程度で一般的ではない。

甕b₁が、弥生時代から統く本地域の在地産の土器であるとするならば、従来いわれていた生駒西麓產c₁タイプの庄内甕は少なくとも西の口集落以外から搬入されたことになる。その時期は、甕b₁タイプが北鳥池下層式に統く形式であり、甕c₁タイプが從来の庄内式(上田町I式)の前半に属し、この両者が共存し、さらに小型器台が伴うという事実から庄内期の前半でも新しい時期に位置づけが可能である。少なくともこの時期では、甕の内面へラケズリ技法は在地の土器に採用されておらず、もっぱら大量に搬入されていた段階になる。甕b₁タイプの土器に内面へラケズリ技法が採用されるのは庄内期の後半になってからであり、最古の布留式に位置づけられる馬場川遺跡T地点出土の土器には、甕b₁タイプの土器はないところから、庄内期の後半には内面へラケズリ技法をもつc₁タイプの上器にとてかわられたと思われる²⁰。少なくとも庄内甕は、後期終末の北鳥池下層式から出現するものではないことがわかる。

S D78出土土器は、高杯が非常に多く出土している反面、壺の出土量が極端に少ないという特色があり、この造構の特殊性がうかがわれる。甕で見ると(261)の甕a₁は、古い形態を残すものの1点のみで他はb₁タイプの甕で占められている。甕c₁タイプに属する土器が2点出土しているが(272)の甕c₁は庄内甕であり、(273)は他地域からの搬入品である。S D78出土土器は甕c₁の出土量が少なく、S E5・S D80~85などが圧倒的に甕c₁の出土量が多いことと大きな違いがある。このことから、S D78は他の造構より先行する可能性が考えられる。以上のことから、今回検出した弥生時代の造構は、弥生時代の終末から庄内期の前半に属する造構と考えられる。

最後に炎天下の発掘作業に従事していただいた方々及び短期間に報告書を刊行するために手伝いしていただいた諸氏の氏名を記してお礼申し上げます。

大坂徹、森幸三、松下修、西村威、小川幸一、山内康資、柴崎俊也、藤江啓市、倉橋門治、任田邦嗣、飯田矩子、渡辺政子、永澤晴美、今村美子、安原文子、田所和佳、中野彰子、辻林美幸、大西ひとみ、岩下まり子、谷阪智子、小西明子、背戸香津、加藤奈穂美、上田

直子、榎本雅子、有木久子、田路紀美子、美馬美佐緒、大棒邦子、平井二三子(故)、西森忠幸、神農恵津子、若松尚子、黒松恵。

- (注)(1) 東大阪市遺跡保護調査会『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡』1979年
- (2) 水谷寿克・石井清司「京都府鎌古窯跡群」(『第4回中世土器研究会発表要旨』、1985年)
- (3) 萩田昭次「畿手の歴史散歩」1985年
- (4) 原島礼二「鬼の成立とその性格」(『日本古代王権の形成』所収、1977年)
- (5) 柳橋利光「御野原主神社」(『式内社調査報告』4(河内国)、1979年)
- (6) (4)に同じ。
- (7) 国史上に散見される美男連は次のとおりである。
美努連津麻呂：『続日本紀』慶雲2年12月条～慶雲4年5月条
“ 同麻呂：『続日本紀』天平2年正月条
“ 奥麻呂：『続日本紀』天平宝字8年10月条～神護景雲元年2月条
“ 智麻呂：『続日本紀』天平神護元年条～神護景雲3年条
“ 財女：『続日本紀』天平神武2年条～宝龟元年4月条
難波部立足：『続日本後紀』承和12年9月庚午条に、「筑前国宗形郡人權主工從八位上難波部主足。改本姓賜美努宿禰。貫河内国若江郡。」とある。
- (8) 『韓式系土器研究』I、2ページ、1987年
- (9) 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡II』1973年
- (10) 東大阪市立郷土博物館『弥生人のくらし』図録
- (11) 財團法人大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』1982年
- (12) 財團法人東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡第7次発掘報告—遺構編一』1984年
- (13) 植附遺跡昭和61年の調査で壺と壺を合口にした棺が検出されている。
- (14) 大阪府立花園高校地盤部「鬼塚遺跡」「河内古代遺跡の研究」1970年
- (15) 長井直正・都出比呂志『原始・古代の枚岡』1967年
- (16) 宇本隆裕「北鳥池遺跡出土土器の再整理」『東大阪市遺跡保護調査会年報』1980年
- (17) 東大阪市教育委員会「馬場川遺跡Ⅳ」1976年

觀 察 表

SK 3 (第7図、図版三十三)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	瓢	1	○30.1 ○30.4(椎)	○平底の底部から曲面してほぼ直線的に立ち上がり口縁部につづいている。底部で短く外反している。	○口縁部内外面ともヨコナダ。 ○体部外面は縱方向のハケメ調整のち斜面ナダる。内面上下部はユビオサエを残し、下部は板状工具により縱方向にナダ調整。	○精良、角閃石、雲母を含む砂粒を含む。 ○に赤褐色5Y R%。 ○焼成・良好。

SK 26 (第19図、図版四十二)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	羽 筆	2	○不明 ○31.6(現)	○口縁部及び底部を欠く。 ○氏羽形の体部。底部は丸く、始弾状を呈する。羽の張りは認められない。	○現存の体部外面上位より中央まで縱方向のハケメ調整(8条/cm)。中央から底部まで斜方向→横方向のハケメ調整(7条/cm)。 ○内面は不定方向のユビオサエ面がつく。	○やや粗い、角閃石、雲母を含む。生陶西面底の土器。 ○内面・明褐色7.5Y R%，外面・褐色7.5Y R%。 ○焼成・良好。

NR 1 (第24図、図版三十六)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	鉢	3	○15.5 ○9.2	○底部は平底で体部は球体をなす。 ○内凹する上部は、その端部に嵌い面を有し、上端は粘土をつまみ上げているため、上端と内方に突起がつく。 ○口縁の1/2時に片口がつく。	○口縁部内外面ともヨコナダ。 ○体部-底部外面はユビオサエのち上から下へラグナダで調整。 ○体部内面はハケメ調整(12条/cm)のもの、斜放射状の拵文がつく。	○精良、長石、石英の砂粒を含む。 ○褐色5Y R%。 ○焼成・良好。腹部下半に3cm大の円形窓跡が付く。(焼成時)

壺棺 1・2・3 (第32・33図、図版五十一)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
	体	4	○底径14.0 ○残高22.5 ○口縁部欠損	○底部欠損、壺棺1の蓋 ○すり残状の体部にゆるやかな外反する口縁部。端部は面をもって終る。 ○口縁部に片口をつくる。	○口縁部内外面ヨコナダ。 ○体部外側面に凹面(2.5条/cm)下半ナダ調整。内面ナダ調整。	○やや粗い。2~3mm大の角閃石多量。2~3mm大の長石粒、石英粒少量。 ○褐色(7.5YR %)
壺	壺 b2	5	○底径14.2 ○残高22.2 ○体部以下完存	○口縁部欠損、壺棺1 ○最大復元が体部中位にあるほぼ球形の体部にわずかに突出した小さな手疵がつく。 ○自立はできない。	○頂部に0.9cm間隔に割目を施こし、突起を1条めぐらす。 ○体部外側ヘラミガキ、内面ナダ調整	○やや粗い。2~3mm大の長石粒、角閃石多量。 ○褐色(7.5YR %)
棺	壺 b2	6	○底径5.4 ○残高48.2 ○体部以下完存	○口縁部欠損、壺棺2 ○最大復元が体部中位にある球形の体部にわずかに突出した小さな手疵がつく。 ○体部下位に巾1.0cm、長さ15.6cmの横長の孔があけられていれる。 ○自立はできない。	○頂部に断面三角形の突部をめぐらし、突部の両面に割目を施こす。 ○体部上半に波紋文、直線文を交互に3条ずつ施す。 ○体部外側ヘラミガキ、内面ナダ調整と思われるが、風化が激しく詳細不明。	○粗い。2~3mm大の長石、角閃石粒を多量に含む。 ○褐色(6YR %)
	壺	7	○底径27.0 ○残高16.7 ○側面欠損	○口縁部、底面欠損、壺棺3 ○最大復元が体部中位にある球形の体部	○体部外側凹面のちナダ。下半は削毛目調整、内面削毛目調整。	○やや粗い。2~3mm大の閃綠岩。1mm大の角閃石多量。1~2mm大の長石も目立つ。 ○明赤褐色(5YR %)

SK 5 (第34・35図、図版三十三・三十四・三十五)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
黑色土器	碗 A: b	8	○18.1 ○4.6 ○8.4	○平底の底部から口縁部まで内凹しながら縫く。 ○口縁部は丸い。 ○高台は断面凸形。	○口縁部外面、内面端はヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエを施す。内面は横方向の細密なミガキ。 ○見込みに縦方向のミガキ。	○精良、長石、角閃石を微量に含む板細糸。 ○内面、黒色N. ○外面、浅黄褐色10YR 8%。 ○焼成、良好。水ヒしているか。
	碗 A:	9	○17.9(復) ○4.2(復)	○平底の底部から口縁部まで内凹しながら縫く。端部は内側で沈痕をもつ。 ○高台は断面三角形。	○口縁部、内面端はヨコナデ。 ○体部外端はユビオサエを残す。内面は横→縦→横方向の細密なミガキ。 ○見込みにはミガキなし。	○精良。 ○内面、黒色N. ○外面、浅黄褐色10YR 8%。 ○焼成、良好
須恵器	杯	10	○9.5 ○3.6	○やや丸底の底部から粗面し体部上位より内凹ぎみに立ち上がる。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部へ体部内外面はヨコナデ。 ○底部外端はヘラ切りの後未調整。 ○内面は轴に仕上げナデ。	○精良、長石斑晶に含む。 ○灰色N. ○焼成、良好
	杯 A:	11	○13.4 ○3.1	○平底からやや内凹して口縁部へ閉く。 ○口縁部は強く外反し、端部は丸く納める。	○口縁部内外面は強いヨコナデ調整を行なっているため、外面上半に横がつく。 ○体部から底面にかけて内外面ともユビオサエを残す。未調整。 ○e 手法。	○精良、長石、食器部の砂粒を含む。 ○褐色5 YR %。 ○焼成、良好。
土師	碗	12	○16.1(復) ○4.6 ○7.3	○平底の底部から内凹気味に開き、体部下位で屈曲して外反しながら口縁部まで縫く。 ○口縁部は強く外反し、端部は丸く納める。 ○高台は断面凸形。	○口縁部内部端とも強いヨコナデ調整。 ○体部外表面は成形段階でのユビオサエ(追時計回り)が残っており未調整。内面は風化のため調整は不明瞭。 ○e 手法。	○精良。 ○浅黄褐色7.5 YR 8%。 ○焼成、良好。
	甕	13	○18.3 ○16.4	○やや平底気味の丸底。 ○体部は中位から上位にかけて弱く張る。 ○口縁部は強く外反して立ち上がり、端部でさらに粗面して面をなす。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部から底面にかけて外表面は追時計回りのユビオサエを残し、未調整。体部内面は調整不分明瞭。底部内面はユビオサエを残す。	○精良。 ○に、ない赤褐色3 YR 8%。 ○焼成、良好。
鉢	甕	14	○12.3 ○8.0(復)	○腹部は欠損するが、腹平な体部で強く外反する口縁部につづく。 ○口縁端部は丸く納める。 ○体部やや下位で弱く張る。	○口縁部外面ともヨコナデ調整。 ○体部外面は調整不明瞭。内面上半部では胎膜成形跡のユビオサエのちの板状工具で横へナデする。下半部はヘラグリののちナデで調整。	○やや低い、1~3 mmの砂粒を含む。 ○褐色2.5 YR 8%。 ○焼成、良好。一部に焼付有。
	甕	15	○12.1 ○6.5(復)	○腹部は欠損。 ○強く張った体部に強く外反する口縁部がつく。端部は丸く納める。	○口縁部外面はヨコナデ。内面は横方向のハケメ調整ののちヨコナデにより仕上げる。 ○体部外表面は糊化若しくユビオサエが付すべく残る。内面は追時計回り方向の板状工具によるナデを行なう。	○やや粗く、角閃石、長石、石英、食器部の砂粒を多く含む。 ○明赤褐色2.5 YR 8%。 ○焼成。
器	甕	16	○16.2 ○10.4(復)	○底部から体部下半部を欠損。 ○体部は強く張り、端部で内凹しながら口縁端部へ強く外反し、丸く納める。	○口縁部外面はヨコナデ。内面は横方向のハケメ調整ののちヨコナデで仕上げる。 ○体部外表面は糊化若しくユビオサエが付すべく残る。内面は上位にユビオサエが残り下位にヘラグリを行なう。	○くさり織、角閃石、長石、食器部の砂粒(2~5 mm大)を多量に含む。 ○褐色5 YR 8%。 ○焼成、良好。脂膜より以下一面に焼付有。
	羽釜 A	17	○44.3 ○18.0(復)	○底部を欠く。 ○体部は中位で強く膨出し外へ閉く。 ○口縁部は内凹気味に開き、端部は丸く納める。 ○内面は強く斜下方につき、端部は丸く納める。	○口縁部内外面とも追時計回りのヨコナデ。 ○内面は外面ヨコナデ。内面はユビオサエを残す。 ○体部外面はナデ、内面は、ユビオサエを行なう。	○やや粗い、石英、長石、角閃石等の砂粒を多量に含む。 ○黄褐色10 YR 8%。 ○焼成、良好

器種	器形	番号	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
土 陶 器	羽 蓋 A	18	○34.8(復) ○16.7(復)	○底部欠損。 ○体部はやや下位で強く屈曲し、外へ開く。 ○口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸く納める。 ○筒は短く水平につき、端部は丸く納める。	○口縁部から筒部にかけて内外面ともヨコナデ。 ○体部外面は口縁部から引き籠きヨコナデを行ない、屈曲位より、下にはタキメを施す。内面はユビオサエを施す。	○やや粗い。1~5mmの砂粒、石英、長石、雲母を含む。 ○にぶい赤褐色YR%。 ○焼成、良好。
	羽 蓋 A	19	○39.4 ○7.0(復)	○底部から体部下位を欠損。 ○体部は外へ開く。 ○口縁部は上方につまり上げ、端部は面をなす。 ○筒は短く斜下方につき、端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外面はヨコナデ調整、内面から体部にかけてユビオサエを残す。	○やや粗い。石英、長石、雲母、1~4mmの砂粒を含む。 ○褐色7.5YR%。 ○焼成、良好。
	羽 蓋 B	20	○21.5(復) ○5.8(復)	○底部、体部ともに欠く。 ○口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸く納める。 ○筒部は水平につき、端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○筒部外面はヨコナデ、内面はユビオサエを残す。	○やや粗い。1~5mmの砂粒、角閃石を含む。 ○褐色7.5YR%。 ○焼成、良好。
	羽 蓋 B	21	○21.7 ○5.6(復)	○底部体部ともに欠く。 ○口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く納める。 ○筒部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○筒部外面はヨコナデ。内面はユビオサエを残す。	○やや粗い。1~4mmの砂粒、角閃石を含む。 ○褐色7.5YR%。 ○焼成、良好。
	羽 蓋 B	22	○23.4(復) ○5.7(復)	○底部、体部ともに欠く。 ○口縁部はやや外方へ開き、端部は丸く納める。 ○筒部は水平につき、端部は丸く納める。	○口縁部外面はヨコナデを施すが、その下にユビオサエが残る。内面はヨコナデ。 ○筒部は外側ヨコナデ、内面はユビオサエを残す。	○精良。 ○褐色7.5YR%。 ○焼成、良好。
	瓶	23	○不明 ○不明	○体部のみ残存。 ○内巻きみに立ち上がり、体部上位で内傾する。	○体部内外面ともユビオサエを残す。 ○底部外面はユビオサエ成形のもの、縦方向のハケメ調整、内面はユビオサエのち、ヘラケズリ。	○精良、石英、長石含む。 ○赤褐色3YR%。 ○焼成、不良。

SK 6 (第35図、図版三十三・三十四・三十五)

器種	器形	番号	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
瓶 器	杯	24	○9.2 ○2.7	○平底から細曲筋、体部は上方へ大きく開く。 ○受部は短く斜上方へ伸びる。 ○立ち上がりは短く、強く内傾し、端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○受部→上方に半球状ヨコナデ。 ○下部は追跡調回りのヘラケズリ。 ○底部外面はハサカッタ切り後未調整。 ○体部内面はヨコナデ。底部内面に往上げナデ。	○精良、黒雲母、長石の砂粒を含む。 ○褐色7.5YR%。 ○焼成、良好。水としている。
	杯	25	○11.0 ○3.0	○平底から外方へ開き、体部中位で屈曲して直線的に立ち上がる。 ○口縁部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○底部外面はハサカッタ切りの後未調整。 ○内面は仕上げナデ。	○精良、長石中量に含む。 ○褐色7.5YR%。 ○焼成、良好。
土 陶 器	杯 A ₁	26	○16.0 ○3.9(復)	○丸底から外方へ開く体部が外反し、口縁部につづく。 ○口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は丸く納める。	○口縁部は内外面ともヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエを残す。内面は放射状の哈文。 ○底部内面はナデ調整。	○精良、長石、角閃石、 くさり織の細網を含む。 ○褐色5YR%。 ○焼成、良好。水としている。
	瓶 器	27	○13.3 ○11.5	○丸底から球体に近い体部がつづく。 ○口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部できらんに外折して面をなす。	○口縁部内外面とも横方向のハケメ調整のものヨコナデ。 ○体部→底部外面はユビオサエ成形のもの縦方向のハケメ調整。 ○体部内面上部は板状工具による縦方向のナデ。下部は時計回りのユビオサエが円周状に連なる。	○非常に精良、長石を質量に含む程度。 ○褐色5YR%。 ○焼成、良好。脚部外面上に達成時の黒斑あり。

S E 2 (第35図、図版三十三・三十五)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
黒色土器	杯	28	○19.4(復) ○7.1(現)	○底部欠損。 ○ゆるやかに内曲する体部に短く外反する口縁部がつづき、さらに端部で外折して面をなす。	○口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は延時計回りのヘラケズリのあと、延時計回りのヘラミガキを行なう。内面は緻密なヘラミガキ調整。	○精良、微量に長石が認められる。 ○内面・暗灰色N3%。 ○外面・にじむ褐色 7.5YR 4%。 内面及び外面の口縁部下手(ヨコナデを施した範囲)まで黒色を示す。 ○焼成・良好。
	杯B	29	○16.4(復) ○3.3 ○5.2	○平底から外方へ大きく開いて立ち上がり、口縁部で短く外反する。 ○口縁端部は丸く納める。 ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面ともヨコナデ。体部内面は風化致しいが、下半部はユビオサエを残す。 ○体部内面は風化のため調整法不明 ○e手法。	○不良、長石、石英、角閃石、金雲母の砂粒を含む。 ○淡青緑色10YR%。 ○焼成・やや不良。かなり厚起している。
土師器	杓	30	○15.0(復) ○4.9 ○6.7	○平底から内湾ぎみに立ち上がり、体部中段で屈曲して、口縁部まで大きく外方へ開く。 ○口縁部は短く外反して、端部は丸く納める。 ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面、体部内面は、29と同じ。 ○体部外表面はユビオサエ成型のものでは無調整。 ○e手法。	○石灰、金雲母、角閃石の細砂を含む。 ○松葉・褐色7.5YR 4%。 ○焼成・やや不良。
	杓	31	○13.5(復) ○4.8 ○4.6	○30と同じ。	○口縁部内外面、体部外表面は、30と同じ。 ○体部内面はナゲ調整。 ○e手法。	○長石、石英、金雲母の細砂を含む。 ○松葉・褐色7.5YR 4%。 ○焼成・良好。褐色灰(7.5Y R 4%)を呈する頗らが点在する。
	盤	32	○17.0(復) ○4.6(現)	○口縁部のみ残存する。 ○内傾する体部に短く外反する口縁部がつづき。 ○口縁端部に外方へ短く突いた面がある。	○口縁部-体部外表面は一面に模様が付着しているため調整法不明。外端のみヨコナデ。内面は横方向のハケメ調整。 ○体部内面はユビオサエを残す。	○長石、金雲母、石英、角閃石の砂粒を多量に含む。 ○褐色7.5Y R 4%。 ○焼成・良好。

S E 3 (第35図、図版三十三・三十五)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯	33	○23.9(復) ○8.1(現)	○底部及び体部下部欠損。 ○内側で開く体部に短く外傾する口縁部がつづき。 ○口縁端部は面をなす。	○口縁部-体部内外面ともヨコナデ。 ○体部外表面はすり石状のものでナゲで仕上げる。内面はヘラミガキ。	○精良。 ○灰白色10YR%。 ○焼成・良好。
黒色土器	瓶A1-a	34	○14.1(復) ○4.7 ○6.4	○平底からゆるやかに内凹して体部から口縁部まで直線的に開く。 ○口縁端部はかすかに内傾して沈線をもち、丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外表面はすり石状のものでナゲで仕上げる。内面はヘラミガキ。 ○見込みは縦方向のヘラミガキ調整。	○やや粗い、石英、長石、角閃石、くさり砂を含む。生焼内装車の土器。 ○内面・黑色N3%。 ○外表面・にじむ褐色7.5YR 4%。 ○焼成・良好。

N R 2 (第36図、図版三十六・四十九)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋A-a	35	○13.6 ○3.9(復)	○穴井部の大部分(口縁部とを分ける接合部以外)をティ本イにハラケズリ(時計回り)し、ほとんど平らにつくる。 ○天井部と口縁部とを分ける接合部は夷成して、鋸目。 ○口縁部先端から後までの高さは2.0mmを測り、縫から先端まで削度におちる。	○口縁部-体部内外面はヨコナデ。	○精良、長石含む細砂。 ○灰色N3%。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法 番(cm)	形態の特徴	技 法 の 特 濟	備 考
蓋	A1-a	36	○12.5 ○4.6	○天井部は丸味を帯び、光をヘラケズリ(速時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける棱は短く低い。 ○口縁部先端から縁までの高さは2.2cmを測り、端面は内側に傾斜し段を構成する。	○35と同じ。	○精良、長石を含む細砂、 ○吉田色5BG界。 ○焼成・良好。
	A1-a	37	○14.4(復) ○4.7(復)	○天井部は丸く光をヘラケズリ(速時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける棱は短く、低い。 ○口縁部先端から縁までの高さは2.1cmを測り、端面は内側に傾斜し、段を構成する。	○36と同じ。	○粗い、1~7mmの大粒石を多量に含み突出している。 ○灰褐色N%。 ○焼成・良好。
頭	蓋	38	○14.7 ○5.6	○天井部は丸くふくらんで、光をヘラケズリ(速時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける棱は短く丸味を帯びる。 ○口縁部先端から縁までの高さは2.4cmを測り、端面は内側に傾斜し、段を構成する。	○35と同じ。	○やや粗い、長石を含む細砂、7mmの大粒がとび出している。 ○灰褐色N%。 ○焼成・良好。
	蓋	39	○12.1(復) ○4.0(復)	○天井部の大半を欠損。 ○天井部と口縁部とを分ける棱は短く丸い。 ○口縁部先端から縁までの高さは2.5cmを測り、端面は内側に傾斜し段を構成する。	○35と同じ。	○さわめて精良、長石、微量に含む。 ○暗緑色10G界。 ○焼成・良好。
底	蓋	40	○不明 ○不明	○天井部は平坦なつくりで、光をヘラケズリ(速時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける棱は短く丸い。 ○口縁部先端から縁までの高さは2.5cmを測り、口縁部はほぼ垂直に下降し、端面はやや内側に傾斜して、内側に1条の比較的めぐらぐる段は構成しない。	○天井部内面に同心円状のタガメが見られる。	○精良、長石を含む。 ○灰褐色N%。 ○焼成・良好。
	蓋	41	○15.1(復) ○4.2(復)	○自然物が付着しているため、天井部のヘラケズリは不明だが、丸味をもっているので、広範囲にはわかららないと思われる。 ○天井部と口縁部とを分ける棱や凹縫は認められない。 ○口縁部は外に向いて、端部は丸く納める。	○口縁部一体部内外面ともヨコナゲ。	○やや粗雑、4mmの大粒石を含む。 ○灰褐色N%。 ○焼成・良好。
器	杯	42	○11.6(復) ○4.4(復)	○立ち上がりは1.5cmを測り、内傾して光場は低い。 ○内面に段を構成する。 ○受部は外上方に伸び、光場は丸く納める。 ○底部はやや平腹で、ヘラケズリ(速時計回り)は底部の光である。	○35と同じ。	○精良。 ○灰褐色N%。 ○焼成・良好。
	杯	43	○13.1(復) ○3.6(復)	○立ち上がりは1.5cmを測り、内傾しながら、光場で垂直に立ち、丸味をもつ。 ○受部は短く外上方に伸び、光場は丸く納める。 ○底部は丸味をおび、ヘラケズリ(速時計回り)の光である。	○口縁部一体部内外面ともヨコナゲ。 ○底部のヘラケズリは粗く、底部中央ではヘラ切り痕がそのまま残る。	○精良、長石、微量に含む。 ○灰褐色N%。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	壺	44	○15.8(腹) ○22.3(底)	○先り気味の底部に、体部は丸くつくり、肩が張る。 ○底部は外反しながら開き、口縁部は上下に拡張せている。 ○口縁部は高いがやや丸味をもつ。	○表面底部から腹部にかけて、前方の平行タタキ目が施され、腹部から頸部へ、その上にカキメ調整が行なわれる。 ○内面底部から体部全面に同心円状のタタキ目を施す。 ○口縁部内外面、颈部内面はヨコナダ。	○精良、3mmの砂粒を含む。 ○内面・底色Nグ。 ○外側・片部まで底白色Nグ。以下底部まで暗灰色Nグ。 ○焼成・良好。

ピット内土器(第31図、図版四十二・四十九)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須	蓋 Aa-a	45	○不明 ○不明	○口縁部～体部のみ残存。 ○天井部と口縁部とを分ける棱は近く見いだ。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.6cmを測り、端部で近く外に開き、内側に段を構成する。		○精良、長石を中量含む。 ○灰褐色Nグ。 ○焼成・良好。 ○S P 20内出土。
須	蓋 Aa-b	46	○不明 ○不明	○口縁部～体部のみ残存。 ○天井部と口縁部とを分ける棱は近く見いだ。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.1cmを測り、端部で内側に傾斜してわずかに段を構成するが、先端は丸く納めている。		○精良、長石多量に含む。 ○灰褐色7.5YR G。 ○焼成・良好。 ○S P 22内出土。
須	蓋 Aa-b	47	○不明 ○不明	○口縁部～体部のみ残存。 ○天井部と口縁部とを分ける棱は近く見いだ。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.2cmを測り、端部で内側に傾斜して段を構成するが、先端は丸く納めている。		○精良、長石微量に含む。 ○青灰色5 B G。 ○焼成・良好。 ○S P 32内出土。
器	杯 Aa-a	48	○不明 ○不明	○立ち上がり～体部のみ残存。 ○立ち上がりは2.5cmを測り、ほぼ直面に立つ。先端は鋭い。 ○受部は水平に伸び、先端は丸い。	○立ち上がり～体部内外面のヨコナダ調整はきわめてティキイである。	○精良、長石微量に含む。 ○灰褐色Nグ。 ○焼成・良好。 ○S P 22内出土。
器	杯 Aa-b	49	○不明 ○不明	○立ち上がり～体部のみ残存。 ○立ち上がりは1.8cmを測り、ほぼ直面に立つ。先端は丸く納める。 ○受部は水平に伸び、先端は丸味を帯びる。		○精良、長石微量に含む。 ○灰褐色10 YR G。 ○焼成・良好。 ○S P 75内出土。
器	杯 Aa-a	50	○不明 ○不明	○立ち上がり～体部のみ残存。 ○立ち上がりは0.7cmを測り、追跡ノ字状に斜く外反する。先端は丸く納められる。 ○受部は水平に伸び、先端は丸く納める。厚部は厚い(6mm)。		○精良、長石微量に含む。 ○青灰色5 B G。 ○焼成・良好。 ○S P 68内出土。
器	高杯	51	○不明 ○不明	○立ち上がり～体部のみ残存。 ○首部はゆるやかに外方に傾いて断面で段を作ること。輪部は内下方につまみ上げている。	○颈部外側は粗いカキメ調整。輪部～瓶部外側はヨコナダ。 ○瓶部内面はシヨリメ。	○精良。 ○青灰色5 B G。 ○焼成・良好。 ○S P 23内出土。
土 師 器	壺	52	○不明 ○12.1(腹) ○7.7	○底部から延曲後、外傾して開き、体部中央でさらに屈曲して内側する。	○体部外面上半は、縦方向のハケメ調整(6mm/cm)。下半は斜方向のハケメ調整(6mm/cm)を施す。底部は横方向のハケメ調整(6mm/cm)。	○精良。 ○他色5 Y R G。 ○焼成・良好。 ○S P 7内出土。

S D65 (第38図、図版三十七・三十八・四十五・四十九)

器種	基形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
壺	蓋 A1-a	53	○13.5 ○4.9	○天井部は扁平で、口をヘラケズリする。 ○天井部と口縁部とを分ける縫は瓶く突出して無い。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.7cmを測る。縫面は内側に傾斜して段を構成する。	○底部のヘラケズリの方向は不明。(自然積付着のため) ○口縁部一全体部内外面はヨコナナ。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰色5PB5%。 ○焼成・良好。表面の摩耗が甚しい。
	蓋 A1-b	54	○13.9 ○8.1	○天井部は丸く、口をヘラケズリ(時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける縫は丸味を帯びる。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.7cmを測る。 ○口縁部はやや傾いて下降し、縫部はやや丸味をもつ。	○53と同じ。	○長石、角閃石等の砂粒を多量に含む。 ○灰褐色N%。 ○焼成・不良。かなり摩滅し、粘土中の砂粒が裏面に出ていている。焼成時の重みを口縁部にうけた。
	蓋 A1-b	55	○13.9(復) ○5.2(他)	○天井部はやや丸味を帯び、口をヘラケズリ(時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける縫は丸味をもつ。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.4cmを測る。 ○口縁部はほぼ直立に下降し、縫部は丸味をもつ。	○53と同じ。	○精良、長石、金雲母、石英の砂粒を含む。 ○明青灰色5BG%。 ○焼成・良好。
壺	蓋 A1-b	56	○14.2 ○5.3	○天井部は丸味を帯び、口をヘラケズリ(時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける縫は瓶く、丸い。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.2cmを測る。 ○口縁部はほぼ直立に下降し、縫部は丸味をもつ。	○53と同じ。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰褐色5B%。 ○焼成・良好。
	蓋 A1-b	57	○13.0(復) ○4.5(他)	○天井部は扁平で、口をティキイヘラケズリ(時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける縫は瓶く、丸い。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.1cmを測り、縫面はやや外反し、内側に傾斜して段を構成する。	○53と同じ。	○やや不良、長石、チャートの砂粒を含む。 ○青灰褐色5B%。 ○焼成・良好。
	杯 A1-a	58	○12.9 ○5.5	○立ち上がりは2.1cmを測り、よし内傾し、縫面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平に伸び、先端は瓶く。 ○底部はやや扁平で、ヘラケズリ(時計回り)は底部の約である。	○口縁部一全体部内外面ともヨコナナ。 ○底部内面に仕上げナナデあり。 ○底部内面に同心円状のタタキメが残る。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰褐色10BG%。 ○焼成・良好。
器	杯 A1-a	59	○12.6 ○5.3	○立ち上がりは2.0cmを測り、内傾し、縫面はやや間に開くが、内側に瓶く段を構成する。 ○受部は水平からやや上方に伸び、先端は瓶く。 ○底部は丸く、ヘラケズリ(時計回り)は底部の約である。	○底部内面の仕上げナナデは認められない。	○精良、長石を含む砂粒を多量に含む。 ○灰白色10%。 ○焼成・良好。乾燥時の重みあり。
	杯 A2-a	60	○12.5(復) ○4.9(他)	○立ち上がりは1.7cmを測り、ほぼ直立に立ち、縫面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平に短く伸び、先端はきわめて瓶く。 ○底部はほぼ扁平でヘラケズリは底部の約である。	○底部内面の仕上げナナデは認められない。 ○自然積付着のため、ヘラケズリの方向は不明。	○精良。 ○内面・灰白色N%。 ○外面・オリーブ色2GY9%。 ○焼成・良好。外面に供給付着。

器種	器形	番号	法 直(cm)	形 態 の 特 徵	技 法 の 特 徵	備 考
皿	杯 Az-a	61	○15.5(復) ○4.8(椎)	○立ち上がりは1.7cmを測り、垂直に立ち、先端は鋭い。内側にかすかに段を構成する。 ○受部は外上方へ伸び、先端は鋭い。 ○底部はやや扁平で、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の約である。		○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰褐色10B G%。 ○焼成・良好。表面の摩滅が害しい。
	杯 Az-a	62	○12.0 ○5.2	○立ち上がりは1.7cmを測り、内傾して、先端は鋭いが根はない。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は鋭い。 ○底部は丸味をもち、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の約である。	○38と同じ。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰褐色5 B%。 ○焼成・良好。口縁が乾燥時に歪んで、だ円を呈している。
	杯 Az-a	63	○9.5(復) ○4.9(椎)	○立ち上がりは1.6cmを測り、内傾して、端面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平からやや外上方に短く伸び、先端は鋭い。 ○底部は丸く、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の約である。		○精良、長石、黒雲母を砂粒で含む。 ○灰褐色N%。 ○焼成・良好。
	杯 Az-b	64	○13.6(復) ○5.3	○立ち上がりは1.6cmを測り、垂直に立ち、先端は丸く納める。 ○受部はやや外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は丸く、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の約である。		○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰褐色10B G%。 ○焼成・良好。
	杯 Az-b	65	○13.7(復) ○4.5(椎)	○立ち上がりは1.5cmを測り、内傾し、先端は丸く納める。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸味をもつ。 ○底部の大部分を欠損しているため、形状不明。	○底部のヘラケズリは時計回り。	○精良、長石を砂粒で含む。 ○青灰褐色5 P H%。 (自然釉部・青褐色 5 B G 1%), ○焼成・良好。体部外面に部分的な自然釉、受部に倒伏坂2ヶ所有り。
	杯 Az-b	66	○12.9(復) ○5.1	○立ち上がりは1.7cmを測り、内傾して、先端は丸く納める。 ○受部はやや外上方に伸び、先端は丸味を帯びる。 ○底部は丸味をもち、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の約である。		○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰褐色10B G%。 ○焼成・良好。
	杯 Az-b	67	○13.7(復) ○5.9(椎)	○立ち上がりは1.7cmを測り、ほぼ垂直に立ち、先端は丸く納める。 ○受部はやや外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は丸味をもち、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の約である。		○精良、長石の砂粒を含む。 ○灰褐色10 Y%。 ○焼成・良好。
	杯 Az-b	68	○14.2(復) ○4.3(椎)	○立ち上がりは1.5cmを測り、内傾して、端面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平に伸び、先端は丸味を帯びる。 ○底部はやや歪んで、扁平な感じである。ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の約である。		○精良、長石の砂粒を微量を含む。 ○青灰褐色10 B G%。 ○焼成・良好。
	杯 Az-b	69	○12.5(復) ○4.7(椎)	○立ち上がりは1.5cmを測り、内傾して、先端は丸く納める。 ○受部は水平に伸び、先端は丸味を帯びる。 ○底部は丸く、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の約である。		○精良、長石を含む砂粒を含む。 ○青褐色5 B%。 ○焼成・良好。

器種	基形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
頬	杯 A3-B	70	○12.4(復) ○4.5	○立ち上がりは1.3cmを測り、やや内傾し、端面はほぼ垂直に立ち。内側に段を構成する。 ○受部は水平に近く伸び、先端は低い。 ○底部は扁平で、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の3%である。	○仕上げナデは認められない。 ○底部のヘラケズリはサイネイに行なわれている。	○精良、長石、金雲母の砂粒を含む。 ○青灰色10B G%。 ○焼成、良好。
	高杯		○11.4 ○10.8 ○7.9	○杯脚は浅く、口縁部は底より外反する。体部との境に1条の凹線(幅2mm)がめぐる。 ○脚部は細長くラッパ状に開き、端部で脚をなす。 ○脚部内面下方につまみ上げており、先端は低い。 ○脚部の造りは四角形で三方にあけられていっている。	○口縁部内外面、体部内面ともヨコナナデ調整。底底部内面に仕上げナデが認められる。 ○体部外表面は時計回りのテイネイなヘラケズリを行なう。 ○脚部にカキメを施す。 ○脚部一端部はテイネイなヨコナナデ調整。	○精良、長石を多量に含む。 ○灰白色10Y%。 ○焼成、良好。
脛	提	72	○7.1(復) ○8.0(現)	○口縁部と肩部のみ残存。 ○瓶と外反する口頭の端部は外方につまみ出され、底部との境は認めない。 ○体部前面は丸くふくれ、背面は削り。 ○体部側面の耳は端状。	○腹部外表面はカキメ調整。 ○体部前面は自然釉付のため調整法不明。	○精良、1~3mmの砂粒を含む。 ○内面、灰色N%。 ○外表面、明暗灰色10G%。 ○焼成、良好。外面に灰釉付着。
	瓶		○12.1(現) ○4.0(現)	○底から内面気味に開いて、そのままで神縫部までつなぐ。 ○口縁部は丸く納める。	○準純のため内外面とも調整法不明	○粗い、石英、長石、角閃石の砂粒を多量に含む。 ○にほい赤褐色2.5YR%。 ○焼成、不良。
土	鉢	73	○10.7(復) ○6.2	○やや立ち上り底部から弧曲後、直線的にラッパ状に大きく開いて口縁部に続く。 ○口縁部は丸く納める。	○口縁部内外面、体部~底部内面はヨコナナデ調整。 ○体部外表面はハケメ調整(14条/cm)。 ○底部は外周から中心に向かってのヘラケズリ。	○きわめて精良、砂粒は認められない。水と合行なう。 ○橙色5Y R%。 ○焼成、良好。
	蓋		○11.5(現) ○9.4	○底部は丸底でやや扁平なつくりの体部。 ○口径と側面部はほぼ同じ。 ○口縁部はゆるやかに開いて外反する。端部は丸く納める。	○口縁部一端部内外面ともヨコナナデ。 ○底部はヘラケズリと思われるが、準純のため方向不明。	○きわめて精良、1~3mmの砂粒を微量に含む。 ○橙色5Y R%。 ○焼成、良好。
器	裏 B1	76	○19.7(復) ○24.4(現)	○口縁部のみ残存。 ○底から外反する口縁部。 ○端部はわずかに画をなす。	○内外面ともにヨコナナデ調整するほか、底部外表面にはヘラ抜工具によるあたりがつく。	○精良、0.5~2mmの砂粒、雲母を含む。 ○橙色5Y R%。 ○焼成、良好。
	羽釜	77	○17.5(現) ○5.0(現)	○脚部周辺のみ残存。 ○内傾する体部に外反する口縁部がつく。 ○底部は水平につき、端部は丸く納める。	○体部内面にユビオサエ痕が残る以外は内外面ともヨコナナデ。	○精良、1~4mmの砂粒、雲母を含む。 ○にほい赤褐色5Y R%。 ○焼成、良好。

SD 67 (第39・40図、図版三十九・四十・四十一・四十二・四十五・四十七)

器種	基形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
頬	蓋 A2-a	78	○14.6 ○3.8(現)	○天井部と口縁部との境界に1条の凹線(幅2mm)がめぐる。 ○口縁部はやや外方に下降し、端部でさらに外折し、低い。 ○天井部は大部分を欠損するが丸味をもつて考えられる。	○施部は逆時計回りのヘラケズリのあと不定方向のナナデ調整。	○精良。 ○明青灰色5B%。 ○焼成、良好。
	蓋 B		○12.3 ○3.5	○天井部と口縁部とを分ける横、縦線は認められない。 ○天井部のヘラケズリは認められない。 ○口縁部はやや引き気味に下降し、先端は丸味を帯びる。	○天井沿部はヘラ切り後、粗いナナデを施す。 ○全体に調整は粗い。	○精良。 ○青灰色5B%。 ○焼成、良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形成の特徴	技法の特徴	備考
縦	杯 Aa-a	80	○10.8(幅) ○5.0(幅)	○立ち上がりは1.6cmを測り、ほぼ垂直に立つ。裏面はわずかに外反し、内側に段を構成する。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は鋭い。	○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、長石を0.1~1mmの粒度で含む。 ○青灰色5B% ○焼成・良好。
	杯 Aa-b	81	○14.1(幅) ○4.6(幅)	○立ち上がりは1.7cmを測り、内傾して、先端は丸く納める。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸く納める。	○底部のヘラケズリの方向は不明。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○灰白色N% ○焼成・良好。
	杯 Aa-a	82	○12.2(幅) ○4.2(幅)	○立ち上がりは1.4cmを測り、強く内傾する。先端は鋭いが、裏面の内側には段はない。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。	○底部にヘラケズリがみられるが、方向は不明。	○精良。 ○灰白色N% ○焼成・良好。
	杯 Aa-b	83	○12.2(幅) ○2.5(幅)	○立ち上がりは0.8cmを測り、逆「ノ」の字状に原く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。	○口縁部~体部内外面はヨコナデ。	○精良。 ○灰白色N% ○焼成・良好。
	杯 Aa-b	84	○12.9(幅) ○3.9(幅)	○立ち上がりは0.7cmを測り、逆「ノ」の字状に原く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は水平にや長めに伸び先端は丸く納める。 ○底部は扁平。	○底部は逆時計回りのカキメ調整(9条/cm)を施す。	○精良。 ○青灰色10B G% ○焼成・良好。
	杯 Aa-b	85	○11.7 ○2.5	○立ち上がりは、0.7cmを測り、逆「ノ」の字状に原く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平だが開凸欲しい。	○体部外面に強くヨコナデ調整を行なう。 ○底部はヘラ切りの技术調整。	○精良。 ○灰白色N% ○焼成・良好。
直	杯 Aa-b	86	○10.0(幅) ○3.4	○立ち上がりは0.7cmを測り、逆「ノ」の字状に原く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は同じ。	○83と同じ。	○精良。 ○青灰色10B G% ○焼成・良好。
	杯 B	87	○9.6 ○3.7	○体部と底盤とは明瞭な角度で分かれ。○底盤は直線的に外上方に伸び、そのままで縁部につづく。 ○口縁部は丸く納める。	○口縁部~体部内外面ともヨコナデ。 ○底部はヘラ切りの後工程調査。 ○底部内面に済用窓の仕上ヨコナデが認められる。	○精良。 ○内面・灰白色N% ○外面・灰白色7.5Y% ○焼成・良好。
器	縫 88		○11.7(幅) ○15.4(幅)	○底部はさわめて細く、口縁部は大きくラッパ状に閉く。 ○底部や口縁部は2条の凹線をめぐらし、口縁部との間に横引き剥離を施すが、底部上位に凹線を1条めぐらせることにより横引き剥離を中断させている。 ○肩部に1条、体部下位に1条の凹線をめぐらし、その間に横引き剥離をめぐらす。	○底部はナデ調整による。	○精良、長石を砂粒で含む。 ○明灰青色5B% ○焼成・良好。
	縫 89		○不明 ○9.9(幅)	○底部は丸く、口縁部は外傾して開く。 ○底部はやや上位で肩が張る。	○底部~体部内外面ともヨコナデ。 ○底部は粗い逆時計回りのヘラケズリ。	○やや粗い、長石多量に含む。 ○青灰色5B% ○焼成・良好。
揚	皿 90		○5.5(幅) ○21.1(幅)	○口縁部欠損。 ○口縁部は短く外反する。 ○底部は前面と丸くくぶれる。背面は平らである。 ○底部両側の耳は闊状	○体部前面は回転を利用したカキメ調整。	○精良。 ○灰白色N% ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
類	提 瓶	91	○不明 ○15.4(現)	○口部欠損。 ○口部は短く外反するか。 ○体部前面はあまりふくらみをもたず、中央で内側に向む。 背面は斜めに扁平となっている。 ○体部両側の耳は円形粘土を貼り付けたものである。	○体部前面は回転を利用したカキメ調整。 ○体部背面は中心から外周に向う逆時計回りのヘラケズリ。	○精良、0.5mmの砂粒を多く含む。 ○灰褐色7.5YR%。 ○焼成・良好。
	甕 A	92	○21.6(復) ○18.7(現)	○口頭部一部のみ残存。 ○短く外反する口頭部は、腹部で上方にまみ上げて面をなす。 ○外頭部は直腹半円形の段をつくり外面端との間に1条の深い凹縫をめぐらす。 ○最大径は高軸部。	○口頭部内外面ともヨコナデ。 ○肩部内面に同心円文のタクキメを施す。 ○肩部外面は自然輪付者のため不明。	○精良、長石を砂粒で含む。 ○内面・明青灰褐色5B%。 ○外面・青灰褐色5B%。 ○断面・蘭灰色5RP%。 ○焼成・良好。
甕 器	甕 B	93	○不明 ○不明	○口頭部のみ残存。 ○短く外反する口頭部の端部は直立して頸部との境界は段をなす。 ○提梁の口頭部がもしれない。	○内外面ともヨコナデ。特に、面部外周はティネイナヨコナデを施す。	○精良、長石に砂粒を含む。 ○青灰褐色5B%。 ○焼成・良好。
	甕 A	94	○22.0(復) ○3.2(現)	○口頭部のみ残存。 ○外反する口頭部は腹部で下方に伸びる。	○内外面ともヨコナデ。	○精良。 ○青灰褐色5B%。 ○焼成・良好。
甕 器	甕 B	95	○24.8 ○7.3(現)	○口頭部・肩部のみ残存。 ○短く外反する口頭部は腹部で水平に粘土を引き出して丸く仕上げる。 ○体部はあまり肩が張らず、最大径は中位部になるようである。	○口徑部・体部内外面ともヨコナデ。 ○肩部内面は同心円文のタクキメを施したのち、ヨコナデで仕上げる。	○精良、0.1~3mmの長石を砂粒で含む。 ○灰褐色N%。 ○焼成・良好。
	杯 A2	96	○12.3 ○3.9	○やや上げ底の底からら内円弧味に開き口縁部からは直立立ち上がり。 ○口縁端部はわずかに外反して丸く納める。 ○体部中央の二ラミガキ痕が回旋状に1条めぐる。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外周は不定方向のヘラケズリ。 ○内面は放射状の暗線。	○精良。 ○橙色2.5YR%。 ○焼成・良好。
甕 器	杯 B	97	○10.7(復) ○3.5	○丸底から内凹して開き、口縁部からは直立立ち上がり。 ○口縁端部は外反して丸く納める。 ○唇部表面の摩耗がほなほだしい。	○内外面ともヨコナデ調整、体部外周にかすかにユビオサニ痕が部分的に認められる。	○精良。 ○橙色2.5YR%。 ○焼成・良好。
	杯 B	98	○11.1(復) ○3.3	○平底から弧曲内凹して開きそのまま口縁部につづき、唇部はわずかに外反して丸く納める。	○内外面は97と同じ。 ○口縁端部のみ強いヨコナデ。	○精良、微量に長石が認められる。 ○明黄褐色5YR%。 ○焼成・良好。
甕 器	杯 B	99	○11.5 ○3.4	○丸底から内円弧味に開き、口縁部で外反し、そのまま端部につづき、丸く納める。	○内外面は97と同じ。	○やや粗い、長石が多く見に認められる。 ○橙色5YR%。 ○焼成・良好。
	杯 B	100	○9.8 ○3.7(現)	○底部欠損。 ○内凹して聞く体部がそのまま口縁部につづき、墨黒圓味に立ち上がる。 ○口縁端部は外反して丸く納める。	○内外面は97と同じ。	○精良。 ○淡黄褐色7.5YR%。 ○焼成・良好。
甕 器	杯 B	101	○17.5 ○4.3(復)	○内凹して聞く体部がそのまま口縁部につづく。 ○口縁端部は外反して丸く納める。	○芋尻のため調整法不明。	○精良。 ○淡黄褐色5YR%。 ○焼成・良好。
	杯 B	102	○9.0 ○3.1	○口縁部欠損。 ○丸底から体部は内凹して聞く。	○器表面の摩耗がほなほだしく調整法不明。 ○底部にユビオサニが残る。	○精良。 ○橙色5YR%。 ○焼成・良好。

基種	基形	番号	法量(cm)	形態の特徴	枝法の特徴	備考
土	高 杯 B	103	○17.3 ○8.2(現)	○杯部のみ残存。 ○杯部はやや渦みをもつ。 ○平らな杯部の内側に粘土を つぎたて外上方に開くため 外面に合掌形の段がつく。杯 口縁部は短く外反し、鋸い。	○口縁部内外面はヨコナデ調整。 ○体部外表面はユビオサエのちぢい ナナ調整。内面は下放射状の暗文 がつく。 ○杯底部は極方向(上→下)のヘラ ミガキ調整。 ○脚部状態内面にシボリメの痕跡を 残す。	○精良、微細粒を含む。 ○橙色 5 Y R %。 ○焼成・ふつう。
	高 杯 B	104	○16.0(復) ○5.5(現)	○杯部のみ残存。 ○杯部は浅い。以下103と同じ。	○脚部の割裂法は103と同じ。	○精良。 ○赤褐色 5 Y R %。 ○焼成・良好。
	高 杯 B	105	○18.2(復) ○4.0(現)	○104と同じ。	○杯部の調整法は103と同じ。	○精良、長石が微量に混 入される。 ○橙色 5 Y R %。 ○焼成・良好。
磚	高 杯 A	106	○16.6 ○5.7(現)	○杯部のみ残存。 ○杯部は深く、平底よりゆるや かに開き、体部下で屈曲して、口縁部まで外反してつづ く。 ○口縁部と体部との接縫には浅 い段がつく。 ○口縁端部は短く丸る。	○内外面ともヨコナデ。	○精良。 ○浅黄褐色 7.5 Y R %。 ○焼成・良好。
	蓋	107	○不明 ○11.0(現)	○口縁部は欠損。 ○底部は平底で体部は丸くふくらむ。 ○体部上位から中央にかけて浅 い凹溝を3条めぐらし、その 間に横引き波状文をめぐらす。	○体部内面はナナ調整。他は摩耗の ため不明。	○精良。長石微量に含む。 ○淡褐色 5 Y R %。 ○焼成・良好。
器	蓋 B1	108	○16.7 ○7.7	○口縁部はよくゆるやかに外反 する。端部は内方にわざに 粘土がふくれる。 ○口径より、脚部径が大きい。	○口縁端部は内外面ともヨコナデ調 整。 ○体部外表面にハケメ調整。内面にユ ビオサエ底がわずかに認められる が、摩耗のため詳細は不明。	○精良。1~3mmの砂粒、 多くの空洞を含む。 ○赤褐色 5 Y R %。 ○焼成・良好。
	羽 蓋	109	○22.4 ○6.2(現)	○口縁部=脚部のみ残存。 ○脚部はゆるやかに外反し、 端部はわずかに面をなす。 ○脚部は外上方につき、端部は 丸く納める。	○口縁端部は内外面ともヨコナデ。 ○脚部はナナ。 ○体部内面はユビオサエのちナナ。	○精良。1~2mmの砂粒、 角閃石、くさり輝、落 葉を多く含む。 ○赤褐色+茶褐色 10 R %。 ○焼成・良好。

SK 25(第41図、図版四十二・四十三・四十四)

基種	基形	番号	法量(cm)	形態の特徴	枝法の特徴	備考
窓	杯 A3-a	110	○不明 ○不明	○立ち上がりは1.1cmを測り、通 「ノ」の字状に窓に内傾する。 先端は既く光っている。 ○受部は外上方に伸び、先端は 丸く納める。		○精良、長石微量に含む。 ○明青灰 10 B G %。 ○焼成・良好。
	高 杯	111	○15.2 ○10.0 ○9.8	○杯部は高く大きい。体部と口 縁部との境に1束の筋がめぐ り、縫は丸味をもつ。口縁部 は丸く納める。 ○脚部は低い。筒部はゆるやかに 外方へ開き、脚部で大きく 広がって、脚端部につづく。 脚部は丸く納めている。	○口縁部内外面はティネイヨコナ デ。体部=筒部内面には不定方向 のナナを行なう。 ○脚部=筒部外表面は手持ちによる 時計回りのヘラケツリのち、部分的に脚部から体部に向かってナ ナが認められる。 ○脚筒部=筒部外表面、筒部=筒部内 面ともにティネイヨコナデ。筒 部内面にシボリメを行なう。	○精良、長石が微かに混 入される。 ○吉浜色 5 B %。 ○焼成・良好。

基種	基形	番号	法 線(cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
頸 患	臺	112	○8.9 ○9.8	○頸部は大く、短く外反して開き、口輪部で急に屈曲して直線的にラッパ状に開くため、境界が無い後となり1条の開縫がある。口輪部は丸味をもつ。 ○体部は丸くふくらんで肩の張りは少ない。 ○穿孔直前の趙の未製品か。	○口輪部内外面、体部内面ともティトイなヨコナナ調整。 ○体部上部はヨコナナ調整。体部下半～底部は、手待ちによる逆時計回りのヘラケズリのうち、さらには下から上にヘラケズリを行ない仕上げとする。	○非常に精良、微妙な長石が認められる。 ○灰色N%。 ○焼成・良好。
			○7.5 ○6.1(現)	○口輪部のみ残存。 ○口輪部は外反して開くが、輪部で内凹して輪底をなす。	○口輪部内面は密なヨコナナ調整。	○精良、長石を含む砂粒。 ○灰色N%。 ○焼成・良好。
器	提 扱	113	○14.5 ○3.9(現)	○口輪部のみ残存。 ○内弯して開く体部から、そのまま口輪部迄までづく。 ○口輪端部は丸く納める。	○内外面ともヨコナナ。	○精良、長石を含む砂粒。 ○灰色N%。 ○焼成・良好。
			○14.5 ○3.9(現)	○口輪部～体部のみ残存。 ○内弯して開く体部から、そのまま口輪部迄までづく。 ○口輪端部は丸く納める。	○内外面ともヨコナナ。	○精良、微妙粒、青母を含む。 ○褐色5 YR%。 ○焼成・ふつう。
上	杯 B	114	○13.5 ○11.7 ○8.7	○杯部は丸から大きく開き、体部下位にさりげなく外方へ外傾して開いて、口輪部につづく。口輪端部は丸く納める。 ○柱状部はゆるやかに下方へ広がり、脚端尾下でラッパ状に広がり、脚端はヘラで切断するため、断面内角になり接がつく。	○摩耗のため調整法不明。ただ脚部柱状部内面にシボリメを残す。	○粗い、細かい砂粒を多量、青母を含む。 ○浅黄褐色(7.5Y R%)。 ○焼成・ふつう。摩耗著しい、底部木端の一部黒色呈す。
			○115	○杯部は丸底からよく内弯して開き、そのまま口輪部につづく。口輪端部は丸く納める。 ○柱状部はゆるやかに下方へ広がるが、脚端尾下でラッパ状に広がり、脚端はヘラで切断するため、断面内角になり接がつく。	○杯部、口輪部内外面ともヨコナナ。体部外側に部分的にハケメ調整法が残るが、その他は摩耗激しく不明。	○精良、長石を0.1～3mmの砂粒で含む。 ○褐色3 YR%。 ○焼成・ふつう。杯部外側にごく少量化付する。
脚	高 杯 A	116	○12.9(現) ○9.5(現)	○杯部は丸底からよく内弯して開き、そのまま口輪部につづく。口輪端部は丸く納める。 ○柱状部はゆるやかに下方へ広がる。	○杯部、口輪部内外面ともヨコナナ。体部外側に部分的にハケメ調整法が残るが、その他は摩耗激しく不明。	○精良、長石を0.1～3mmの砂粒で含む。 ○褐色3 YR%。 ○焼成・ふつう。杯部外側にごく少量化付する。
			○117	○14.7(復) ○13.1 ○11.1	○九底から内弯して開き、口輪部ではほぼ直立に立ち上がる。口輪端部は丸く納める。 ○柱状部はゆるやかに下方へ広がるが、脚端尾下で直線的に広がるため内側に接がつく。脚端は丸く納める。	○摩耗激しく調整法不明。
器	高 杯 B	118	○不明 ○6.4 ○10.2	○脚部のみ残存。 ○柱状部はゆるやかに下方へ広がり、観舞高尾下で急にラッパ状に広がり、脚端はヘラで切断するため、断面内角になり接がつく。	○柱状部の内面にシボリメがつく。	○やや精良、0.1～3mmの砂粒で含む長石、多量の青母を含む。 ○褐色5 Y R%。 ○焼成・ふつう。黒化部分有り。(黒斑か)
			○119	○12.0 ○6.9	○九底から屈曲し、体部はほぼまっすぐに立ち上がる。 ○口輪部は外反し、輪部は丸く納める。	○口輪部内外面とも横方向のハケメ調整(11条/cm)。 ○体部外側は横方向のハケメのうち、縱方向のハケメ調整。
器	意	120	○9.7 ○13.0	○丸底で体部中央や上段で張りをもつ。 ○ゆるやかに外傾し、端部で無く外反する口輪部。端部は丸く納める。	○外側は摩耗のため調整法不明。 ○体部内面は上半にユビオサエを残し、下半は時計回りにヘラケズリを施す。	○やや精良、細かい砂粒で含む長石、滑石を含む。 ○浅黄褐色(7.5Y R%)。 ○褐色5 Y R%。 ○焼成・ふつう。器外側及び口輪部内面に黑色の有機物(多量に青母を含む)、内面体部から底部の広範囲に黒斑有り。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	壺	121	Ø8.2 Ø7.9	○平底灰陶の底部から体部は内凹して開き、口縁部につづく。 ○口縁部はやや外反弧形に立ち上がる。端面は手づくねのため不整端面。	○内外面とも粗いナデ。 ○口縁部内外面ともヨコナデ。	○長石、石英、凹雲母等を砂粒で含む。 ○灰オリーブ色5YR%。 ○焼成・不良。
			Ø15.0(現) Ø10.9(現)	○口径よりも胴部径が大きい。 ○口縁部は短く外反し、腹部は丸く納める。	○体部外面は板状工具によるナデ調整。 ○体部内面はユビオサエのち、斜方向→橈方向(上→下)の順でへラケズりする。	○やや稍具、1.5mm以下の砂粒で含む長石、多量の空洞を含む。 ○明赤褐色5YR%。 ○焼成・ふつう。外側が全体に黒っぽく変色。
	甕	122	Ø15.3 Ø29.9	○ゆるやかに外反する口縁部。 腹部は外方につまり出してナデタルため丸く納める。 ○底膨張の体部。最大径は体部ほぼ中央にある。	○口縁部内外面ともテイネイナナデ。 ○腹部内面には粗い橈方向のハケメ調整。 ○体部外面は土器の接合面を平滑にするために板状工具によるゆるいナデ調整。内面は下から上へハケズりする。また、成形時の当て板模がみられる。	○粗な火照土。長い石、石英、角閃石、くさり岩、全雲母を含む。 ○明赤褐色5YR%。 ○焼成・良好。体部外面に出現。
			Ø19.4 Ø31.9	○「く」の字形に外反する口縁部。 口縁端部は面をなす。 ○球形の体部径より腹部径が大きく、最大径は体部ほぼ中央にある。	○口縁部内外面ともテイネイナナデ。 ○体部上位より下位まで1段化2.8cmの範囲のタクシキが7単位づけられる。底部は斜張子目とのタクシキが施されている。内面はナデ調整。	○軽員、長石、角閃石を含む。 ○明赤褐色5YR%。 ○焼成・良好。
	羽竿	124	Ø20.9 Ø7.1(現)	○口縁部～窓部のみ残存。 ○やや内傾する体部に大きく外反する口縁部がつく。口縁端部は丸く納める。 ○窓部は水平につき、端部は丸く納める。	○内外面ともヨコナデ。	○やや粗い、0.1～0.5mmの長石、角閃石の砂粒、雲母を多量に含む。 ○はいはい微色7.5YR%。 ○焼成・ふつう。体部の一部除き、大部分黑色化。(使用時に付着した煤と思われる。)

第4層(第42図、図版三十五・四十八・四十九)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
埴輪	壺	126	Ø11.6(現) Ø4.0(推)	○天井部と口縁部とを分ける回線は認められない。 ○口縁部は無筋から内傾して下降し、端部は鋭角的であるが丸く納める。	○口縁部～天井部の内外面ともヨコナデ。天井部へラケズリは認められない。	○精良、微砂粒を含む。 ○内面、灰白色N%。 ○焼成・ふつう。外側は緑色及び瓦色の自然釉付着。一部剥離により生地色が出ている。
			Ø11.3(現) Ø3.0	○天井部と口縁部とを分ける回線や縫は認められない。 ○口縁部は丸くなっている。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部～天井部外面は時計回りのへラケズリ。天井部点は未調査。 ○体部～天井部内面はヨコナデ。	○精良、0.3～2mmの砂粒を含む。 ○内面、暗灰色N%。 ○焼成・ふつう。外側は自然釉付着。後に剥離したか、焼成時の変色かで一部灰化。
	甕	127	Ø12.4(現) Ø3.3(現)	○底部欠損。 ○立ち上がりは短く(1cm)内傾し、先端はやや鋭い。 ○受部は上方に短く伸び、先端は丸くなっている。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。 ○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、少量の0.5～2mmの砂粒を含む。 ○青灰色B%。 ○焼成・良好。
			Ø12.8(現) Ø3.5(現)	○128と同じ。	○128と同じ。 ○体部内面にユビオサエ(成形時)が残る。	○精良、0.1～2mmの砂粒を多量に含む。 ○内面、青灰色B%。 ○焼成・良好。外側全体に自然釉付着。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
類	杯 Aa-a	130	○12.6(復) ○3.1(復)	○128と同じ。	○128と同じ。	○精良。1~2mmの砂粒を含む。 ○内面・外面・底面は5PB%。 ○焼成・良好。
	杯 Aa-a	131	○12.1(復) ○3.5(復)	○128と同じ。	○128と同じ。	○精良。1~2mmの砂粒を含む。 ○灰白色N%。 ○焼成・良好。外面に自然剥がれ部有。
	杯 Aa-a	132	○10.3(復) ○3.6(復)	○128と同じ。	○128と同じ。	○精良。0.5~1mmの砂粒を含む。 ○吉灰色5B%。 ○焼成・良好。
	杯 Aa-a	133	○10.4 ○3.4	○立ち上がりは頗く(0.3cm)内傾し、先端は鋭い。 ○受部は水平から上方気味に伸び、先端は丸く納める。	○口縁部内外面、底部内面はヨコナギ。 ○底部内面に仕上げナガがあり。 ○底部外表面はヘタ切りの後、未調整。	○精良。長石を妙技で含む。 ○明青灰色5B%。 ○焼成・良好。
器	杯 Aa-a	134	○10.5(復) ○2.5(復)	○小形化を示し、立ち上がりは強く内傾し、先端は鋭い。 ○受部は外方に大きく伸び、高さは立ち上がりとほぼ同高である。	○口縁部内外面、底部内面はヨコナギ。 ○底部外表面は未調整。	○精良。少量の砂粒を含む。 ○青灰黑色5B%。 ○焼成・良好。
	杯 Aa-a	135	○11.0(復) ○2.7(復)	○134と同じ。	○134と同じ。	○精良。 ○緑色10G Y%。 ○焼成・良好。
器	壺 壹	136	○6.2(復) ○6.9(復)	○口縁部欠損。 ○平底から大きく開いて立ち、観底後強く内寄する。	○体部外表面～内面はヨコナギ。 ○体部外表面下部に手持ちによるヘラケズリを残す。 ○底部はヘラケズリ後未調整。	○精良。少量の微砂粒。 1~3mmの砂粒を含む。 ○にぶい黄褐色10Y R%。 ○焼成・良好。生焼きではなく。(一見、土師器色を呈す。)
	瓶	137	○11.0(復) ○9.5(復) ○8.5	○底部中央が孔穴の欠損。口縁部は欠く。 ○体部は外方に開く。体部中央に2条の後の凹痕をめぐらす。	○体部内外面ともヨコナギ。 ○底部周囲、外面とも不対称方向のヘラケズリ。	○精良。2~3mmの砂粒を含む。 ○青灰黑色5B%。 ○焼成・良好。自然釉のため外面斑駁。
土	杯 Aa	138	○17.5(復) ○4.5(復)	○底部欠損。 ○内寄して立ち上がる体部がそのまま口縁部につづく。 ○口縁端部ははざかに内傾し、強く巻き込む。	○口縁部内外面ともヨコナギ調整。 ○体部外表面は基化のため調整注不明。 ○体部内面はヨコナギのち放射状の暗文。	○やや精良。微妙技を含む。 ○棕色5Y R%。 ○焼成・ふつう。
	杯 Ai	139	○17.1(復) ○5.3(復)	○底部欠損。 ○内寄して立ち上がる体部がそのまま口縁部につづく。 ○口縁端部ははざかに内傾し、強く巻き込む。	○口縁部外表面と内面端をヨコナギ調整。 ○体部外表面はヘラケズリ、ヨコナギのちミガキ調整。下半分はヘラケズリ(時計回り)。 ○体部内面は放射状の暗文。	○精良。0.5mm以下の微砂粒を含む。 ○棕色2.5Y R%。 (摩減部断面・淡黄褐色10Y R%) ○焼成・ふつう。
器	杯 Aa	140	○10.6(復) ○3.3(復)	○底部欠損。 ○体部は内寄して立ち上がり、そのまま口縁部につづく。 ○口縁端部ははざかに外反し、丸く納める。	○口縁部外表面は1.7cm毎に強くユビオサエしたあと、チイキイナヨコナギ調整。内面はヨコナギ調整。 ○体部外表面はヘラケズリ(時計回り)の後、ミガキ。内面はヨコナギの後、放射状の暗文。	○精良。0.1~2.5mmの砂粒を含む。墨色を含む。 ○棕色5Y R%。 ○焼成・ふつう。
	杯 Aa	141	○11.4(復) ○3.1	○中央部が上部底になる底部から内寄しながら口縁部につづく。 ○口縁端部は内傾し、軽く巻き込む。	○口縁部内外面ともヨコナギ調整。 ○体部～底部外表面はユビオサエが残る。 ○体部内面は放射状の暗文。	○精良。 ○棕色3Y R%。 ○焼成・良好。焼付材。

基種	器形	番号	法身(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土	杯 B	142	○14.7(現) ○4.4	○平底から内面しながら斜く体部がそのまま口縁部までつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナヂ。 ○体部内外面とも磨耗は軽く調整法不詳。	○精良。 ○褐色5YR%。 ○焼成・良好。輝付有。
	杯 B	143	○13.3(現) ○2.6	○平底から外方へ大きく開いて立ち上がり、口縁部で内折する。 ○口縁端部は内側に、丸く納める。	○口縁部・体部内外面ともヨコナヂ、調整。 ○体部下部-底部外面はユビオサエを残す。	○比較的精良。長石を0.1-2mmの砂粒で含む。 ○に赤い褐色(5YR%) ○7.5×褐色(5YR%10.3)。
	甕 A1	144	○21.3(現) ○4.0(現)	○口頭部のみ残存。 ○やや前の張る体部に斜く外反する口頭部がつく。 ○口縁端部は圓をなす。	○口縁部外面及び内面端はヨコナヂ。 内面は斜方向から横方向のハケメ調整。 ○底部外面にはヘラ原体のアタリがつく。 ○体部上部はヨコナヂ。 ○頭部内面はハケメ調整ののちナヂしている。	○比較的精良。0.1-1.5mmの砂石で含む長石、多量の青母を含む。 ○に赤い褐色2.5YR%。 ○焼成・ふつう。
	甕 A1	145	○14.2(現) ○3.7(現)	○口縁部-体部上半部のみ残存。 ○体部上位で屈曲し内面しながら短く外反する口縁部につづく。 ○口縁端部は圓をなす。	○口縁部外面及び内面端はヨコナヂ調整。 内面は斜方向のハケメ調整ののちナヂ。 ○体部外面はヨコナヂ調整。内面はユビオサエのあとヨコナヂ。	○やや粗い、0.1-3.5mmの砂粒で含む長石、多量の青母を含む。 ○内面・に赤い褐色 ○5YR%。 ○口縁部・黒色 ○7.5YR% ○焼成・ふつう。
	甕 A1	146	○15.7(現) ○4.7(現)	○口縁部-体部上半部のみ残存。 ○体部は強く膨らむ。 ○口縁部は強く強く外反し、端部はわずかに圓をなす。	○口縁部外面及び内面端はティネイなヨコナヂ調整。内面は横方向のハケメ調整。 ○体部外面はヘラカズリ(泥時計切り)のち、ヨコナヂ調整。内面は斜方向の粗いナヂ。	○比較的精良。0.1-3.5mmの砂粒で含む長石、多量の青母を含む。 ○褐色5YR%。 ○焼成・ふつう。
	甕 A2	147	○19.8(現) ○5.8	○底部及び体部大きさを欠損。 ○前の面らない体部にゆるく外反する口縁部がつく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部外面はヨコナヂ。内面は横方向のハケメ調整。 ○底部外面にはヘラ原体の下から上へのあたりがつく。 ○体部上半部にはハケメ調整。 ○頭部内面はヨコナヂ調整。	○精良。0.1-1.5mmの砂粒で含む長石、多量の青母を含む。 ○に赤い褐色7.5YR%。 ○焼成・ふつう。
	甕 B2	148	○15.1(現) ○5.2(現)	○口頭部のみ残存。 ○前の面らない体部にゆるく外反する口縁部がつく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部-体部内外面ともヨコナヂ調整。 ○頭部内外面にユビオサエが残る。	○やや粗い、0.1-2mmの長石、石英、角閃石を砂粒で含む。青母を含む。 ○に赤い褐色(7.5YR%) ○5.5×褐色(7.5YR%) ○5.5 ○焼成・ふつう。
	羽釜	149	○25.2(現) ○7.9(現)	○口縁部-脚部のみ残存。 ○直底的に立ち上がる体部にゆるやかに外反する口縁部がつく。 ○口縁端部は丸く納める。 ○脚部は短く水平につき、端部は丸く納める。	○口縁部外面上部はヨコナヂ。下部分はヘラ工具によるあたりがつく。 内面は横方向のハケメ調整。 ○体部内面は粗いナヂ。 ○脚部はヨコナヂ調整。	○やや粗い、2.5mm以下の長石、石英、角閃石を砂粒で含む。少量の青母を含む。 ○に赤い褐色(7.5YR%) ○5.5×褐色(7.5YR%) ○5.5 ○焼成・ふつう。
	羽釜	150	○20.1(現) ○3.5(現)	○脚部のみ残存。 ○脚部はやや長く水平につき、端部は丸く納める。	○体部-脚部外面をヨコナヂ。 ○体部内面は板状工具の当て板がつく。 ○横方向のナヂ。	○精良。石英、角閃石、青母を含む。 ○に1-4mm大の板子を含む。 ○褐色5YR%。 ○焼成・良好。
	甑	151	○25.2(現) ○13.7(現)	○口縁部-体部上半部のみ残存。 ○体部は外傾し、そのまま口縁端部までつづく。 ○口縁端部は圓をなす。	○口縁部外面はヨコナヂ。内面はハケメ調整ののちヨコナヂ。 ○体部外面はユビオサエのあとハケメ調整。内面はユビオサエを残す。	○精良。微砂粒、青母を含む。 ○褐色5YR%。 ○焼成・ふつう。

第5層(第43・44図、図版四十五・四十六・四十七・四十八・四十九)

器種	器形	番号	法寸(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
頭	蓋 Ai-a	152	○14.4(復) ○4.6(現)	○天井部と口縁部とを分ける縫は幅くさい。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.6cmを測り、縫面は内側に傾斜して段を構成する。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。 ○口縁部外面先端に浅い刻み目を入れている(約3mm間隔)。	○精良。微砂粒を含む。 ○青灰色5BG%。 ○焼成、良好。
	蓋 Ai-a	153	○12.3(復) ○4.3(現)	○天井部と口縁部とを分ける縫は幅くさい。 ○口縁部先端から縫までの高さは3.3cmを測り、縫部はやや外方に開き、縫部は低い。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良。1mm大的長石を含む。 ○青灰色5PB%。 ○焼成、良好。内面に色むら有り。
	蓋 Ai-a	154	○12.9(復) ○4.0(現)	○天井部は扁平なつくりと思われる。 ○天井部と口縁部とを分ける縫は幅くさい。縫はつまり出している。 ○口縁部先端から縫までの高さは3.3cmを測り、口縁部はわずかに外方に開き、縫部は低い。	○天井部は口縁部との接付近以外は全て、時計回りのヘラケズリのあと、ティネイにヨコナナ調整されている。	○精良。微砂粒を含む。 ○灰白色N%。 ○焼成、良好。
	蓋 Ai-a	155	○13.8(復) ○4.4(現)	○天井部は扁平なつくりで、口縁部との境部となる接付近以外を全てカクタリ(逆時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける縫は幅くさい。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.1cmを測り、縫部は外方に開き、内側に段を構成する。	○口縁部先端は無いヨコナナ調整を行っている。	○精良。微砂粒。2~3mmの長石を含む。 ○青灰色5B%。 ○焼成、良好。
	蓋 Ai-a	156	○12.2(復) ○4.5(現)	○天井部と口縁部との縫は152と同じ。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.0cmを測り、口縁部は外方に開き、内側に段を構成する。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良。 ○青灰色5B%。 ○焼成、良好。
	蓋 Ai-a	157	○17.1(復) ○5.4(現)	○天井部と口縁部とを分ける縫は幅くさいが、わずかに丸味を帯びる。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.5cmを測り、口縁部はわずかに外方に開き、縫部は低い。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良。微砂粒。 ○内面、明吉灰褐色5PB%。 ○外面、灰白色N%。 一端外面、オリーブ灰褐色5GY%。 ○焼成、良好。一部に色むら有り。
器	蓋 Ai-a'	158	○不明 ○4.7	○天井部は扁平なつくりで縫をヘラケズリ(時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける縫は幅く、やや丸味を帯びる。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.1cmを測り、縫面は内側に傾斜して段を構成する。		○精良。長石微量を含む。 ○灰白色N%。 ○焼成、良好。
	蓋 Ai-a'	159	○14.8(復) ○5.1(現)	○天井部はやや丸味をもち、縫をヘラケズリ(逆時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける縫は幅く、やや丸味を帯び、縫の端は小さい。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.3cmを測り、縫面は内側に傾斜して段を構成する。		○精良。1~2mmの長石を含む。 ○内面、青灰色5B%。 ○焼成、良好。外面の釉が斑点状に灰化。
	蓋 Ai-b	160	○14.4(復) ○4.7(現)	○天井部と口縁部とを分ける縫は幅広く(4mm)、幅くさい。 ○口縁部先端から縫までの高さは2.3cmを測り、口縁部は外方に開き、内側にわずかに段を構成する。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良。多量の砂粒を含むG%。 ○内面、灰白色N%。 ○外面、灰白色10G%。 ○焼成、良好。

品種	基準	番号	法数(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
類	茎 A ₁ -b	161	○15.6(復) ○3.6(推)	○天井部と口縁部とを分ける接は幅狭く(2mm)、鋭く、丸い。 ○口縁部先端から接までの高さは2.5cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良、長石、砂粒を含む。 ○灰白色N%。 ○焼成・良好。
		162	○12.6(復) ○4.2(現)	○天井部と口縁部とを分ける接は鈍く、丸い。 ○口縁部先端から接までの高さ2.2cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、少量の微砂粒。 1~2mmの長石を含む。 ○青灰色5B%。 ○焼成・良好。
	茎 A ₁ -b	163	○14.0(復) ○3.7(現)	○口縁部のみ残存。 ○天井部と口縁部とを分ける接はほとんど退化し、丸くなっている。 ○口縁部先端から接までの高さは2.3cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。		○粗略、砂粒、1~3mmの長石を多量に含む。 ○内面・青灰色5BG%。 外側・暗青灰色5BG%。 ○焼成・良好。
		164	○16.9(復) ○5.2(推)	○天井部と口縁部とを分ける接は幅狭く(2mm)、やや深い(1mm)。 ○口縁部先端から接までの高さは2.2cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、多量の砂粒を含む。 ○明青灰色5PB%。 ○焼成・ふつう。
	茎 A ₂ -b	165	○14.7(復) ○4.5(推)	○天井部と口縁部とは浅い凹窓によって分かれれる。 ○口縁部先端から接までの高さは11.9cmを測り、口縁部はやや外方へ開き、先端は丸く納める。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良、砂粒、3mmの大長石を含む。 ○明青灰色5PB%。 ○焼成・良好。
		166	○14.6(復) ○5.3(推)	○天井部と口縁部とは体部ユビナデによる1条の接線によつて分かれれる。(ユビナデによる接線は圓錐の退化したものと考えられる)。 ○口縁部先端から接までの高さは2.2cmを測り、端面は内側に傾斜するが、先端は丸味を帯びる。	○天井部のヘラケズリは逆時計回りである。	○やや不良、長石を含む砂粒を含む。 ○灰白色N%。 ○焼成・良好。
	茎 B	167	○12.1(復) ○3.7(現)	○天井部と口縁部とを分ける接や凹窓は認められない。 ○口縁部は外方へ開いて下降し先端は丸く納める。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、少量の砂粒を含む。 ○内面・暗青灰色5BG%。 外側・精良灰5BG%。 ○焼成・良好。一部摩耗し、地色が出ている。
		168	○15.4(復) ○4.4(推)	○天井部と口縁部とを分ける接や凹窓は認められない。 ○口縁部は外方へ開いて下降し先端は丸く納める。 ○器厚が他に比して厚い(7mm)。	○天井部のヘラケズリは逆時計回りである。	○精良。 ○灰白色2.5Y%。 ○焼成・良好。
	茎 B	169	○14.8(復) ○3.0(現)	○天井部と口縁部とを分ける接や凹窓は認められない。 ○口縁部はやや外方へ開き丸味に下降し、端面は丸く納める。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、砂粒、1~3mmの長石を含む。 ○青灰色5B%。 ○焼成・良好。
		170	○10.8(復) ○2.7	○天井部は水平で、器をヘラケズリ(逆時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける接や凹窓は認められない。 ○口縁部は外方へ開いて下降し先端は丸く納める。	○ヘラ切りが粗雑であったために、天井頂部にコブ状のあとが付着したままになっている。 ○全体につくは粗雑。	○精良、微砂粒、1~3mmの長石を含む。 ○オリーブ灰5GY%。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	枝法の特徴	備考
杯 A2-a	杯	171	○14.9(復) ○5.5(模)	○立ち上がりは1.5cmを測り、やや内傾する。表面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は鋭い。 ○底部は丸味をもち、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の1/3である。	○底部内面に仕上げナメが見られる。	○精良、微砂粒、1mm大の長石を含む。 ○底色N%。 ○焼成・良好。
			○13.2(復) ○4.0(模)	○立ち上がりは1.5cmを測り、内傾する。表面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は外上方に伸び、先端は鋭い。		○精良、1~3mmの長石を少量含む。 ○底色N%。 (一部暗灰色N%) ○焼成・良好。一部黒斑。
須 A2-a	杯	173	○13.6 ○5.1	○立ち上がりは1.6cmを測り、垂直気味に内傾する。表面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平に短く伸び、先端は鋭い。 ○底部は丸味をもち、先をヘラケズリ(逆時計回り)する。	○底部のヘラケズリは密に行われている。	○精良、長石を中量含む。 ○底色N%。 ○焼成・良好。
			○不明 ○不明	○立ち上がりは1.5cmを測り、ゆるやかに内傾する。先端は鋭い。 ○受部は水平に短く伸び、先端はやや丸味を帯びる。	○底部のヘラケズリは逆時計回りで、密に行われている。	○精良、微砂粒を含む。 ○明青灰色S P B%。 ○焼成・良好。
忠 A2-a	杯	175	○不明 ○不明	○立ち上がりは1.5cmを測り、強く内傾する。先端は鋭い。 ○受部は水平に短く伸び、先端は鋭い。	○自然種付着のため、底部のヘラケズリの方向は不明。	○精良、多量の砂粒を含む。 ○明青灰色S B%。 ○焼成・良好。焼成時に砂粒が黒斑。外面部に軽かに着しい。
			○15.7(復) ○5.0(模)	○立ち上がりは1.7cmを測り、内傾する。表面は内側に傾斜して、わずかに段を構成する。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。	○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、2~3mmの長石を含む。 ○底色N%。 ○焼成・良好。
忠 A2-b	杯	176	○14.3(復) ○4.5(模)	○立ち上がりは1.5cmを測り、垂直気味に立つ。先端は丸味を帯びる。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。		○精良、砂粒、1~3mmの長石、少量の角閃石を含む。 ○底色N%。 (一部外表面暗灰色N%) ○焼成・ふつう。焼きむら有り。(特に外表面は一部黒斑。)
			○14.3(復) ○4.2(模)	○立ち上がりは1.6cmを測り、ほぼ垂直に立つ。表面は内側に傾斜して、わざかに段を構成するが、先端は丸い。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸く納める。	○底部外表面に自然種の付着が著しくヘラケズリ(底部の1/3になされている)の方向は不明。	○精良、1~5mmの長石を多く含む。 ○底色N%。 ○焼成・ふつう。外表面に自然種付着く付着。
忠 A2-b	杯	178	○12.3 ○4.2(模)	○立ち上がりは1.5cmを測り、ゆるやかに内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸く納める。	○底部のヘラケズリは逆時計回りで、密に行われている。	○精良、多量の砂粒、1~5mm大の長石を含む。 ○底色N%。 ○焼成・やや不良。
			○不明 ○不明	○立ち上がりは1.5cmを測り、ゆるやかに内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸味を帯びる。	○底部のヘラケズリは逆時計回りで、密に行われている。	○精良、1~3mmの砂粒を含む。 ○底色N%。 ○焼成・良好。外面部は自然種付着のため、変色が大きい。
忠 A2-b	杯	179	○12.3 ○4.6(模)	○立ち上がりは1.4cmを測り、強く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は水平に短く伸び、先端は鋭い。	○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、1~3mmの砂粒を含む。 ○底色N%。 ○焼成・良好。外面部は自然種付着のため、変色が大きい。
			○12.3 ○4.6(模)			

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
箱	杯 A ₃ -b	181	○13.2 ○4.1(現)	○立ち上がりは1.2cmを測り、逆「ノ」の字状に内側に立つ。先端は底面に立つ。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に強く伸び、先端は丸く納める。	○底部のヘラケズリ(逆時計回り)は粗雑。	○精良、少量の微妙粒を含む。 ○吉灰色10B G%。 ○焼成・良好。
	杯 A ₃ -b	182	○12.9(復) ○3.7	○立ち上がりは1.1cmを測り、垂直に立つ。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平で、刃をヘラケズリ(逆時計回り)する。	○底部のヘラケズリは密に行われている。	○精良、微妙粒、1mm大の長石を含む。 ○吉灰色10B G%。 ○焼成・良好。
	杯 A ₃ -b	183	○13.0(復) ○3.5(想)	○立ち上がりは1.1cmを測り、短く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は水平に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平で、刃をヘラケズリ(逆時計回り)する。		○精良、微妙粒、2mm大の長石を含む。 ○吉灰色5P B%。 ○焼成・良好。
	杯 A ₄ -a	184	○12.6 ○4.2	○立ち上がりは0.8cmを測り、逆「ノ」の字状に内側にする。先端は鋭い。 ○受部は大きく外上方に伸び、先端は丸く納める。	○底部内面に粘土層のマキアゲ痕が残っている。	○精良、長石を微量含む。 ○吉灰色10G Y%。 ○焼成・良好。
	杯 A ₄ -a	185	○12.6 ○3.6(現)	○立ち上がりは0.8cmを測り、逆「ノ」の字状に強く内傾する。先端は鋭い。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○焼成時に体部がうすくはがれて瘤状になった跡が残っている。	○底部のヘラケズリは逆時計回りで粗雑。	○精良、少量の微妙粒を含む。 ○吉灰色5B%。 ○焼成・良好。外部一面に自然釉付着。塊成17個のうちの主器と接合し、その跡が余分な帶状のこぶとなり付着。(不良品)
	杯 A ₄ -a	186	○12.2 ○3.1(想)	○立ち上がりは0.7cmを測り、逆「ノ」の字状に強く内傾するが、先端は近く外反して鋭い。 ○受部は水平に伸び、先端は鋭い。	○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、少量の鉱物粒を含む。 ○灰灰色N%。 ○焼成・良好。外面に自然釉付着。
	杯 A ₄ -a	187	○11.0 ○3.7(復)	○立ち上がりは0.6cmを測り、逆「ノ」の字状に強く内傾する。先端は鋭い。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は丸味をもち、刃をヘラケズリ(逆時計回り)する。	○底部のヘラケズリは粗雑。	○精良、長石を含む。 ○吉灰色10G Y%。 ○焼成・良好。
	杯 A ₄ -b	188	○10.4 ○3.8	○立ち上がりは0.6cmを測り、逆「ノ」の字状に内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に強く伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平である。	○底部の辺に時計回りのヘラケズリが行われているが、手法は粗雑。 ○底部中央はヘラ切り後、未調整。	○精良、長石、石英を砂粒で含む。 ○吉灰色5P B%。 ○焼成・良好。
	杯	189	○不明 ○不明	○受部・底部のみ残存。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平なつくりで、刃をヘラケズリ(逆時計回り)する。		○精良、長石微量に含む。 ○吉灰色5B%。 ○焼成・良好。
	高 杯	190	○11.7(復) ○4.3(現)	○体部のみ残存。 ○体部は丸く、体部と口縁部、底部の境に各1本の断面三角形の凸起がある。口縁部は外反し、端部は鋭い。 ○底部の透穴は三方にあくららしい。	○杯部内外面ともティイ奈ナヨコナチ調整。	○精良、1~2mmの長石を含む。 ○吉灰色3B%。 -内部面-灰灰色10Y%。 -外部面-紫灰色 3P%。 ○焼成・良好。内外面とも、焼きむらにより一部変色。

器種	器形	番号	法量(cc)	形態の特徴	技術法の特徴	備考
高 杯	高 杯	191	○不明 ○4.5(現)	○脚部のみ残存。 ○脚部は短く、脚部で外方に大きく開く。脚端部は断面四角形を呈す。 ○透しては四角形で三方にあけられている。	○脚部内面に粗い仕上げナナゲが認められる。 ○脚部外側ともヨコナナゲ。	○精良。長石微量に含む。 ○青灰5B%。 ○焼成・良好。
箱 蓋	高 杯	192	○不明 ○16.2(復) ○15.0	○脚部は脚部を細長くしづぱり、脚部は大きく外方に広がり、端部は上方につまみ上げている。 ○透しては丸太形2段で三方にあく。 ○脚部中央に2条、脚部に1条の凹縫をめぐらしている。	○脚部上位より回線までカキメ調整。 ○脚部下位から端部まで外側ともヨコナナゲ調整。 ○脚部内面にシボリメを残す。	○精良。少量の砂粒を含む。 ○灰色N%。 ○焼成・良好。杯部外面脚部内外面に自然釉付着。
車 輪	高 蓋	193	○不明 ○18.5(現)	○脚部に2条、体部中央に1条の凹縫をめぐらし、その間に彫刻性列点文をめぐらす。 ○中央孔はより内にむかって穿たれています。	○脚部外側一体部内面はヨコナナゲ。 ○底部は逆時計回りの粗いヘラケズリ。	○精良。長石を中量に含む。 ○青灰5B%。 ○焼成・やや不良。
車 輪	逸	194	○12.5(復) ○18.4(復)	○口頭部は細長くラッパ状に開く。 ○底部や下部には2条の凹縫をめぐらし、口頭部との間に粗大な彫刻性波状文をめぐらす。 ○体部は193と同じ。	○口頭部は内外面とも密なヨコナナゲ。 ○底部のヘラケズリは施されず、ヘラ切り後未調整である。	○精良。 ○青灰色10B%。 ○焼成・良好。
車 輪	増	195	○7.4 ○7.9	○体部中位よりやや上で最大径をもつ。 ○短い口縁がわずかに内傾して直進的に立ち。 ○底部は扁平である。	○口頭部～体部内外面ともヨコナナゲ調整。 ○底部は逆時計回りのヘラケズリを施行なう。	○精良。長石や多量に含む。 ○赤灰色2.5YR%。 ○焼成・不良。(還元焰の温度低く、灰色を呈さない。)
馬 頭	馬 頭	196	○9.8 ○4.6(現)	○口頭部のみ残存。 ○短く外反する口頭部の端部は直立して頭部との境界は段差をなす。	○内外面ともヨコナナゲ。	○精良。少量の砂粒を含む。 ○内面・精青灰5B%。 ○外側・青灰5B%。 ○焼成・良好。外側に自然釉多く付着。
馬 頭	裏 A	197	○21.7(復) ○7.7(現)	○口頭部～頭部のみ残存。 ○外反する口頭部はその端部で上下に依頼されている。外面上位に鋭い断面三角形の段をつくる。 ○前の張る体部と思われる。	○口頭部内外面ともティネイナヨナナゲ調節。 ○前部外面に平行タタキメを施す。	○精良。長石微量に含む。 ○内面・灰色N%。 ○断面・赤褐色5R%。 ○焼成・良好。
馬 頭	裏 A	198	○25.8(復) ○17.4(現)	○口頭部のみ残存。 ○大きくて外反する口頭部は、端部で上方に分析される。外面上位に断面三角形の段をつくる。	○口頭部内外面ともヨコナナゲ調節。	○やや粗い。長石を多量に含む。 ○緑灰10G Y%。 ○焼成・良好。
馬 頭	裏 A	199	○20.5 ○6.0(現)	○口頭部～頭部のみ残存。 ○外反する口頭部は頭部で上方につまみ上げて面をなす。外縁端で粘土を引き出して断面三角形の段をつくる。 ○体部最大径はかなり高位置になるようである。	○口頭部内外面、頭部内外面ともヨコナナゲ調節。 ○頭部外面は密なカキメ調整。 ○頭部外側は暗緑色の自然釉が付着しているが、密なカキメ調整を施しているようである。 ○頭部内面には同心円文状のタタキメがつく。	○精良。長石を多量に含む。 ○灰色7.5Y%。 ○焼成・良好。
馬 頭	裏 A	200	○24.3(復) ○8.2(現)	○口頭部～頭部のみ残存。 ○外反する口頭部は頭部で、上方に粘土をつまみ出している。 ○体部最大径はかなり高位置。	○口頭部内外面ともヨコナナゲ調節。 ○頭部外面は密な平行タタキメを施してのち、カキメ調整。 ○頭部内面は同心円文状のタタキメがつく。	○精良。長石を多量に含む。 ○灰色N%。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
頭 骨 器	裏 A	201	○21.9 ○8.0(現)	○口縁部のみ残存。 ○外反する口縁部はそのまま端部につく。外側上位に断面三角形の段をつくり、段を利用して1条の浅い凹頭をめぐらす。	○口縁部内外面ともヨコナデ。	○精良。長石微量に含む。 ○灰白色10YR%。 ○焼成・良好。
			○18.1 ○5.1(現)	○丸くふくらむ体部はごく強く 強く外反する口縁部がつく。 口縁部を平らにするため、 端部は外折して面をなす。	○口縁部外表面及び内面端はヨコナデ。 ○窓部外面にヘラ状工具のあたりが つく。 ○口縁部内面は細いナナフ調整。	○精良。0.1~1mmの砂粒 を含む。 ○緑色2.5Y R%。 ○焼成・ふつう。
	裏 B1	202	○13.4(復) ○7.8(現)	○口より側頭部が大きい。 ○体部は丸く、肩の盛りは小さ い。 ○口縁部は「く」の字状に強く 外反し、口縁部を強くヨコナ デするため外側にわずかに 壁がつく。	○窓部内面にユビオサエ痕がわずか に残る(2かは準繊軟しく調整法不 明)。	○やや粗い。5mm以下の 大粒の砂粒で長石を含む。 ○内面・灰白色2.5Y R%。 ○外側・緑色2.5Y R%。 ○焼成・ふつう。内外面 とも、焼きむらのため 濃淡の斑らを呈す。
			○203	○18.5(復) ○5.0(現)	○口縁部は弱く外上方に開くた め、頭部との境界は後はつか ない。端部は丸く納める。	○窓部外面にユビオサエの後、不明 瞭なハケメ調整がみられるが、摩 耗激しく、不明。
	裏 A2	204	○25.0(復) ○6.8(現)	○口縁部・窓部のみ残存。 ○やや内傾して立ち上がる作部は 大きく直線的に外反する口 縁部がつくため、内面に壁を なす。	○口縁部内面に横方向のハケメ調整 (6~7mm/cm)する以外は内外面 とも密なヨコナデ。	○0.1~1mmの砂粒、内閃 石を多量に含む。 ○生陶面黒斑の上器。 ○にほい・赤褐色2.5Y R%。 ○焼成・良好。
			○205 ・ ○206 ・ ○207	○口縁部は丸く納める。 ○口縁部はやや外上方につき、端 部は丸く納める。		
	羽 筆	208 ・ 209	○19.9(復) ○5.0(現)	○窓部周辺のみ残存。 ○内傾する体部に外反する口縁 部がつく。 ○窓部は水平からやや外上方に つき、端部は丸く納める。	○摩耗激しく調整法不明。	○粗い、5mm以下の大き いめの砂粒で含む長石 多量の角閃石、雲母を 含む。 ○緑色3Y R%。 ○焼成・やや不良。
			○210	○17.5(復) ○9.0(現)	○口縁部・作部のみ残存。 ○内傾して立ち上がる体部に短く 外反する口縁部がつく。口 縁部はわずかに面をなす。 ○窓部はやや外下方につく。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外面に縱方向の細かいハケメ 調整(14mm/cm)を施す。
	器 器	211	○17.7(復) ○8.6(現)	○210と同じ。 ○窓部は水平につく。	○口縁部内外面ともヨコナデ調整す る以外は座尾のため調整法不明。	○粗い、5mm以下の大き いめの砂粒で含む長石 多量の角閃石、多量の 雲母を含む。 ○緑色(2.5Y R%)0.5× 緑色(5Y R%)0.5× ○焼成・ふつう。焼きむ ら有り。濃淡斑ら部と 黒化部有り。外表面 部表面に少量の黒色の 有機物。
			○212	○1.6 ○3.7	○丸底から絶曲後、そのまま口 縁部まで削って立ち上がる。 ○口縁部は外反し、端部は丸い。 地面は手づくねのため不整圓。	○やや粗い。長石、石英、 角閃石を含む。生陶内 黒斑の上。
ミニ チムア土器						○にほい・赤褐色7.5Y R%。 ○焼成・ふつう。

包含層 (第47図、図版五十一)

岩種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
文 上 部	浅 鉢	233	○不明	○口縁部欠損。 ○橢形の小型の浅鉢。	○貝殻の頂部による沈縮を三条配する。 ○内面ナナ調整。	○やや粗い。こまかに石英多量。こまかに角閃石少量。 ○褐色 (10Y R 5%)
	浅 鉢	234	○不明	○粗製の浅鉢口縁部。 ○口縁部前面をもち、内面に一条の深い溝跡を施す。	○外面貝殻による条痕、内面ナナ調整。	○やや粗い。1mm大の長石、石英多量。こまかに角閃石少量。 ○黄褐色 (2.5Y R 5%)
	深 鉢	235	○不明	○粗製の深鉢頭部。 ○体部からわずかに外方へ弧曲する指部。	○頭部外面ナナ調整。頭部以下体部外面横方向のケズリ調整。	○粗い。2~3mm大の角閃石多量。1mm前後の長石粒、雲母少量。 ○黒褐色 (7.5Y R 8%)
	深 鉢	236	○不明	○粗製の深鉢頭部。 ○体部からわずかに外反する頭部。	○頭部に貝殻頭部による3条の沈縮を施したのち、各貝による押圧文を施す。 ○内面ナナ調整。	○やや粗い。1mm前後の石英多量。こまかに角閃石、同石微量。 ○に赤褐色 (10Y R 5%)
	深 鉢	237	○不明	○粗製の深鉢。	○頭部に貝殻頭部による4条の沈縮文を施す。 ○内面ナナ調整。	○やや粗い。1mm前後の長石、石英多量。こまかに角閃石、雲母少量。
	深 鉢	238	○底径4.8 ○高さ1.3 ○底部孔残	○精製深鉢の底部。 ○底部すり跡状に凹む。	○底部外面ヘラケズリ。内面ナナ調整。	○やや粗い。1~2mm大の角閃石多量。1mm大の石英小量。 ○明赤褐色 (5Y R 5%)

S D78 (第48図、図版五十二~五十五・五十九)

岩種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
脊 生 土 器	蓋 b ₁	239	○口徑21.1 ○口縁完存	○所謂2重口縁の蓋。直立気味の頭部から外反したのち、角度をかえて垂直に立ち上がる。	○口縁部外周面削減が著しく不明。 内面は横方向に丁寧なヘラミガキ。	○やや粗い。長石、石英粒多い。角閃石少量含む。 ○褐色 5Y R 5%、内面は明赤褐色 5Y R 5%
	蓋 c	240	○復口28.5	○広口蓋。外反する口縁部に端部を紙張して面をなす。	○口縁部内外面ナナ調整。	○灰白色 10Y R 5%
	蓋 d	241	○復口19.6 ○高さ6.2	○広口蓋。直立する頭部から外反する口縁部をもち、彫刻で内側に取り巻きし、内側の端面をもつ。	○口縁部外表面はヨコナナ。 ○頭部外表面は粗いハゲ目 (5mm/cm) ○口縁部内面に不規則な波状。	○精製。小さな砂粒、雲母、 ○に赤褐色 7.5Y R 8% ○他の地塊からの搬入品。
	体 b	242	○復口15.4 ○高さ8.0	○しっかりした厚手の平底。頭部下部と共通する体部。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○底部に径1.0cmの円孔。	○体部外面に粘土質の板跡が顯著。 ○体部外面の印目をナナにより消している。 ○底部と体部下部の接合が顯著で、段になっている。	○やや粗い。1mm大の角閃石が非常に多い。 長石、石英、雲母少量 ○赤い石粒 (くさり感) 濃量。 ○に赤褐色 5Y R 5%。 ○底面完存。体部全体の汚れ。
器	体 b	243	○長110.2 ○復口19.1 ○高さ7.4	○尖り気味の丸底。すり跡状の体部に口縫は直口する。 ○口縫部は捨円形を呈する。	○体部外面印目。内面ナナ調整。	○やや粗い。1~2mm大の長石、こまかに石英角閃石を含む。 ○に赤褐色。
	体 b	244	○復口12.8 ○高さ9.8	○平底の底部から内面気味の口縫がつく。頭部は丸く尖り気味。 ○底部の中央に0.6cmの円孔。 ○円孔は内面から外へ穿孔し、その隣接部外表面へ粘土がみ出したため、底部は凹凸があり水平に立てられない。	○体部外面に左下りの印目 (2.5mm/cm) を底部末端まで施す。 ○内面ナナ調整。底面内面にしまり目の痕跡がある。	○やや粗い。1mm大の角閃石が非常に多い。長石、石英、雲母少量。 ○暗赤褐色 (2.5Y R 5%) ○底面完存。体部全体の汚れ。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
升生	鉢 c	245	○復口12.7 ○器高6.4	○外反する口縁部で端部内面はわずかに内傾する。 ○底部外面に指跡に痕を残し、凸台状の底部をつくる。	○内外面とも丁寧にナデ調整。	○やや細い。1~2mmの大角開石が非常に多い。 長石、雲母を含み石英は微量。 ○にい・褐色(7.5YR 3/6) 底部完存。体部光沢。
	鉢 c	246	○復口12.5 ○器高6.4	○橢形の体部に外反する口縁部をもつ。端部は丸く缺ける。 ○底部外面に筋跡をつぎ足して凸台状の底部をつくる。	○内外面とも風化が激しく詳細不明	○やや細い。1~2mmの大角開石が非常に多い。 長石、石英等の石粒も目立つ。 ○紫色(7 YR 5/6) ○口縁部付近に風化あり。
編文上器	鉢 a	247	○復口18.0 ○残高7.0	○「く」の字形に外反する口縁部で端部を外側にわずかに肥厚させる。	○口縁部は内外面ともヨコナデ。 ○体部外面、こまかに研磨毛状の工具で調整したのち、ナデ調整。 内面は右回りの弱いケヌリ。	○やや細い。こまかに角開石、雲母等が頗る。 石英、長石、赤い石粒が少見。 ○外削、明赤褐色(7.5YR 3/6) 内削、黒褐色(2.5YR 1/6) ○口縁全体の劣化
	鉢 d	248	○復口32.6 ○残高8.0	○大型のもの。すり鉢形の体部に外反する口縁部をもち、端部は曲をつくる。	○口縁部内面を横方向、体部内面を縦方向のヘラミガキ。 ○口縁部外側ヨコナデ、体部外側タテのヘラミガキのちナデ調整。	○やや細い。1~2mmの大角開石。長石、石英、雲母少量。 ○明赤褐色(2.5YR 3/6) ○全体の劣化
第2	鉢 d	249	○復口33.0 ○残高9.4	○248と同じ形態	○248と同じ技法。	○やや細い。こまかに角開石多量。長石、石英雲母を含む。 ○にい・褐色(7 YR 5/6) ○248と同一個体?
	高杯 a	250	○復口23.0 ○残高14.2	○水平方向にのびる筋部の縁に鋸い縫をもち、口縁部は大きく外反する。 ○中空の脚部、脚部欠損。	○口縁部内面はナデ調整。 ○脚部外側、縦方向のヘラミガキ。 ○脚部端に4ヶ所の円孔。	○やや細い。为閃石多量に含む。 ○紫色(7.5YR 5/6)。
第3	高杯 b	251	○復口21.6 ○残高	○水平方向にのびる筋部より角度をかけて直立したのち外反する口縁部が付く。 ○屈曲部で内外面に鋸い縫がつく。 ○口縁端部は受口状に仕上げる。 ○中空の脚部をつける。	○口縁部内面ナデ調整、外側ヘラミガキ調整。 ○脚部外側ヘラミガキ調整。内面にしばり痕あり。	○精良、こまかに共石、石英英は多量に含む。 雲母、赤い石粒少見。 ○にい・褐色(10YR 5/6) ○他地城壁。 ○口縁部の劣化。
	高杯 a	252	○復口13.4 ○残高3.5	○水平方向にのびる杯底部から角度をかけて直立したのち外反する口縁部が付く。 ○杯部の縁に段をもつ。 ○杯底部に脚部との接合面を残す。	○口縁部内外面ヨコナデ。 ○杯部内外面ナデ調整。	○精良、こまかに共石少見、赤い石粒(くさり縫)が目立つ。 ○にい・黄褐色(10YR 5/6) ○他地城壁。 ○口縁部の劣化。
第4	高杯 a	253	○口徑15.1 ○残高4.2	○斜上方にのびる杯底部から大きく外反する口縁部がつく。 ○杯部の縁に段をもつ。 ○杯底部に脚部との接合面を残す。	○杯部内面は中心部に向かって方狀にヘラミガキ。外面も縦部に向かってヘラミガキを施す。	○やや細い。1~2mmの大角開石多量。共石絨も目立つ。雲母、石英少見。 ○明赤褐色(2.5YR 3/6)。 ○杯部完存。
	高杯 a	254	○復口17.4	○筋部の縁にするどい縫をもち、口縁部は大きく外反する。口縁端部は曲をなす。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。	○粗い。1~2mmの大角石、石英多量。こまかに角開石、雲母少見合む。 ○明赤褐色(10YR 5/6)。 ○口縁全体の劣化。
	高杯 b	255	○残高3.5	○257と同じ形態。 ○屈曲部の内面に段、外面上に縫をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ。	○精良、こまかに石粒を少見、赤い石粒(くさり縫)微見。 ○にい・黄褐色(10YR 5/6) ○他地城壁。 ○杯部全体の劣化。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
鉢	高杯 b	256	○残高4.5	○水平方向にのびる杯底部より角度をかえて直立したのち外反する。 ○周縁部で段状の筋がつく。	○杯部内外面へラミガキ。 ○杯底部と周縁部との接合痕残す。 杯底部に平直に粘土壁を張み、外面にわずかにはみ出す。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石多量。長石、雲母を含む。 ○赤褐色(5YR 5/6)。 ○杯縁部全体の劣化。
	高杯 a	257	○残高8.0	○水平方向にのびる杯底部。 ○細い中空の脚柱部から角度をかえて広がる斜面。	○杯部内外面ナデ。 ○脚柱部外表面傾斜方向のへラミガキ。 内面にしまり痕。	○精良。こまかに白い石英少量。 ○褐色(5YR 5/6)。 ○地帯斑状。 ○杯底部劣化、脚柱部充満。
	高杯 b	258	○残高10.9	○斜上方にのびる杯底部から角度をかえて直立する口縁部。 ○中空の短い脚柱部から内面して広がる脚部。	○脚部内面ナデ、外面ヨコナデ。脚柱部外表面傾斜方向のへラミガキ。脚柱部外表面ヨコナデ。 ○脚部に4ヶ所の円孔。円孔は外側から内側に穿ち、内面に粘土のはみ出しがある。	○やや粗い。2~3mmの大角閃石が目立つ。角閃石、雲母少量。 ○明赤褐色(5YR 5/6)。 ○脚柱部充満、脚柱部、杯底部劣化。
	高杯 c	259	○幅口径12.8 ○残高8.4	○半球形の底盤から柱状部分がなく、直接底盤がりの脚部がつく。脚部は丸く終わる。	○脚部内面へラミガキ？脚部内面ナデ調整と思われるが、磨減のため詳細不明。	○やや粗い。1mm前後の細かな角閃石多量。 ○長石、雲母少量。 ○褐色(10YR 5/6)~明赤褐色(2.5YR 5/6)。 ○脚部の劣化。
牛 頭	a	260	○復口16.8 ○残高5.4	○「く」の字形に外反する口縁部に瘤部は曲をもって終わる。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外側細かな網目毛(1本/cm)。瘤部に網目模様は底盤を残す。 ○体部内面ナデ調整。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石多量。1~2mmの大角閃石も目立つ。赤い石英少量。 ○明赤褐色(5YR 5/6)。 ○口縁の劣化。
	a	261	○復口17.6 ○残高4.5	○261と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外側印目(2.5毛/cm)。瘤部内面に粘土接合痕で段になっている。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石多量。長石、石英、雲母少量。 ○明赤褐色(5YR 5/6)。 ○口縁の劣化。
土 甕	a	262	○復口12.2 ○残高3.8	○261と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外側に明日がわずかに認められる。 ○瘤部内面に1回接合時粘土が段になって残る。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石多量。こまかに角閃石、雲母少量。 ○明赤褐色(5YR 5/6)。 ○口縁の劣化。
	b ₁	263	○復口12.4 ○残高4.1	○「く」の字形に外反する口縁部に瘤部は丸く終わる。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外側印目調整。 ○瘤部内面に接合痕を残す。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。長石粒少量。赤い石英微量。 ○明赤褐色(5YR 5/6)。 ○口縁の劣化。
器 蓋	b ₁	264	○復口13.4 ○残高3.2	○263と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外側印目調整、内面ナデ調整。	○やや粗い。1mm前後の角閃石と5mm前後の閃綠岩の共融合。 ○長石、雲母少量。 ○赤い石英微量。 ○明赤褐色(5YR 5/6)。 ○口縁の劣化。
	b ₁	265	○復口15.2 ○残高4.1	○263と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外側印目(2.5毛/cm)。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。長石、雲母少量。 ○に近い褐色(7.5YR 5/6)。 ○口縁の劣化。
器 蓋	b ₁	266	○復口12.8 ○残高5.2	○263と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外側に明日(2.5毛/cm)。内面押さえのらナデ調整。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。長石、雲母少量。 ○に近い黄褐色(10YR 5/6)。 ○口縁部から瘤部に過渡。 ○口縁の劣化。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
甕	甕 b ₁	267	○「く」の字形に ○復口15.6 ○残高9.3	○「く」の字形に外反する口縁部 に端部は丸く終わる。 ○体部はわずかに張る。	○口縁部内外面ヨコナタ。体部外面 左下りの印目(2.5条/cm)。 ○体部上半の印目を板状の工具で 消している。体部内面ナナタ調整。	○やや粗い。1~2mmの大 きな石粒が多い。 雪母、細かな角閃石少 量。 ○褐色(7.5YR 5%)。 ○口縁の劣化。
	甕 b ₁	268	○復口15.6 ○残高9.3	○263と同じ形態。	○265と同じ技法。	○粗い。2mm前後の角閃 石多量。1~2mmの大の石 粒多い。 ○にほい赤褐色(5YR 5%)。 ○口縁の劣化。
	甕 b ₁	269	○復口15.0 ○残高4.7	○263と同じ形態。	○266と同じ技法。	○やや粗い。1mm前後の 角閃石多量。長石、石 英少量。 ○にほい赤褐色(5YR 5%)。 ○口縁の劣化。
	甕 b ₁	270	○復口12.8 ○残高7.0	○「く」の字形に外反する口縁部 に端部はわずかに曲がる。 ○体部の上半がわずかに張る。	○口縁部内外面ヨコナタ。体部外面 に左下りの印目(2条/cm)。 ○体部内面ナナタ調整。	○やや粗い。1~2mmの大 きな角閃石多量。長石、石 英、雪母少量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。 ○口縁の劣化。
	甕 b ₁	271	○復口11.4 ○残高7.7	○263と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナタ。 体部外面在下りの印目(3条/cm)。 ○体部内面ナナタ調整をおこなうが、 粘土の接着が残す。	○やや粗い。2mm前後の 角閃石多量。長石、石 英、雪母少量。 ○褐色(7.5YR 5%)。 ○口縁の劣化。
	甕 c ₁	272	○復口12.0 ○残高5.0	○「く」の字形に軽く細曲外反す る口縁部。端部はわずかに上 方へつまみ上げ曲がる。 ○頭部内面に長い縫をもつ。	○口縁部内外面ヨコナタ。体部外面 に粗かな印目(4.5条/cm)。体部前面 から下り印目のもの、刷毛目(8条/ cm)で調整。 ○体部内面の上半は左回りのケズリ。	○精良。こまかなる角閃石 を多量に含む。 ○雪母、細かな角閃石少 量。 ○褐色(10YR 5%)。 ○口縁の劣化。
	甕 c ₁	273	○復口14.6 ○残高5.0	○「く」の字形に細曲外反する口 縁部に端部は丸く終わる。 ○頭部内面に長い縫をつく。	○口縁部内外面ヨコナタ。体部外面 の印目(3条/cm)は頭部を抱えて、 口縁部下まで達する。体部内面 は左まわりケズリ。	○精良。こまかなる石英、 長石粒を多量に含む。 ○雪母、赤い石粒(くさ り縫)を少量。 ○にほい黄褐色(10YR 5%)。 ○地盤底座。 ○口縁の劣化。
	甕 b ₁	274	○復口13.0 ○残高11.5	○「く」の字形に外反する口縁部 に球形に長い体部がつく。	○口縁部内外面ヨコナタ。体部外面 に左下りの印目(2条/cm)。体部内 面ナナタ調整。内面に粘土粒のつな ぎ目が残す。	○やや粗い。1mm前後の 角閃石多量。長石、石 英少量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。 ○口縁の劣化。
上器	甕 b ₁	275	○底径3.4 ○残高13.7	○瓶形に近い体部に小さな平底 の底部がつく。 ○口縁部欠損。	○体部外表面印目。印目は底部の末端 まで泡し、底部の調整はしない。 ○体部外表面の磨擦感が激しい。 ○体部上半ナナタ。但し体部上半部に 粘土粒の痕跡があり、下半と上半 の境に段がつく。 ○体部下半刷毛目のちナナタ調整。	○やや粗い。1~2mmの大 きな角閃石多量。中に5mm 前後の粗粒岩の石粒合 む。其石粒も目立つ。 ○石英、雪母少量。 ○体部上半赤褐色 (10YR 5%)。 ○体部下半赤褐色 (5YR 5%)。 ○体部上半と下半で粘土 が違うことがわかる。 ○底部完存。体部劣化。
	甕 b ₁	276	○復口15.4 ○残高11.0	○肩の張る球形に近い体部から 外反する口縁部がつく。	○口縁部内外面ヨコナタ。体部外面 に左下りの印目(2.5条/cm)。内面 ナナタ調整。 ○体部中位に粘土粒のつなぎ底。	○やや粗い。1mm前後の 角閃石多量。2~3mmの 長石粒立つ。赤い石 粒(くさり縫)、雪母少 量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。 ○口縁の劣化。

名種	器形	番号	法寸(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
甕	甕 b1	277	○底径18.4 ○残高9.4	○肩の張る球形に近い体部から短く外反する口縁部がつく。	○口縁部内外面コナデ。口縁部接合時に底部までヨコナデが及んだため、体部とつなぎ部分の目印が消されている。 ○体部表面叩目。表面のナメによって不鮮明。粘土縫のつなぎ目残る。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石。共石粒多量5mm前後閃緑石の石粒。 ○さりげ無量。雲母少量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。 ○口縁部ナメ。
	甕	278	○底径4.5 ○残高2.4 ○底部完存	○平底の底部	○叩目(2.5条/cm)が本端まで施され突出しない。外底面に円孔があけられているが、通していない。 ○内外面ナメ調整。	○やや粗い。1mm前後の角閃石。共石粒を含む雲母少量。 ○褐色(7.5YR 5%)。
	甕	279	○底径3.0 ○残高3.0 ○底部無残	○小さな平底の底部	○叩目(2条/cm)が外底面まで施され丸底化の傾向がある。不安定で立たない。 ○内底面ナメ調整。しばり痕がある。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。長石、雲母少量。 ○褐色(7.5YR 5%)。
	甕	280	○底径3.8 ○残高3.0 ○底部完存	○平底の底部	○叩目(2.5条/cm)が本端まで施され外底面の斜ししきみ出す。外底面が削かれただけに平坦になっている。使用刃か、わずかに凹、内底面ナメ調整。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石多量。こまかな長石粒。雲母少量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	甕	281	○底径4.5 ○残高2.8 ○底部完存	○平底の比較的しっかりした底部わずかに突出する。	○叩目(2条/cm)を本端まで施す。 ○内底面ナメ調整。しばり痕がある。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。長石粒少量。 ○褐色(7.5YR 5%)。
	甕	282	○底径4.2 ○残高1.8 ○底部完存	○平底の底部で中央に径2.5cm深さ3mmの楕円形凹む。	○叩目(3条/cm)を本端まで施すが弱い。内底面ナメ調整。	○やや粗い。1mm前後の角閃石。共石粒。雲母を含む。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	甕	283	○底径3.8 ○残高4.0 ○底部完存	○小さな平底の底部。中央部わずかに凹む。	○叩目(1.5条/cm)が内底面まで及び丸底化の傾向が強著に認められる。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石多量。長石粒。雲母少量。 ○褐色(5YR 5%)。
	甕	284	○底径3.3 ○残高3.0 ○底部完存	○小さな平底の底部。	○叩目(2条/cm)が外底面まで施され丸底化の傾向が強著。 ○内底面ナメ調整。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石多量。共石粒。雲母少量。 ○にほん褐色(7.5YR 5%)。
	甕	285	○底径3.5 ○残高3.2 ○底部完存	○平底の底部。	○叩目(3条/cm)を本端まで施す。 ○内底面ナメ調整。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石。共石粒多量。雲母少量。 ○暗赤褐色(5YR 5%)。
	甕	286	○底径4.0 ○残高2.5 ○底部完存	○平底の底部。底面中央部径0.8cm、深さ0.2cm程凹む。	○叩目(2.5条/cm)を本端まで施す。 ○内底面ナメ調整。	○やや粗い。1mm前後の角閃石。長石粒。雲母を含む。 ○褐色(2.5YR 5%)。
甕	甕	287	○底径4.6 ○残高2.9 ○底部完存	○平底の底部。底面中央からはずれたところに径0.8cm、深さ0.3cmの凹みがある。	○叩目(2.5条/cm)を本端まで施したのち、底面に粘土を剥がして、底部を成形。 その後に自重で底面の粘土が外へはみ出している。	○やや粗い。1~2mmの大長石粒。共石粒多量。雲母、角閃石少量。 ○暗赤褐色(5YR 5%)。
	甕	288	○底径4.1 ○残高2.6 ○底部完存	○平底の底部。底面中央部に0.8cm、深さ0.2cm程の凹みあり。	○叩目(2.5条/cm)が底部本端まで施されている。内底面ナメ調整。しばり目あり。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石。共石粒も目立つ。 ○褐色(7.5YR 5%)。
	甕	289	○底径3.6 ○残高1.5 ○底部完存	○平底の底部。中央で径2.1cm深さ0.3cmの楕円形凹む。	○叩目(4条/cm)を本端まで施すが弱い。内底面ナメ調整。	○やや粗い。1mmの大角閃石多量。共石粒、雲母。 ○にほん褐色(5YR 5%)。
	甕	290	○底径3.8 ○残高4.6 ○底部完存	○平底の比較的しっかりした底溝。中央に径1.2cm、深さ0.5cmに凹む。	○叩目(2条/cm)を本端まで施す。外底面削かれている。内底面ナメ。しばり目あり。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石。共石粒多量。雲母少量。 ○暗褐色(7.5YR 5%)。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
甌	甌	291	○底径3.4 ○残高3.0 ○底部完存	○小さな平底の底部。内底面に工具の先で削突したような凹みが大小2ヶ所ある。	○底部外面ナメ、内底面ナメ調整。 ○外底面に擦斑。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。こまかな長石、雲母少量。角閃石多量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	甌	292	○底径3.0 ○残高3.3 ○底部欠損	○小さな平底の底部。突出部はほとんどない。	○底部外面、体部の下半ヘラミガキ。 ○内底面にこまかな刷毛目(12条/cm)	○やや粗い。1mm大の長石、石英粒多量。角閃石、雲母微量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	甌	293	○底径4.6 ○残高3.7 ○底部完存	○平底の底部。外底面本端、丸くなる。 ○底面中央に小さな凹み2ヶ所。	○底部外面、体部外面へラミガキ、内底面へラミガキのちナメ調整。	○やや粗い。2~3mm大の長石、石英粒多量。角閃石、雲母微量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	甌	294	○底径2.7 ○残高5.5 ○底部完存	○小さな平底の底部で完形であれば立はできないと思われる。 ○底部中央にいひつな浅い凹みがある。	○底部外面、体部下半外表面縱方向のヘラミガキ。内底面へラミガキ調整。	○やや粗い。2~3mm大の長石、石英粒多量。角閃石、雲母少量。 ○暗赤褐色(5YR 3%)。
	甌 b ₁	295	○腹径17.1 ○残高15.8 ○底部完存 ○底部欠損	○「く」字形に外反する口縁部で底部はむすびに面をなす。 ○体部中位よりやや上に最大径をもつ複形の体部。 ○底部中央に皿状の凹みをもつ平底の底部。	○口縁部外面ナメ調整。 ○体部外面、冒頭のちナメ仕上げ。 ○体部上半の方より丁寧に仕上げている。体部上半と下半の刷毛目で隙が残っている。分割成形によるひびき。	○やや粗い。1~2mm大の角閃石多量。1mm前後の長石、雲母少量。 ○にい赤褐色(5YR 5%)。 ○他地底。
	甌 b ₂	296	○腹径10.2 ○残高3.5 ○底部欠損	○如廻する大型の甌。球形の体部上半部分。	○颈部に刮目を施した貼付穴窓。 ○体部上半に3列の波状文(9条)と筋文(2段)で直腹文(3条)を施す。 ○内底面ナメ調整。粘土接着の跡が残す。	○やや粗い。1~2mm大の角閃石多量。2mm前後の長石、こまかな雲母少量。 ○にい赤褐色(7.5YR 5%)。
	高杯	297	○腹径10.2 ○残高5.9 ○底部完存	○太く短い中実の脚柱部から内部氣味に広がる脚台がつく。 ○脚端部は丸く終わる。	○脚部外面へラミガキのちナメ仕上げ。 ○内底面ナメ。しばり痕を残す。 ○円孔を3ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。長石、石英粒少量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	高杯	298	○腹径12.0 ○残高7.0 ○脚柱欠損 ○脚端完存	○細く短い中実の脚柱部に内部氣味に広がる脚台がつく。 ○脚端部は丸く終わる。	○脚部外面縦方向のヘラミガキ、脚部外面ナメ。 ○内底面ナメ。しばり痕を残す。 ○円孔を4ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。石英、長石少量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	高杯	299	○腹径14.2 ○残高7.0 ○脚柱欠損 ○脚端完存	○298と同じ形態。	○脚柱部、瓶部外面縦方向のヘラミガキ、瓶部内面ナメ調整。 ○円孔を4ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。その際、内面に粘土のはみ出しが多く残る。	○やや粗い。1~2mm大の角閃石多量。長石、石英粒少量。 ○暗赤褐色(7.5YR 5%)。
	高杯	300	○腹径14.0 ○残高5.0 ○脚柱部完存	○中実の脚柱部になだらかに脚部へ移行する。脚端部は面をもって終わる。	○脚柱部、瓶部外面、瓶方向のヘラミガキ、瓶部内面ナメ。 ○円孔を4ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。その際、内面に粘土のはみ出しが多く残る。	○良。1mm前後の角閃石多量。こまかな長石、雲母少量。 ○橙色(7.5YR 5%)。
	高杯	301	○腹径10.4 ○残高5.8 ○脚柱完存 ○脚端欠損	○299と同じ形態。	○脚柱部、瓶部外面、瓶方向のヘラミガキ、瓶部内面ナメ。 ○円孔を4ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。しばり痕を残す。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。こまかな長石、雲母少量。 ○にい赤褐色(5YR 5%)。
	高杯	302	○腹径8.6 ○残高5.0 ○脚柱完存 ○脚端欠損	○中実の短い脚柱部よりなだらかに脚部へ移行する。脚端部は面をもって終わる。	○脚柱部、瓶部外面縦方向のヘラミガキ、瓶部内面ナメ。内孔を外面から内面へ3ヶ所穿つ。 ○脚柱部上端に放射状に刮目を入れ杯底部の接合の強度を増している。	○やや粗い。1~2mm大の角閃石、石英粒多量。 ○橙色(5YR 5%)。
	高杯	303	○腹径10.0 ○残高6.4 ○脚柱完存 ○脚端欠損	○299と同じ形態。	○脚柱部、瓶方向、瓶部横方向のヘラミガキ。瓶部内面ナメの円孔を8ヶ所、等間隔に穿つ。	○やや粗い。2~3mm大の長石、石英粒多量。こまかな角閃石、雲母微量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
先 生 土 器	高杯	304	○復口8.2 ○残高4.5 ○口縁劣残	○天地不明 ○短い脚柱部に斜上方に外反する 杯脚がつく。口縁端部下方 にわずかに屈張し曲をなす。	○口縁外側ナナ調整。瓶部に4ヶ所 の内孔を外側から内面へ穿つ。	○やや粗い。1~2mm大の 角閃石多量。2~3mm の大長石粒。雲母少量 ○明赤褐色(5YR 4/6)。
	高杯	305	○脚径3.5 ○残高5.7 ○脚柱完存	○中空の円筒形の脚柱部。	○脚柱部外側板方向へのラミガキ。 ○内面にしばり板。	○やや粗い。1mm前後の 角閃石。2~3mm大の長 石粒多量。 ○に赤褐色(5YR 4/6)。
	高杯	306	○脚径3.9 ○残高6.5 ○脚柱完存	○中実の太い円筒形の脚柱部。	○脚柱部外側板方向へのラミガキ。	○やや粗い。1mm大の角 閃石多量。2~3mm大の 長石粒も目立つ。 ○明赤褐色(5YR 4/6)。

SD 82(第50図、図版五十七)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
先 生 土 器	腰 b	307	○復口15.0 ○残高11.5 ○口縁劣残	○「く」の字形に外反する口縁部 に端部は丸く終わる。	○口縁部内外面ナナ。体部外側粗い 叩目(2条/cm)、内面ナナ調整。	○やや粗い。2~3mm大の 角閃石多量。 1~2mm大の長石も目 立つ。 ○明褐色(7.5YR 4/6)。

SD 83(第50図、図版五十六)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
先 生 土 器	蓋 m	308	○復口12.0 ○残高11.7 ○口縁劣残	○体部に比し、直線的に外方へ 大きく伸びる直口の口縁部。 体部は球形で、丸底と思われる。	○口縁部内外面ナナ調整。 ○体部内外面ナナ調整。	○精良。こまかなく石粒を 少量。 ○赤褐色(10R 4/6)。 ○他地域産。
	蓋 m	309	○口徑10.8 ○残高12.6 ○口縁完存	○扁平で球形の体部に「く」の字 形に斜上方に開く直口の口縁部。 口縁部端は丸く尖り球味 に終わる。	○口縁部内外面ナナ調整。 ○体部外面ナナ、内面下半横押え下 半刷毛目の中、ナナ仕上げ。	○精良。こまかなく石粒少 量。 ○赤褐色(10R 4/6)。 ○他地域産。
	蓋 m	310	○口徑13.5 ○残高11.2 ○口縁完存	○「く」の字形に口縁部に端部は 丸く終わる。口縁部外側に中央 部が枯たる様さじで少しふ くらむ。頭部内面に核をもつ。	○口縁部内外面ナナ。 ○体部外面ナナ、内面左半わりの弱 いケズリ調整。	○粗良。1~2mm大の石粒 長石など多量。 ○赤褐色(5Y R 4/6)。 ○他地域産。
土 器	蓋 c	311	○復口14.1 ○残高10.2	○「く」の字形に既く粗面を残す 口縁部端部はわずかに上方 へつまみ上げる。 頭部内面に核をもつ。	○口縁部内外面ココナナ。 ○体部外面こまか叩目。 内面右半わりのケズリ調整。	○やや粗い。こまかなく 粒多く含む。 ○灰褐色(10Y R 4/6)。 ○他地域産。
	蓋 b	312	○復口15.8 ○残高6.9 ○口縁劣残	○「く」の字形に外反する口縁部 に端部は丸く終わる。	○口縁部外側粗いココナナ。体部外 側叩目の中、ナナ仕上げ。 内面はナナ調整。 器壁の厚さは0.7 cmとあまり薄くなっている。	○やや粗い。1mm大の角 閃石多量。1mm大の長 石粒。雲母少量。 ○外側、黒斑。内面、赤 褐色(5YR 4/6)。

SD 85(第50図、図版五十六)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
先 生 土 器	腰 b	313	○復口18.3 ○残高23.7 ○口縁劣残	○「く」の字形に外反する口縁部 で端部はわずかに曲をなす。 最大径部が脚部下間にくる脚 長い体部。	○口縁部内外面ココナナ。体部外 側粗い叩目の中、ナナ仕上げ。 内面はナナ調整。	○粗い。1~2mm大の長 石粒多量。赤い石粒 (くきり織)微量。 ○に赤褐色 (10YR 4/6)。

SD 80 (第51図、図版五十七・五十八)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
甕	高 杯 c	314	○復口10.0 ○残高8.5 ○口縁劣残	○半球状の杯底部に短く頸い中実の脚柱部がつく。口縁端部は丸く終わる。	○底部内部放射状のヘラミガキ。外面へラミガキ、脚柱部ナダ。底部に4ヶ所の円孔。	○やや重い。1~2mmの大角石多量。長石粒少量、赤い石絆(くきり縫)空母合む。
	高 杯	315	○復口11.0 ○残高5.2 ○口縁劣残	○短い脚柱部に拡張がりの脚台がつく。脚部は曲をもつて終る。 ○脚部欠損。	○底部外面へラミガキ、内面ナダ調整。 ○底部に3ヶ所円孔。円孔は外面から内面へ穿たれ、内面に粘土のはみ出しがある。	○やや重い。1~2mmの大角石多量。長石粒空母合む。 ○褐色(10YR 5G)。
	甕 c ₁	316	○復口14.2 ○残高3.9 ○口縁劣残	○「く」の字形に親く屈曲外反する口縁部。脚部はわずかに上方へまみ上げ面をなす。 脚部内面に後をもつ。	○口縁部外面ヨコナダ。体部外面細かな凹印(6条/cm)。内面、左よりのヘラケズリ調整。	○良。こまかなる角石、長石を多量に含む。 ○に赤い黄褐色(10YR 5G)。
	甕 b	317	○復口13.6 ○残高3.6	○「く」の字形に外反する口縁部に脚部は丸く終る。	○口縁部内外面ヨコナダ調整。 ○体部外面凹印調整。	○良。こまかなる角石、長石を含む。 ○に赤い黄褐色。
	甕 c ₂	318	○復口14.8 ○残高4.5 ○口縁劣残	○317と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナダ。体部外面細かな凹印(5条/cm)。内面右よりのヘラケズリ調整。	○良。1~2mmの大角石多量。2~3mmの長石粒、空母微量。 ○に赤い黄褐色(10YR 5G)。
	甕 c ₁	319	○復口14.2 ○残高5.9 ○口縁劣残	○317と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナダ。体部外面こまかなる凹印(6条/cm)、内面右よりのヘラケズリ。	○良。1~2mmの大角石多量。2~3mmの長石粒、空母微量。 ○に赤い黄褐色(10YR 5G)。
土 器	甕 c ₂	320	○口縁16.0	○「く」の字形に外反する口縁部に脚部は丸く終る。底部内面の接は弱い。	○口縁部内外面ヨコナダ。体部外面こまかなる凹印(4条/cm)のうちナダ調整。内面左よりの弱いケズリ。	○やや重い。2~3mm人の石、石英粒多量空母、赤い石絆(くきり縫)微量。 ○他地域産。 ○褐色(5YR 5G)。
	高 杯 a	321	○復口12.8 ○残高6.7 ○口縁劣残	○斜め上方にゆるやかにのびる杯底部に大きく外反する口縁部がつく。 ○脚部は丸く尖り気味に終る。 ○脚部外縁に接、内面に段がつく。	○口縁部内外面ヨコナダ調整。 ○杯部内外面ナダ調整。 ○脚柱部は神込込み式。	○精良。赤い石絆、長石粒多量、空母微量。 ○に褐色(7.5YR 5G)。 ○他地域産。

SD 81 (第51図、図版五十六・五十七)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
甕	小 型 脚 付	322	○復口9.4 ○残高2.5 ○口縁劣残	○浅い瓶状の変形に口縁部はわずかに上へまみ上げられる。 ○脚柱部を底部に神込込み式。	○受部内外面ナダ調整。	○精良。こまかなる石粒、空母微量。 ○明赤褐色(2.5YR 5G)。 ○他地域産。
	高 杯 c	323	○復口11.8 ○残高4.1 ○口縁劣残	○復口11.8 ○残高4.1 ○口縁劣残	○杯内、放射状のヘラミガキのちナダ、外面ナダ調整。	○精良。こまかなる石粒、空母微量。 ○明赤褐色(2.5YR 5G)。 ○他地域産。
	甕 c ₁	324	○復口11.7 ○残高4.1 ○口縁劣残	○直口窓、短く外方に開く直口の口縁部。	○口縁部内外面ナダ調整、体部内面刷毛目(6条/cm)、外面ナダ調整。	○やや重い。長石、石英粒多量、青母、こまかなる角石微量。 ○に赤い赤褐色(5YR 5G)。
	高 杯	325	○復口15.0 ○残高3.1 ○口縁劣残	○脚柱部より角度をかえて内寄気味に広がる脚部。脚部は尖り気味に丸く終る。	○脚部内外面ナダ調整。脚部に4ヶ所の円孔。円孔は外側から内面に向って穿つ。	○精良。こまかなる石粒少量食入。 ○淡赤褐色(2.5YR 5G)。 ○他地域産。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
新石器	甕	326	○復口12.9 ○残高4.5 ○口縁%残	○「く」の字形に鋸く屈曲外反する口縁部。 ○端部は上方へつまみ上げて、受口状になり、面をなす。 ○底部内面に縫をもつ。	○口縁部内外面コナデ。体部外面 こまかに叩目(6束/cm)、内面左ま わりのケズリ?調整。	○精良。こまかに角閃石 雲母を多量に含む。 ○暗褐色(7.5YR 3/6)。
	甕	327	○復口17.0 ○残高5.1 ○口縁%残	○「く」の字形に鋸く屈曲外反する口縁部。 ○端部は上方へわずかにつまみ 上げて面をなす。 ○底部内面に鋸い縫をもつ。	○口縁部内外面コナデ。体部外面 こまかに叩目(6束/cm)、内面右ま わりのケズリ。	○良。1~2mm人の角閃石 多量、こまかに石粒少 量。 ○にぶい黄褐色 (10YR 4/6)。
	罐	328	○復口116.6 ○器高19.6 ○全体の%残	○底部の体部に「く」の字形に 鋸く屈曲外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は上方へつまみ上げて 受口状になる面をなす。 ○底部はわずかに突り気味になるが、ほぼ丸底。	○口縁部内外面コナデ。体部外面 上半はこまかに叩目(6束/cm)。中 段は棒状の工具で叩目を留す。下 半はナガ調整。 ○体部内面上半は下方から左へケ ズリ上げ。下半は右まわりに横に くぐる。器底の厚さは底部に重る まで3mm前後に統一されている。	○良。こまかに角閃石多 量、こまかに石粒少 量。 ○暗褐色(7.5YR 3/6)。
	高 杯	329		○斜め上方にまっすぐにのびる 口縁部に杯底部は水平につ く。	○口縁部外面ナデ。内面は放射状の ヘラミガキ調整。	○こまかい石粒。赤い石 粒少量。 ○明赤褐色(2.5YR 4/6)。 ○細地模様。

SE 5 第1層 (第52図、図版五十八・六十一)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
新石器	甕	330	○復口15.4 ○残高4.0 ○口縁%残	○「く」の字形に外反する口縁部 に端部は丸く終る。	○口縁部内外面コナデ。 ○体部外表面叩目(6束/cm)仕上げ。 ○内面棒状工具によじあつけ。 ○底部内面に結合時の粘土が込み出 したまま調整しないで段になって いる。	○やや粗い。1mm前後の 角閃石、雲母多量。 ○こまかに石粒少 量。 ○にぶい褐色 (7.5YR 4/6)。
	甕	331	○復口11.4 ○残高5.0 ○口縁%残	○331と同じ形態。	○口縁部内外面コナデ調整。 ○体部外表面粗い叩目(6束/cm)、内面 ナデ仕上げ。	○やや粗い。1~2mmの大 きな角閃石、雲母多量。 ○こまかに石粒少 量。 ○にぶい褐色(7.5YR 4/6)。
	甕	332	○復口17.4 ○残高6.0 ○口縁%残	○「く」の字形に屈曲外反する口 縁部、端部は上方へつまみ上 げ面をなす。この際、口縁部 中央がわずかにふくらむ。	○口縁部内外面コナデ調整。 ○体部外表面こまかに叩目(6束/cm)、 内面左まわりのケズリ調整。	○やや粗い。1mmの大 きな角閃石、長石粒、雲 母少量。 ○にぶい黄褐色(10YR 3/6)。
	甕	333		○333と同じ形態。	○333と同じ技法。	○やや粗い。1mmの大 きな角閃石多量、長石粒、雲 母少量。 ○にぶい黄褐色(10YR 3/6)。
土器	甕	334	○復口17.8 ○残高2.5 ○口縁%残	○体部以下欠損。 ○333と同じ形態。	○333と同じ技法。	○やや粗い。1mm前後の 石粒。
	甕	335	○復口19.0 ○残高4.0 ○口縁%残	○「く」の字形に鋸く屈曲外反す る口縁部、端部はわずかに上 方へつまみあげ、嵌い面をな す。 ○底部内面に鋸い縫をもつ。	○口縁部内外面コナデ調整。 ○体部外表面、こまかに叩目(6束/cm) の上に粗い叩目(4束/cm)で調整。	○やや粗い。1mmの大 きな角閃石多量、2mmの大 きな長石粒少量。 ○灰黄色(2.5Y 5/6)。
	甕	336	○復口17.8 ○残高2.5 ○口縁%残	○体部以下欠損。 ○333と同じ形態。	○333と同じ。	○やや粗い。1mmの大 きな角閃石多量、2mmの大 きな長石粒少量。 ○灰黄色(2.5Y 5/6)。
	甕	337	○復口15.9 ○残高12.0	○336と同じ形態。	○口縁部内外面コナデ調整。 ○体部外表面こまかに叩目、内面右ま わりのケズリ調整。	○やや粗い。1mmの大 きな角閃石、長石粒を含む。

基種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
外 生 土 器	鉢	338	○復口11.8 ○残高4.0 ○口縁劣化	○底部以下欠損。 ○浅い輪状を呈する杯部、口縁部は丸く終る。	○口縁部内外面、横方向の丁寧なヘラミガキ調整。	○精良。こまかなく石粒少 量。 ○にせい褐色(5YR 5%)。 ○他地域産。
	小型鉢	339	○復口11.6 ○残高4.3 ○口縁劣化	○底部以下欠損。 ○深い輪状の像部に凹曲して斜上方にのびる口縁部。端部は丸く終る。	○口縁部、底部、内外面ともナデ調整か、磨滅激しく詳細不明。	○精良。こまかなく石粒少 量。 ○他地域産。 ○褐色(5YR 5%)。
	高杯	340	○残高6.0	○杯部、頭端欠損。 ○脚部跡ではなく、杯底部から斜下方に広がる脚台をもつ。	○脚部、外面へラミガキ。内面ナデ杯部との境に棒の先端による圧痕で両面に4ヶ所の円孔。 ○内面にしづり痕。	○やや粗い。1~2mm大の 長石、石英粒多量。界 母少、角閃石微量。 ○褐色(7.5YR 5%)。
	高杯	341	○復幅22.0 ○残高5.1 ○座11%残	○杯部欠損。 ○内面気味に広がる脚台。底部端は丸く終る。	○底部内外面へラミガキか、磨滅激しく詳細不明。	○精良。こまかなく石粒少 量。 ○他地域産。 ○褐色(7.5YR 5%)。
	高杯	342	○復幅13.2 ○残高1.8	○杯部欠損。 ○底く大きくながる脚台。	○内外面ともナデ調整か、磨滅が激しく詳細不明。	○精良。こまかなく石粒少 量。 ○他地域産。
	高杯	343	○脚幅3.0 ○残高4.3 ○脚柱完存	○脚柱、底部欠損。 ○側面、短い中空の脚柱部から凹曲して、水平に大きく広がる脚部。	○脚柱部外表面、横方向のヘラミガキ、脚柱部方向の丁寧なヘラミガキ。 ○底部内面削毛目(5条/cm)調整。 ○底部に内孔を外側から内面へ穿つ。	○精良。こまかなく石粒少 量。 ○他地域産。 ○褐色(5YR 5%)。
	鉢	344	○復口13.2 ○容高10.7 ○口縁劣化	○小型の器と区別が難しい。 ○口縁部がゆるやかに外反する口縁部がいくつ。端部は丸く終る。 ○端部に凹曲をなす。 ○最大断面が中位より上にあり、脚部は盛り出さない。 ○底部は平底。	○口縁部外表面ヨコナタ、複合研磨面。 ○体部外表面横方向の削毛目(6条/cm)。 ○内面横方向の削毛目調整。 ○底面内面、底盤、及び受けこけが認められる。	○やや粗い。1mm前後の 角閃石、長石粒多量。 ○にせい褐色(7.5YR 5%)。 ○褐色(7.5YR 5%)。
	小型鉢	345	○口縁7.9 ○残高5.8 ○完存	○直線的の外形にゆるやかに外反する口縁部がいくつ。端部は丸く終る。 ○平底の小さな底盤がつく。	○口縁部外表面ヨコナタ。体部外表面のもののか、ナデ上げ。内面、丁寧なナデ調整。	○やや粗い。1mm前後の 角閃石、長石粒多量。 ○にせい褐色(7.5YR 5%)。
	盤	346	○直径8.7 ○残高3.5 ○脚柱完存	○小さな平底の底盤。底部の器壁を0.5cmと薄くつくる。	○底部外表面を左方向のヘラケズリ、 体部外表面は粗い叩目(2.5条/cm)。 内面はナデ調整。 ○内底面にしづり痕。	○良、こまかなく石、界 母少。 ○にせい褐色(7.5YR 5%)。 ○他地域産。

SE 5 第2層 (第52図、図版六十一~六十二)

基種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
外 生 土 器	壺	347	○復口14.8 ○残高3.1 ○口縁劣化	○外反する口縁部に端部はわずかに上方へつまみ上げて面をなす。	○口縁部内外面ナデ調整。 ○口縁部内面に擦痕波状(4条)を1例めぐらす。	○やや粗い。1~2mm大の 長石、石英粒多量。 ○明赤褐色(2.5YR 5%)。 ○他地域産。
	小型壺	348	○口縁8.7 ○残高12.9 ○完存	○小型の球形の体部から短く外反する口縁部をもつ。端部は丸く終る。 ○底部は小さな底盤。かろうじて口立はずするが不安定。	○口縁部内外面ヨコナタ調整。 ○体部上半横方向のヘラミガキ。下半は下から上へ弱いケズリ調整。	○やや粗い。1~2mm大の 長石。1mm前後の長石 多量。こまかなく石閃石、 界母少。 ○明赤褐色(2.5YR 5%)。
	小型壺	349	○口縁11.8 ○残高12.0	○小型の球形の体部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。端部をわずかにつまみ上げ、面をつくる。 ○底部は小さな平底でわずかに凹む。口立はずするが不安定。	○口縁部内外面ヨコナタ調整。 ○体部外表面粗い叩目(2.5条/cm)のものナデ調整を施す。内面ナデ調整。 ○底部内面にしづり痕を残す。	○良、こまかなく石粒多量。 こまかなく石閃石。 ○赤褐色(2.5YR 5%)。
	壺	350	○復口15.4 ○残高8.2	○「く」の字形に既く粗曲外反する口縁部。端部は上方へつまみ上げ、口立つを望す。 ○底部内面に長い縫をもつ。	○口縁部内外面ヨコナタ調整。 ○体部外表面こまかなく叩目(5条/cm)のもの、削毛目(5条/cm)で調節する。 ○内面は右よりのケズリ調整。	○やや粗い。1~2mm大の 角閃石多量。 2~3mm大の 長石、石英粒少少。 ○暗オーリーブ褐色(3.5YR 5%)

石種	岩形	番号	法 型(cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
外 生 器	塊 C1	351	○口径17.2 ○残高3.5 ○口縫完全存	○「く」の字形に近く粗面外反する口縫部、端部は上方へつまり上げ受け状を呈し、端部に1本の浅い沈痕がめぐる。 ○腹部内面に粗い縦溝もつ。	○口縫部内外面ヨコナナデ調整。 ○体部外表面印目(6条/cm)、内面右方向のケズリ調整。	○良、こまかなる角閃石多量、赤い石紋(くきり縞)寡母、長石粒少量 ○暗褐色(7.5YR%?)。
	塊 C1	352	○口径15.2 ○残高4.1 ○口縫完全存	○「く」の字形に近く粗面外反する口縫部、端部は上方へつまり上げ受け状を呈し、端部に1本の浅い沈痕がめぐる。 ○腹部内面に粗い縦溝もつ。	○口縫部内外面ヨコナナデ調整。 ○体部外表面こまかなる印目(7条/cm)、内面は左よりのケズリ調整。	○良、こまかなる角閃石多量、赤い石紋(くきり縞)寡母、長石粒少量 ○黒褐色(2.5YR%)。
	塊 B1	353	○幅12.8 ○残高3.3 ○口縫有残	○幅12.8 ○残高3.3 ○口縫有残	○口縫部内外面ヨコナナデ調整。 ○体部外表面印目(2.5条/cm)、内面ナナデ調整。	○やや粗い。1~2mmの大角閃石多量、寡母、長石粒少量。 ○明赤褐色(7.5YR%)。
	高 杯 C	354	○口径11.8 ○残高7.3 ○長、脚柱脚完全存	○浅い楕状の杯部に細く短い脚柱がつく。 ○脚柱部から側面で広がる脚部がつくと思われる。	○脚部内面裏方向のヘラミガキの跡、ナナデ仕上げ、外面、横方向のヘラミガキ調整。 ○脚柱部、脚部外側ヘラミガキ、腹部内面刷毛目調整。	○粗糲、こまかなる石粒、雲母少量。 ○明赤褐色(2.5YR%)。 ○他地域産。
	小 型 脚 台	355	○口径9.8 ○残高9.3	○浅い皿状の受部に口縫端部をわずかに上方へつまり上げ、面をなす。 ○直線的に雍部がりとなる脚部がつく。	○受部口縫内外面ヨコナナデ。受部・脚部外表面ヘラミガキ、内面ナナデ調整。 ○腹部に外表面から内面へ穿つ4孔の円孔がある。	○粗糲、こまかなる石粒、雲母少量。 ○橙色(2.5YR%)。 ○他地域産。
	脚 杯	356	○残高7.0 ○底部完全存	○底座の底座、底部中央に外面から内面へ向けて、径0.8cmの円孔を穿つ。	○体部下平粗い印目(2.5条/cm)、内面ナナデ調整。 ○底部の部分に粘土相ぎ足した痕跡があり、その上からさらに印目を施して底座は丸くつくっている。	○やや粗い。1~2mmの大長石、寡母、角閃石少量。 ○明赤褐色(5YR%)。
	高 杯 B	357	○口径22.3 ○残高12.8 ○脚柱、脚柱脚完全存	○水平方向にのびる小さな杯部から角度をとめて直線的にのびる口縫部がつく。口縫端部丸く終る。粗部で内外面に脚柱がつく。 ○円筒形の中央の脚柱部。	○口縫、杯部外表面磨苔目のちヘラミガキ、内面ナナデ調整。 ○脚柱部外表面削減が激しく詳細不明ヘラミガキ。内面しばり底。	○やや粗い。1~2mmの大長石、石英粒多量、寡母、赤い石紋(くきり縞)少量。 ○明赤褐色(5YR%)。 ○他地域産。
	上 蓋	358	○底径5.8 ○残高11.5 ○底部完全存	○小さな突出した平底の表面。 ○体部下半は球形。	○底部外表面ナナデ、内底面粗い刷毛目(底体幅1.2cm、条数7条)。 ○体部外表面、内面同様体の刷毛目調整。	○やや粗い。1~2mmの大長石、石英粒多量、こまかなる脚部少量、角閃石微量。 ○灰褐色(10YR%)。 ○他地域産？ ○体部下平に塗が付着。
	底 盤 B	359	○口径15.5 ○器高23.0 ○完全	○「く」の字形に外反する口縫部に腹部は丸く続る。 ○最大部径が体部中位にあり、少し肘状であるが球形化が著しい。 ○底部はわずかに平坦面を残すが、丸底化が著しく、直立はない。	○口縫部内外面ヨコナナデ。 ○体部外表面、左下りの粗い印目(2.5条/cm)を全面に施す。体部下平と接合部分ナナデにより印目を消している。 ○底部外縁まで印目が施される。	○やや粗い。1~2mmの大長石、石英粒多量、こまかなる角閃石、雲母少量。 ○明赤褐色(5YR%)。 ○体部下平全面に漆の付着が著しい。
	底 盤 B1	360	○底径11.4 ○残高21.0	○底部欠損、他の形態は(B)と同じ。	○口縫部内外面ヨコナナデ調整。 ○体部外表面粗い印目(2条/cm)内面ナナデ調整。	○粗い。2~3mmの大角閃石多量、1mmの大長石、石英粒少量。 ○明赤褐色(2.5YR%)。
	底 盤 C1	361	○口径17.2 ○器高22.2 ○完全	○「く」の字形に近く粗面外反する口縫部端部は上方へつまり上げ面をなす。腹部内面に粗い縦溝もつ。 ○腹部はわずかに丸い気味ながら、丸底である。	○口縫部内外面ヨコナナデ調整。 ○体部上半(下り)のこまかなる印目(6条/cm)下部を印目のち刷毛目(底体幅1.2cm、条数6条)で仕上げる。底盤はナナデ調整。 ○体部内面上部は左よりのケズリ下平は下から上のケズリ上げる。	○やや粗い。こまかなる角閃石多量、1~2mmの大長石、石英粒少量。 ○浅灰色(2.5YR%)。 ○体部下平(底部付近をのぞく)に漆の付着が著しい。 ○体部内面下平に黒色の炭化物。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
彌生上器	彌 c1	362	○復116.8 ○残高22.7	○361と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナナ。口縁部外面上に卯目のみ跡あり。口縁部を叩打で叩き出したのにヨコナナで調整する。 ○体部外面細かな卯目(6条/cm)下半は刷毛目+ナナ調整。 ○内面頭部刷毛目。施はケズリ調整。	○良、こまかなる角閃石多量、こまかなる長石粒、雲母少量。 ○に青い黄褐色(10YR 5/6)。
	彌 c1	363	○復116.1 ○残高11.6	○361と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナナ調整。体部外面卯目のうち刷毛目調整。内面右まわりのヘラケズリ調整。	○良、こまかなる角閃石多量、こまかなる長石粒、雲母少量。 ○浅黄色。
	彌 c1	364	○復115.3 ○残高11.2 ○口縁劣残	○体部下欠損。 ○361と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナナ。 ○体部外面左下に卯目(6条/cm)体部内面、右まわりのケズリ調整。	○稍良、こまかなる角閃石多量、雲母、石英少量。 ○黒褐色(2.5YR 5/6)。
	彌 m1	365	○口縁32.1 ○残高27.7 ○完全	○大型の直口部。 ○頗く斜上方に開く直口の口縁部。 ○最大幅径が体部中央にある球形の体部。 ○底部はわずかに突出し、比較的しっかりした平底。	○口縁部内外面ヨコナナ。外表面の刷毛目(原体幅1.05cm、高さ7.5mm)。 ○体部内面、板状工具によるナナつげ、外表面の上半と底部付近に卯目(6.5条/cm)を残す。外表面下半は刷毛目(原体幅同じ)で卯目の上から調整し、下半は板状工具で軽くケズリのように下から上へナナつげる。	○やや粗い。2~3mm大の長石粒多量、こまかなる石英、雲母少量。こまかなる角閃石微量。 ○明褐色(7.5YR 5/6)。 ○底部をのぞく体部下半に漆付着がある。

S E 6 (第54図、図版六十二)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
彌生土器	彌	366	○底径5.0 ○残高5.2 ○底溝完全	○わずかに突出する小さな平底の底部。 ○底部中央は凹む。	○体部下半外面向リマキキ、内面ナナ調整。	○やや粗い。1~2mm大の角閃石多量、雲母、石英较少。 ○褐色(10YR 5/6)。
	彌	367	○底径5.0 ○残高5.0 ○底溝完全	○突出部はなく、中央部が凹む平底の底部。	○体部下半外面向リマキキ。 ○内面ナナ調整。	○やや粗い。こまかなる角閃石多量、2~3mm大の長石粒少量。 ○明褐色(7.5YR 5/6)。
	高杯	368	○残高6.2 ○脚柱完全	○細い中央部の脚柱より角度をかけて、水平方向に広がる脚柱部をもつ。	○脚柱部、横方向へのリマキキ、脚柱部リマキキ。底部内面ナナ調整。	○稍良、こまかなる石粉少 量。 ○明褐色。 ○地痕産。
	彌	369	○残高19.9	○口縁・底部欠損。 ○最大幅径が体部中央より下位にあるふぶくれの底。	○体部外面向リマキキ、内面ナナ調整。内面に粘土練の接合痕跡。(粘土練幅1.0cm)	○やや粗い。1~2mm大の角閃石、長石粒多量、雲母、石英较少。 ○褐色(7.5YR 5/6)。 ○367と同一個体か?

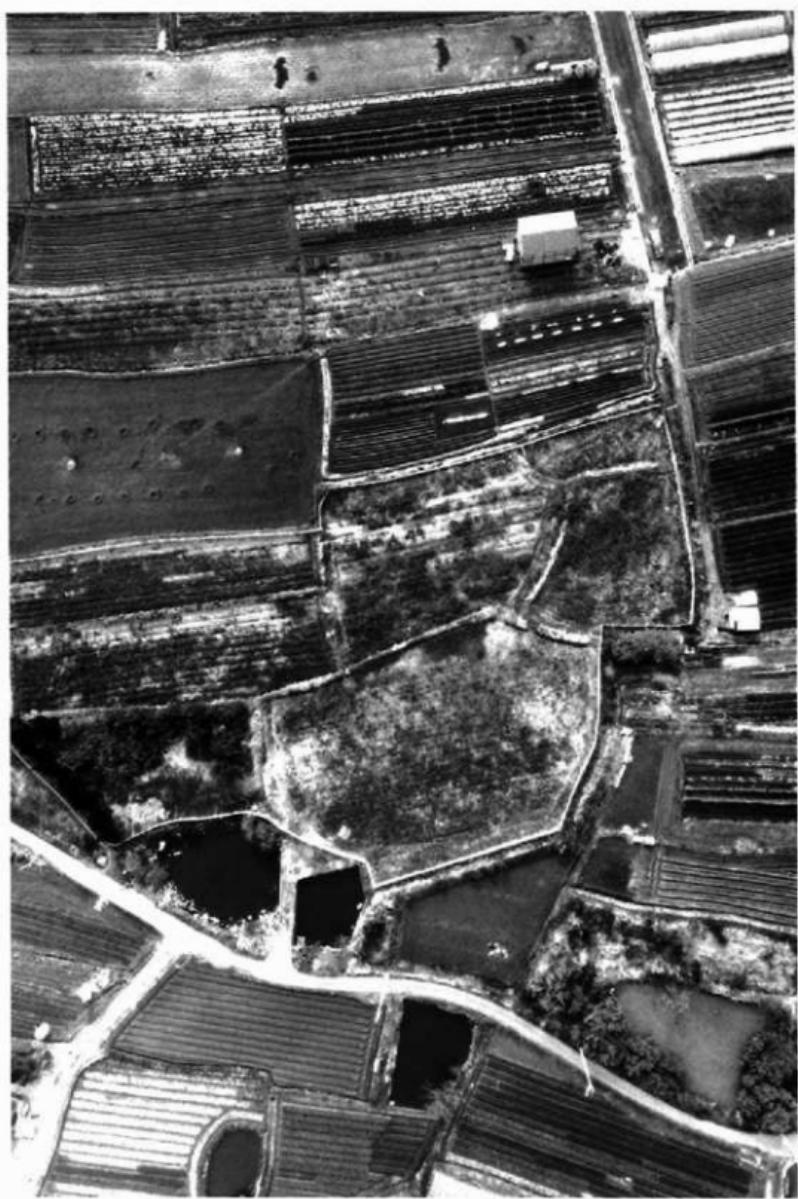
包含層 (第55図、図版六十四)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
彌生	彌 d	370	○復115.0 ○残高5.2 ○口縁劣残	○球形の体部から「く」の字形に近く組成し、外表面の口縁部が「く」。 ○口縁部は内方に丸く肥厚する。	○口縁部外面ナナ、内面刷毛目(7条/cm)。 ○体部外面向リマキキ。内面は脚柱から少し引かれたところから、右まわりのケズリ調整。	○やや粗い。1mm前後の石粒多量、雲母少量。 ○に青い褐色(7.5YR 5/6)。 ○地痕産。
上器	彌 d	371	○復116.8 ○残高4.3 ○口縁劣残	○(1)と同じ形態。	○(1)と同じ技法。	○(1)と同じ。 ○(1)と同一個体と思われる。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
甕	甕 Co	372	○復口17.0 ○残高3.6 ○口縁劣残	○「く」の字形に既く口縁部外反する口縁部。 腹部はわずかに上方へつまみ上げ、面をなす。	○口縁部内外面ヨコナナ調整。 ○体部外面明日のち、ナナ調整。 内面右左まりのケズリ調整。	○やや粗い。1cm前後の 石粒多量。赤い石粒。 (くさり端)少量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	甕 n	373	○復口15.2 ○残高3.2 ○口縁劣残	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は面をもって終る。	○口縁部内外面ヨコナナ調整。 ○体部外面明日、内面ナナ調整。	○やや粗い。1cm前後の 長石、石英粒多量。 云々、角閃石少量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	甕 h ₁	374	○復口15.4 ○残高7.3 ○口縁劣残	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終る。	○口縁部内外面ヨコナナ調整。 ○体部外面明日のちナナ調整。 内面ナナ調整。	○やや粗い。1~2mmの大 の角閃石多量。長石、石 英粒少量。 ○褐色(10YR 5%)。
	甕 h ₂	375	○復口23.2 ○残高5.6	○大型の二重口縁部。 ○外反する口縁部で端部は面をもって終る。 ○外縁の粗面部で段をもつ。	○口縁部内外面ヘラミガキ調整。 ○口縁部は僅2cmの円形浮文(十竹 置文)を施すが凹陽は不明。 ○口縁部端部で段をもつ。	○やや粗い。1~3mm人の 石粒多量。こまか な石英粒、角閃石少量。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
	甕 h ₃	376	○復口16.6 ○残高2.4 ○口縁劣残	○加飾する蓋。 ○外反する口縁部で端部を下方 に延張する。	○口縁部外縁、竪方向のヘラミガキ。 内面横方向のヘラミガキ調整。 ○口縁端部に波状文を施したち に僅1cmの円形浮文(十竹置文) を4~5mm間隔を施す。 ○口縁部内面にも波状文を施す。	○やや粗い。1~2mm人の 石粒多量。角閃石、 石英粒、雲母少量。 ○褐色(7.5YR 5%)。 ○谷合の口縁部の可能性 がある。
	甕 a	377	○残高7.3	○中期の壺頸部片。	○壺頸部に横幅直線文(9条)を3 条施す。内面ナナ調整。	○やや粗い。1~2mmの大 の角閃石多量。こまか な長石粒多量。 ○に近い黄褐色 (10YR 5%)。
生	小型鉢	378	○復口18.2 ○残高4.3 ○口縁劣残	○すり鉢状の体部にわずかに外 反する口縁部がつく。 腹部は丸く終る。	○磨擦が激しく詳細不明。	○やや粗い。1~3mm人の 長石、石英粒多量。 ○褐色(10YR 5%)。 ○他地域。
	小型丸底盤	379	○復口9.4 ○残高5.7 ○口縁劣残	○球形の体部にわずかに外 反する口縁部がつく。 腹部は丸く終る。	○口縁部内外面ヨコナナ調整。 ○体部外縁、崩毛目のみのちヘラミガ キ調整。 ○内面右左まりの弱いケズリ調整。	○やや粗い。1~2mm人の 石英粒多量。こまか な長石粒少量。 ○に近い黄褐色 (10YR 5%)。 ○他地域。
	甕	380	○残高3.4	○加飾する壺頸部片。	○壺頸部外面に波状文(6条)を施 したのち、密着して直線文(同 版体)を施す。 ○内面ナナ調整。	○やや粗い。1cmの大 の角 閃石多量。 1~3mmの大 の長石粒。 ○明赤褐色(5YR 5%)。
器	鉢	381	○底径2.4 ○残高1.6 ○底部完存	○底部中央に内面から外側に凹 孔(径0.6cm)を穿つ。	○体部下半外面明日、内面ナナ調整。	○やや粗い。1~2mmの大 の角 閃石多量。 ○に近い黄褐色 (10YR 5%)。
	壺	382	○底径4.6 ○残高2.9 ○底部完存	○突出した平底の底部。	○底部、体部下半明日のちナナ調 整を施す。内面ナナ、内底面にし はり底。	○やや粗い。1~2mm人の 長石粒、こまか な角 閃石多量。 ○褐色(7.5YR 5%)。
	甕	383	○底径3.9 ○残高2.5 ○底部完存	○平底の底部。	○底部外縁、明日のちナナ仕上げ 内面ナナ、しづり痕残す。	○やや粗い。こまか な石 粒、内面石多量。 ○褐色(10YR 5%)。
	鉢	385	○底径3.3 ○残高4.2 ○底部完存	○小さな平底の底部。 ○底部中央に外側から内面に僅 0.6cmの凹孔を穿つ。	○体部下半外面明日(2.5条/cm)、内 面ナナ調整、しづり痕残す。	○やや粗い。こまか な角 閃石多量。長石粒少 量。 ○褐色(10YR 5%)。
	壺	386	○底径4.8 ○残高3.2 ○底部完存	○突出した平底の底部。	○底部、体部下半外面ヘラミガキ、 内面ナナ調整。しづり痕残す。	○やや粗い。1~2mmの大 の長石粒、雲母多量。こ まか な角 閃石少 量。 ○褐色(10YR 5%)。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
浮生器	甕	387	○底径4.7 ○残高2.5 ○底部完存	○突出した平底の底部。	○底部外面叩目、内面ナナ子調査。	○良、こまかなく角閃石、石英少量。 ○にほい黄褐色(10YR 5%)。	
	甕	388	○底径3.1 ○残高1.8	○突出し、少し丸底傾向の底部。	○底部外面叩目、内面ナナ子調査。	○やや粗い、1~2mm大の長石、角閃石含む。 ○にほい黄褐色。	
	甕	389	○底径3.3 ○残高2.4	○突出した平底の底部。	○底部外面叩目、内面ナナ子調査。 ○内底面にしばり痕を残す。	○やや粗い。1~3mm大の長石、角閃石を含む。 ○褐色(7.5YR 5%)。	
	甕	390	○底径3.4 ○残高1.2	○突出した平底の底部。 ○底部の中央が凹む。	○底部外面叩目、内面ナナ子調査。	○やや粗い。角閃石・雲母を多量に含み、2~3mm大の長石較少量。 ○にほい黄褐色(10YR 5%)。	
	甕	391	○底径3.6 ○残高1.5 ○底部完存	○小さな平底の底部。 ○底部中央が浅く凹む。	○底部外面叩目(3.5条/cm)、内面ナナ子調査。	○やや粗い。1~2mm大の角閃石多量。石英少量。 ○にほい黄褐色(10YR 5%)。	
	甕	392	○底径4.0 ○残高2.0 ○底部完存	○小さな平底の底部	○底部外面水端まで叩目。底部内底面にしばり痕	○やや粗い。1~2mm大の角閃石、長石、石英较多量。 ○褐色(7.5YR 5%)。	
	高杯	393	○残高7.4 ○脚柱完存	○杯部、南部欠損。 ○中空の細長い脚柱部	○脚柱部外面へラミガキのち、ナナ子調査、内面ナナ子調査。	○精良、こまかなく角閃石少量。 ○にほい橙色(7.5YR 5%)。 ○他地域産。	
	高杯	394	○底径11.0 ○残高6.0 ○脚柱欠損	○杯部欠損。 ○杯部から内空氣味に広く、断面がつく。断部に外側から内面へ穿つ孔孔4ヶ所。	○脚柱部外面へラミガキ、内面ナナ子調査。	○良。1mm前後の角閃石多量。長石、石英较少量。 ○褐色(10YR 5%)。	
	高杯	395	○残高7.0 ○脚柱完存	○杯部、南部欠損。 ○中空の細長い脚柱部。	○脚柱部外面ナナ子調査、内面ナナ子調査。	○精良、こまかなく角閃石少量。 ○褐色(7.5YR 5%)。 ○他地域産。	
	高杯	396	○残高6.0 ○脚柱完存	○杯部、南部欠損。 ○円筒形の脚柱部から角度をかけて水平方向に広がる縦部。 ○脚柱部に径1cmの孔があく中空の脚柱。	○脚柱部外面へラミガキのち、ナナ子調査。脚部内面ナナ子調査。	○やや粗い。1mm前後の長石、石英较少量。雲母少量。 ○にほい橙色(7.5YR 5%)。 ○他地域産。	
	高杯	397	○底径15.9 ○残高7.3 ○脚柱欠損	○杯部欠損。 ○短い中空の脚柱部から角度をかけて内空氣味に水平方向に広がる縦部。 ○断部に孔孔を穿つ。	○脚柱部外面へラミガキのち、ナナ子調査。脚部内面ナナ子調査。	○脚柱部外面へラミガキのち、ナナ子調査。内面刷毛目のナナ子調査。	○やや粗い。2~3mm大の長石粒、こまかなく黄褐色多量。 ○橙色(7.5YR 5%)。 ○他地域産。
	高杯	398	○底径15.6 ○残高5.8 ○脚柱欠損	○杯部欠損。 ○太く短い脚柱部からなだらかに広がる縦部。 ○断部は面をもととれる。	○脚柱部外面縦方向へラミガキ、内面ナナ子調査。 ○断部に外側から内面へ4ヶ所の孔孔を穿つ。	○やや粗い。1~2mm大の角閃石多量。1mm大の長石粒、雲母少量。 ○赤褐色(5YR 5%)。	

図 版



昭和60年撮影

圖版二 土層斷面



1. 調査地中央部断面



2. 調査地東端断面



1. 鉄振削前の状況



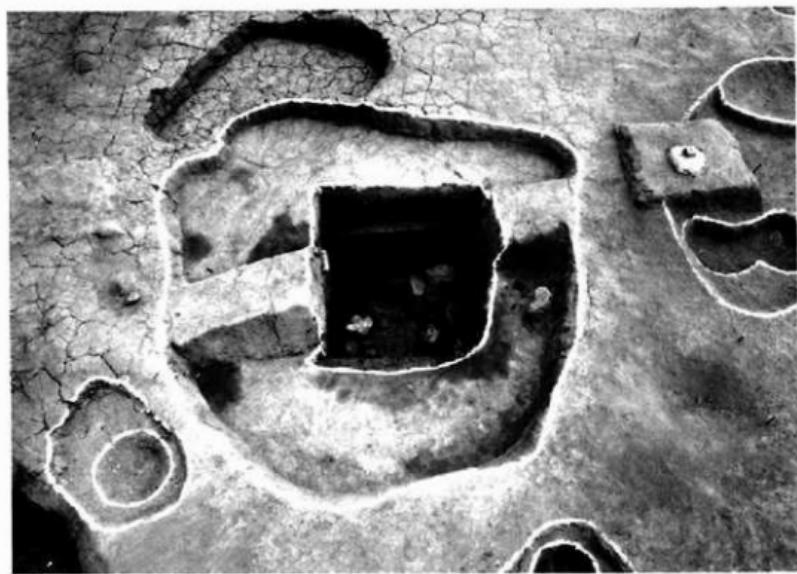
2. 鉄検出状況



1. SK 5 上器出土状況



2. SK 6 上器出土状況



1. S E 2 上部検出状況



2. S E 2 上部検出状況



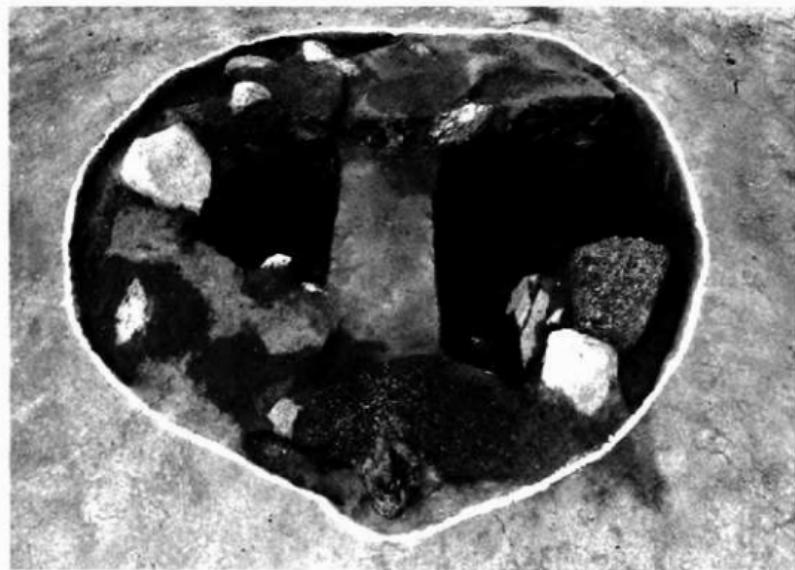
1. S E 2 井戸枠組み合わせの状況



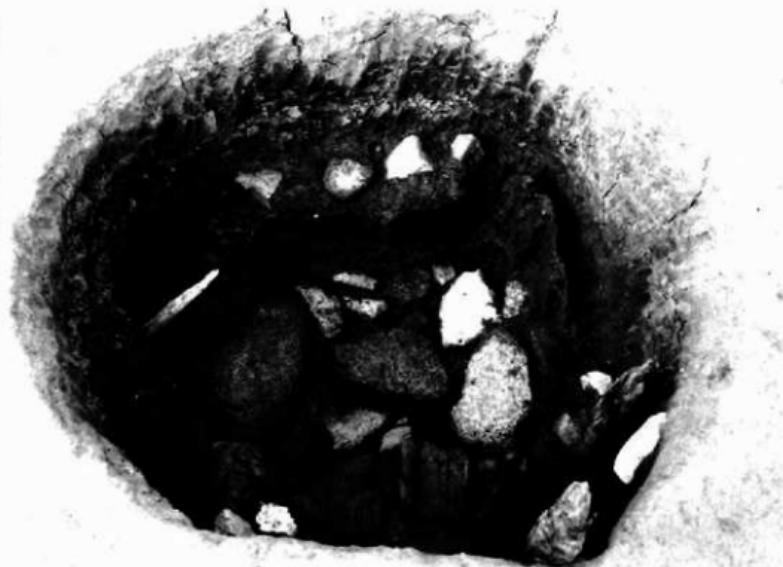
2. S E 2 最下部検出状況



1. SE 3 と複層検出状況



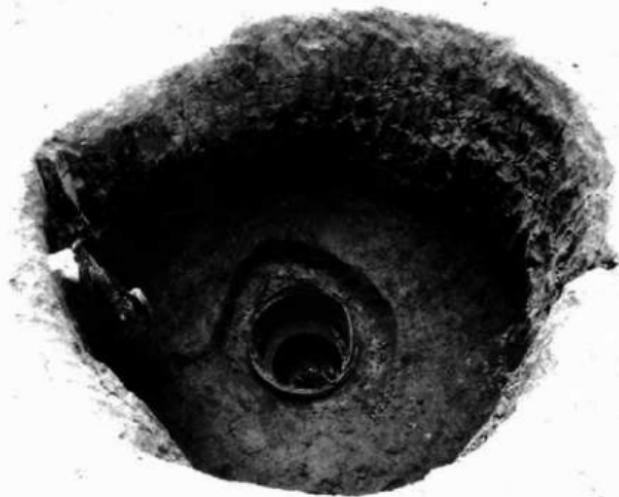
2. SE 3 上部構造検出状況



1. S E 3 下部構造検出状況



2. S E 3 下部構造検出状況



1. S E 3 最下部検出状況

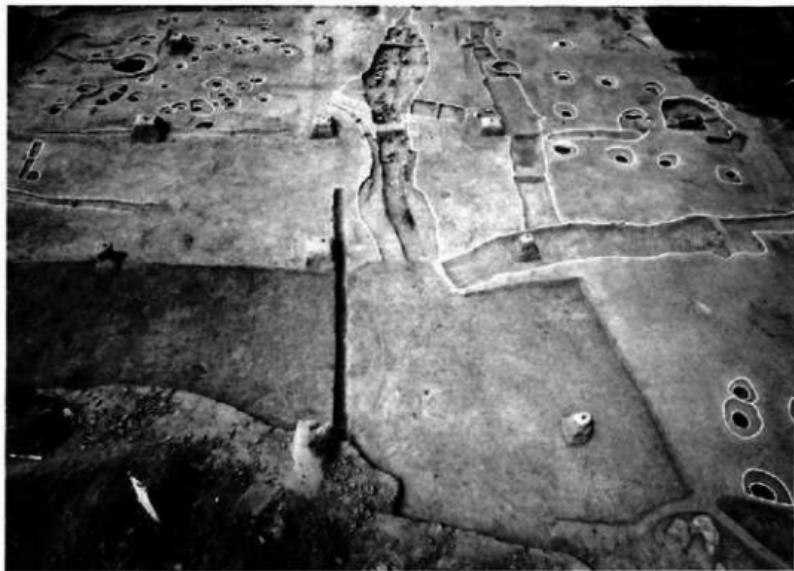


2. SK 3 土器出土状況

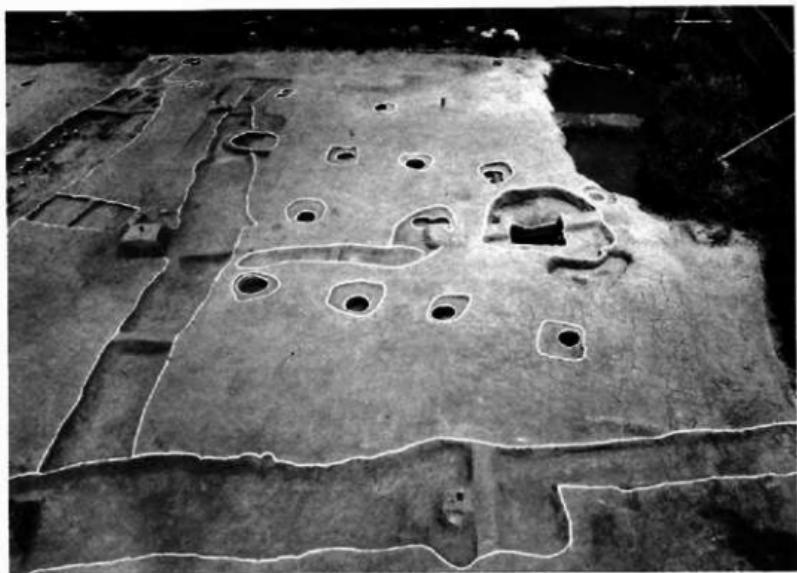
図版十 古墳時代の遺構



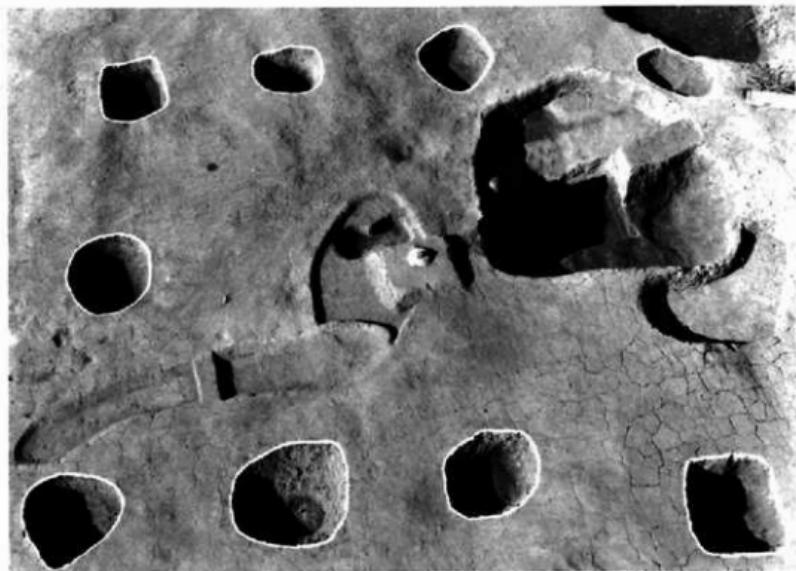
1. 遺構全景 振削前の状況



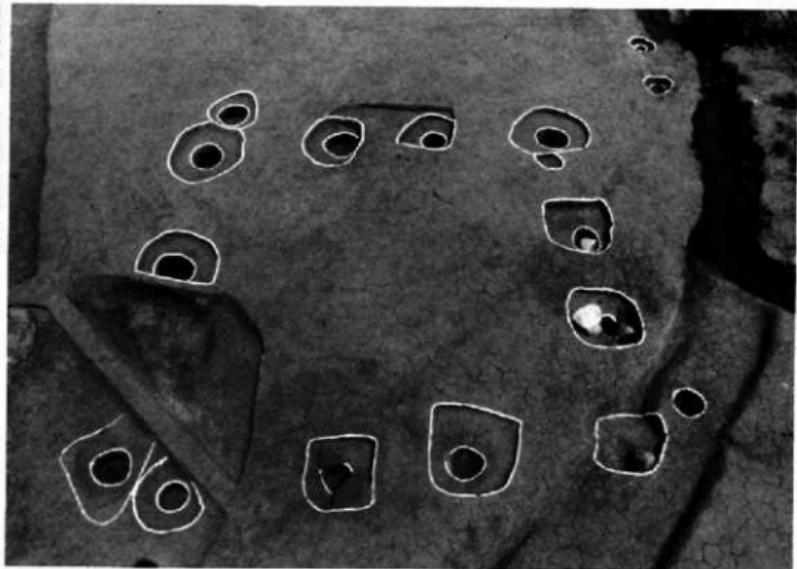
2. 遺構全景 検出状況



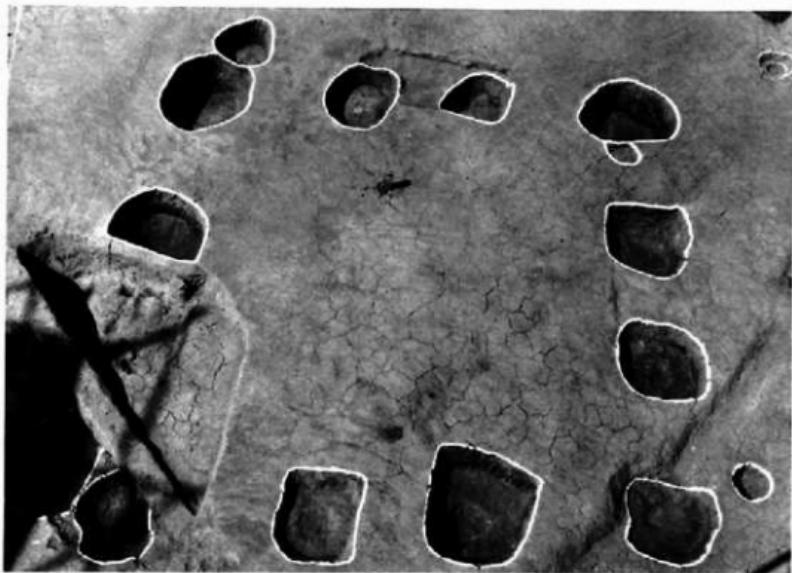
1. SD65、SD67、SB1 検出状況



2. SB1 完整状況

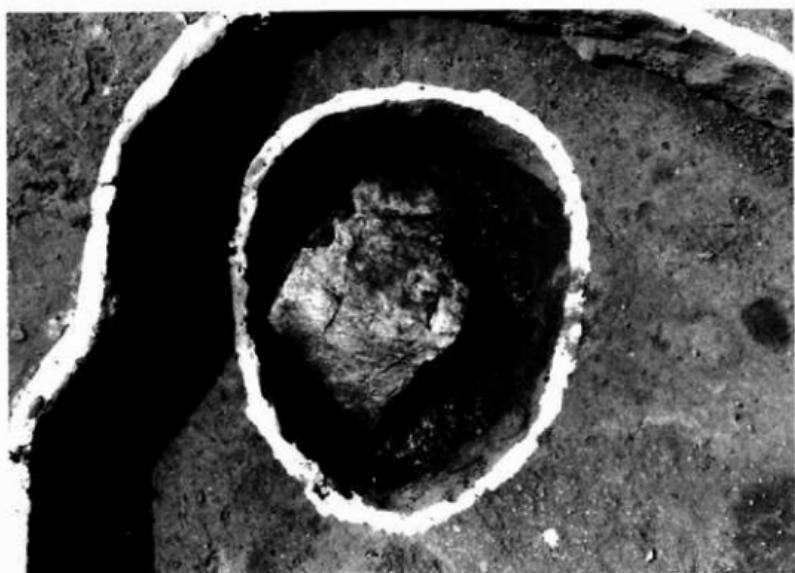


1. SB 2 検出状況

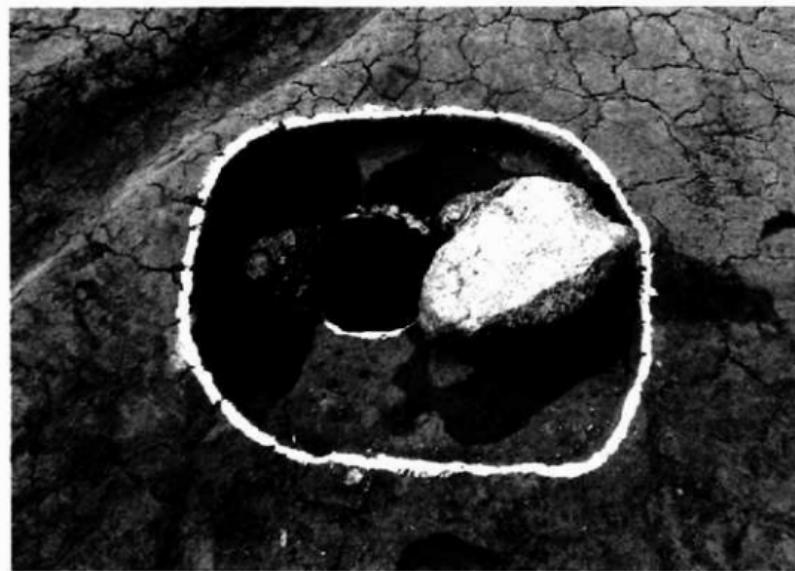


2. SB 2 検出状況

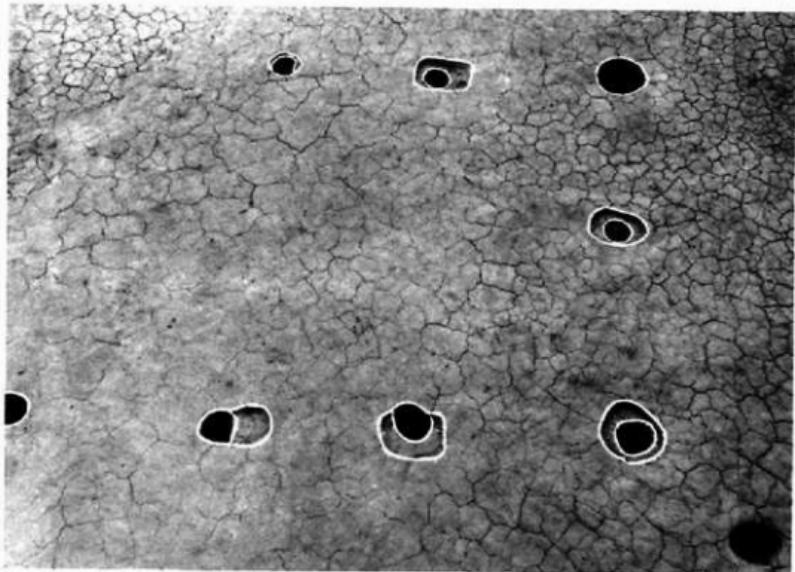
図版十三 古墳時代の遺構



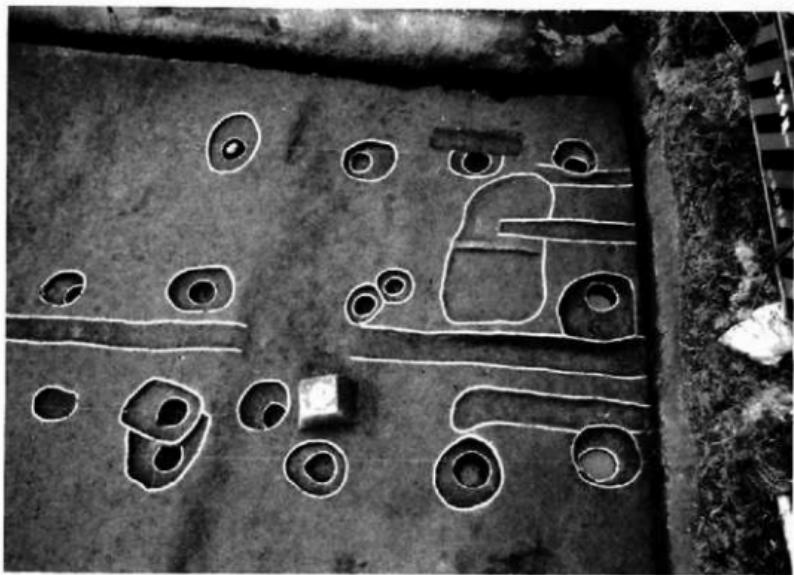
1. SB 2 の根石 検出状況



2. SB 2 の根回り石 検出状況



1. S B 3 検出状況



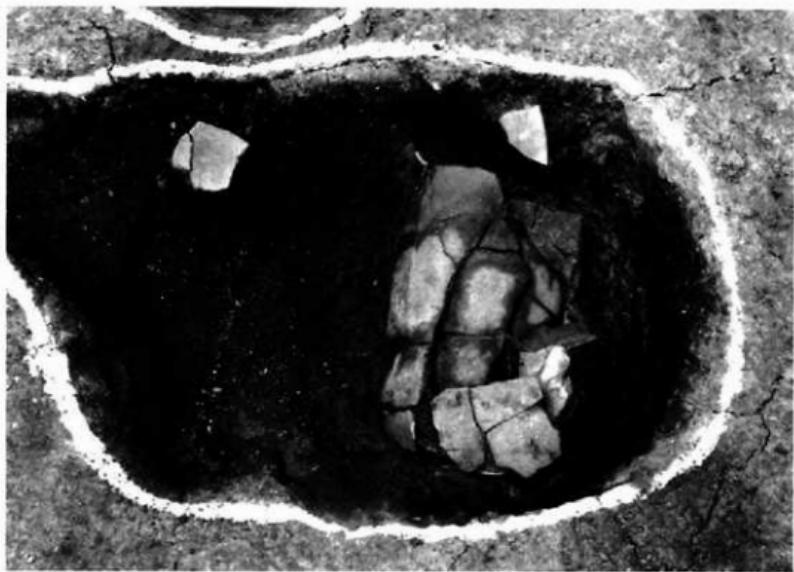
2. S B 4 検出状況



1. SK25 土器出土状況



2. SK25 土器出土状況



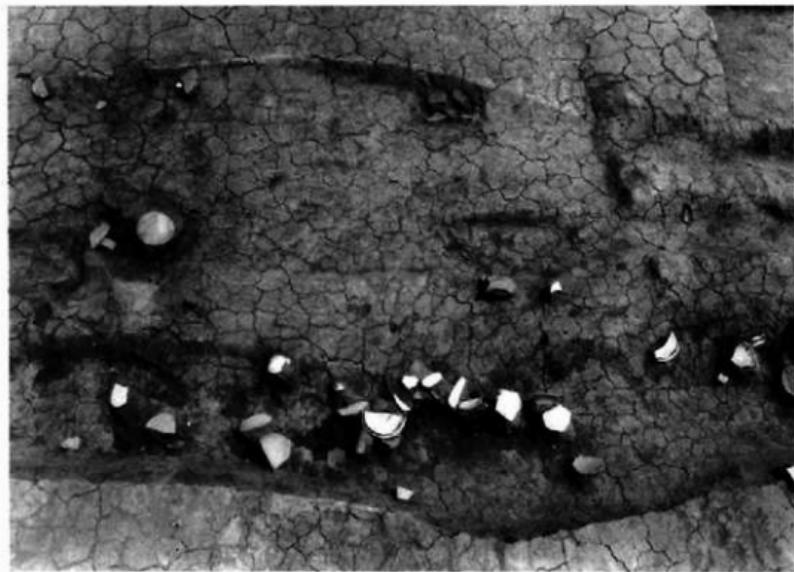
1. SK26 器出土状況



2. SK26 発掘状況



1. SD65 石器出土状況

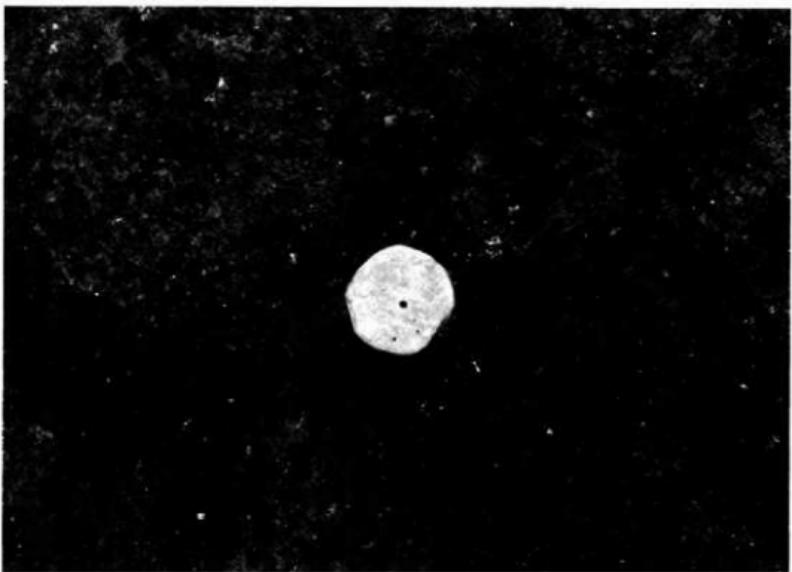


2. SD65 石器出土状況

図版十八 古墳時代の遺構



1. NR2 检出状況



2. 第5精内有孔円板出土状況

図版十九 弥生時代の遺構



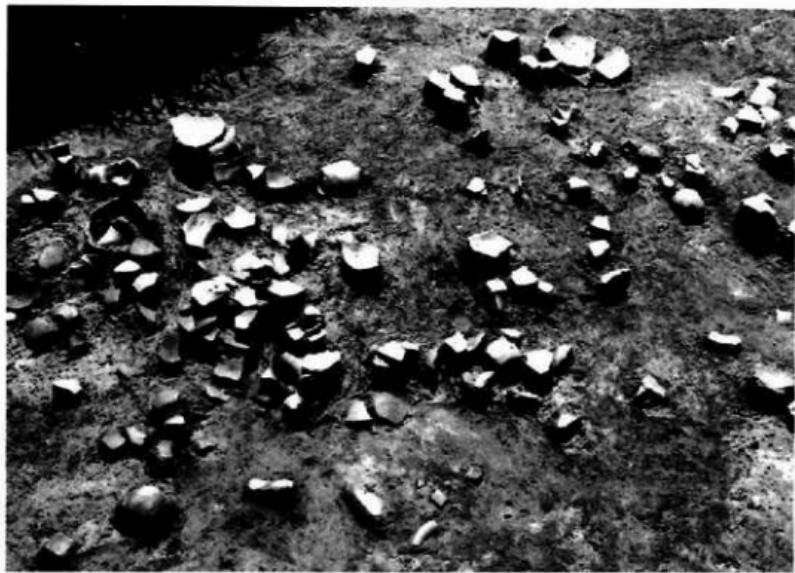
1. SD78 検出状況



2. SD78 完掘状況



1. SD78 完掘状況



2. SD78 土器出土状況



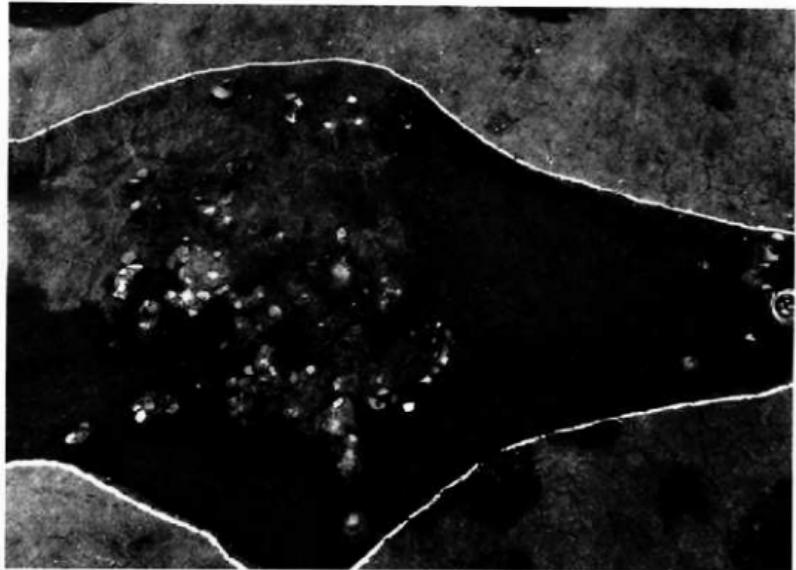
1. S D78 土器出土状況



2. S D78 土器出土状況



1. SD80 完整状況



2. SD80 上器出土状況



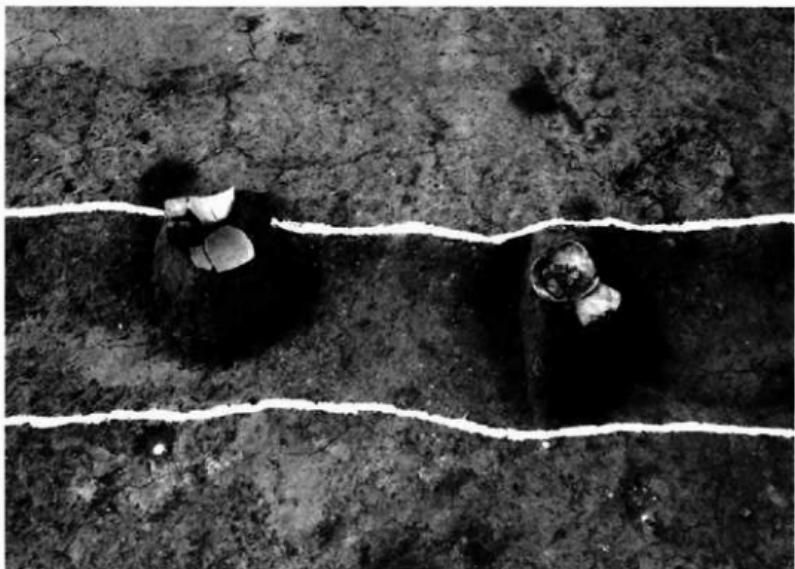
1. S D81・82 完掘状況



2. S D81・82 完掘状況



1. S D83 土器出土状況



2. S D83 土器出土状況

図版二十五 弥生時代の造構



1. S D83 完整状況



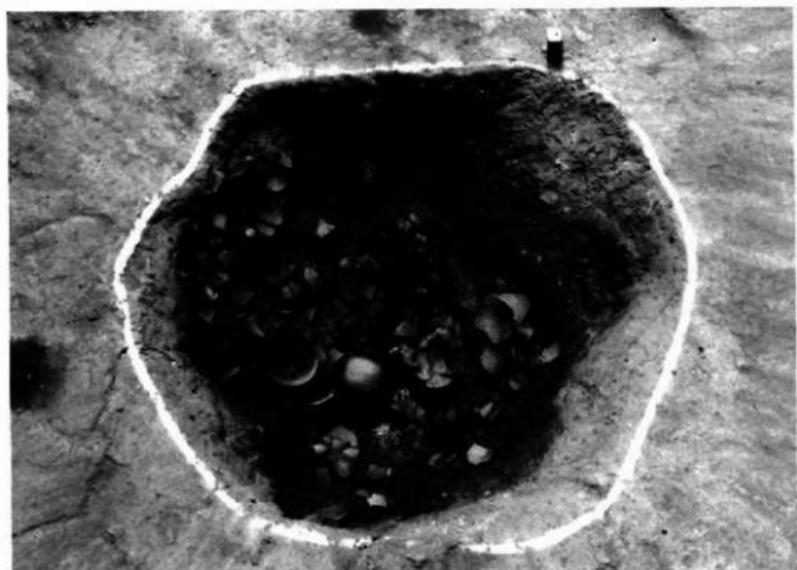
2. S D83 完整状況



1. S E 5 第1層土器出土状況



2. S E 5 第2層土器出土状況



1. SE 5 第2層土器出土状況



2. SE 5 第2層土器出土状況



1. S E 5 最下層土器出土状況



2. S E 5 完整状況



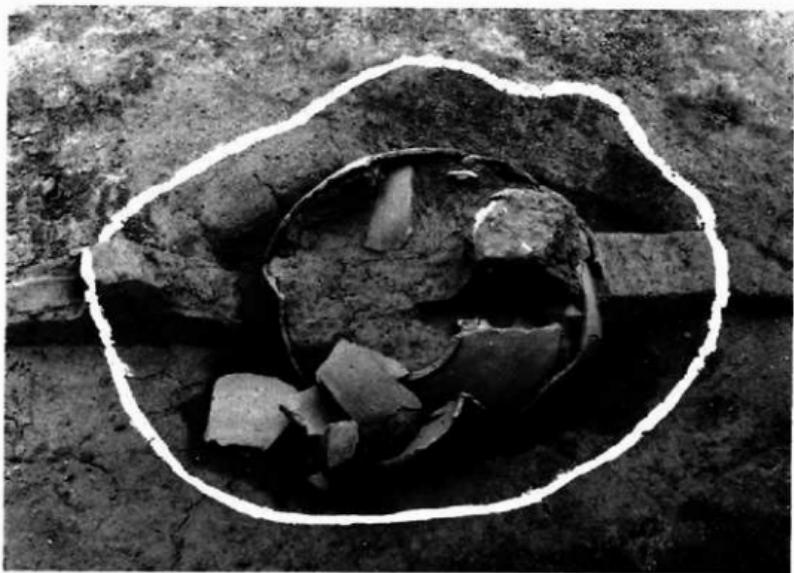
1. 遺構全景



2. SE 6 完掘状況



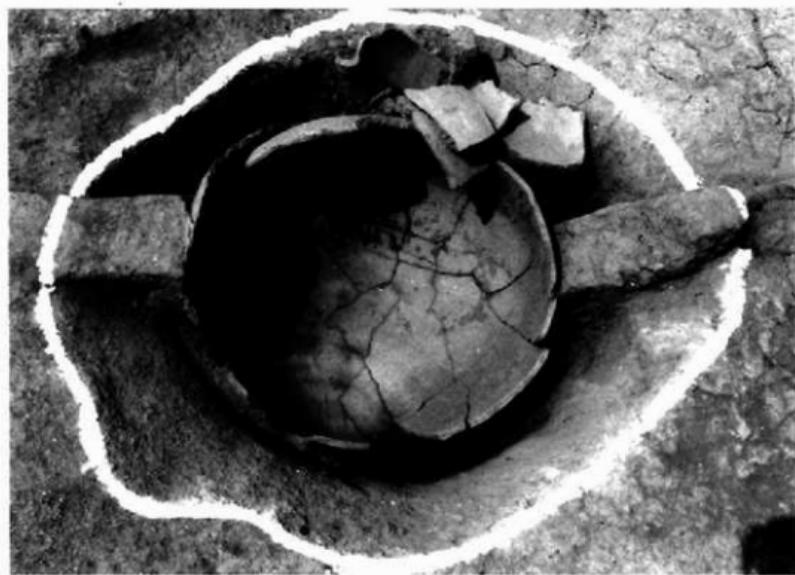
1. 壺棺 1・2・3 全景



2. 壺棺 1 検出状況



1. 壺棺1 内部の状況



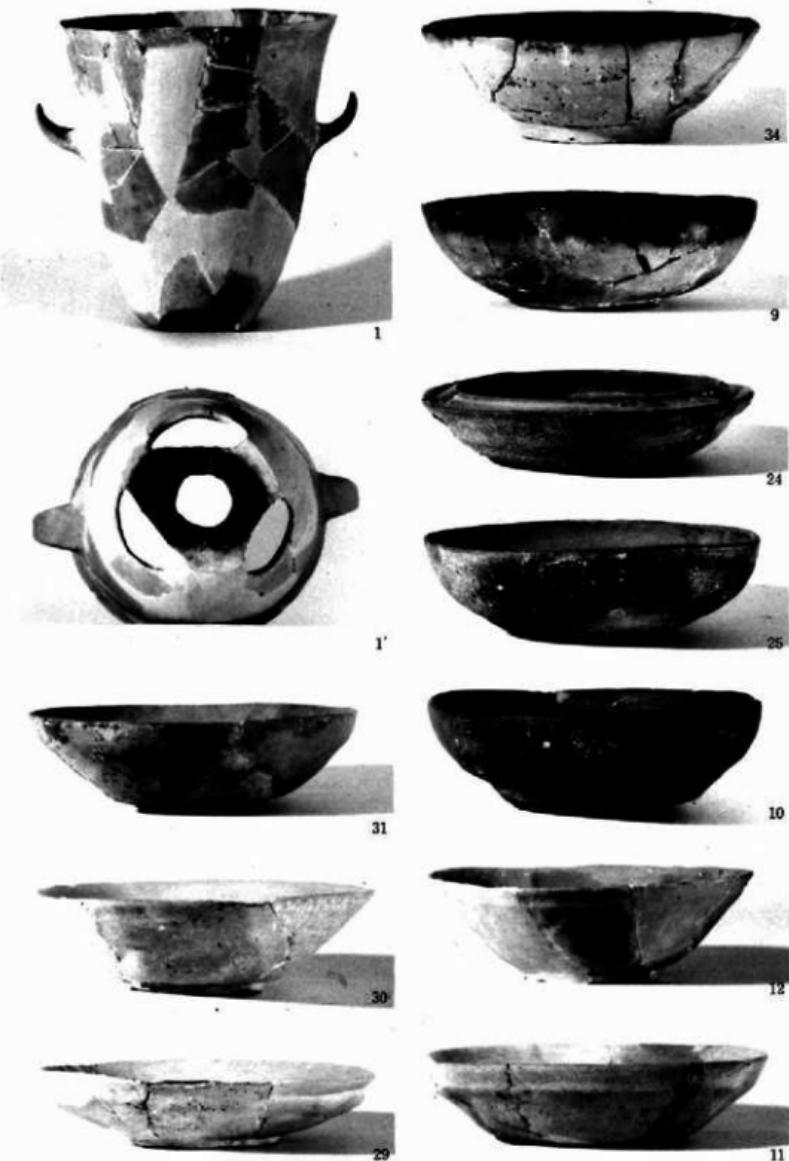
2. 壺棺1 完掘状況



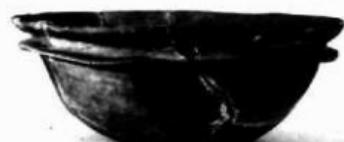
1. 壺棺 2 検出状況



2. 壺棺 2 内部の状況



S K 3 土師器瓶(1) S K 5 黑色土器碗(8) 須惠器杯(10) 土師器杯(11) 碗(12) S K 6 須惠器杯(24, 25)
S E 2 土師器杯(29) 碗(30, 31) S E 3 黑色土器碗(34)



17



27



18



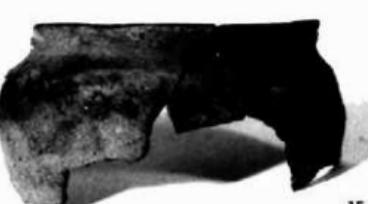
20



14



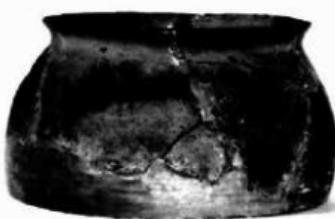
23



15



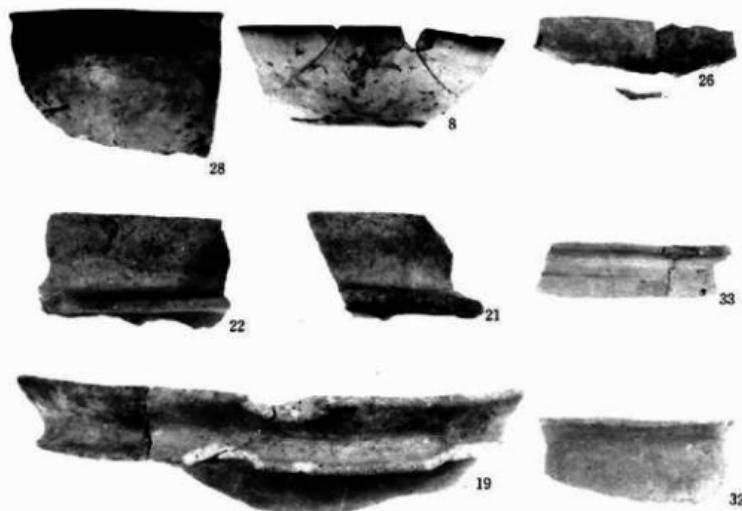
13



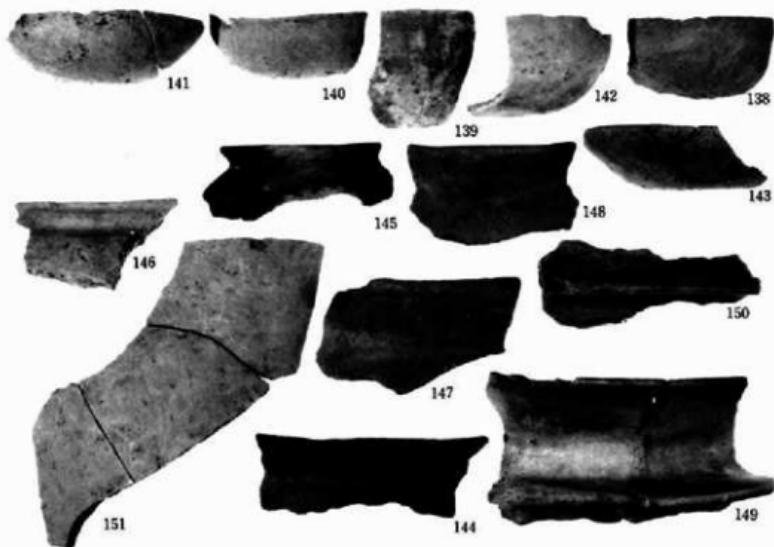
16

S K 5 羽釜(17~18~20) 梶(23) 壺(13~16) S K 6 壺(27)

圖版三十五 黑色土器・土師器・須惠器



1. SK 5 黑色土器碗(8) 羽釜(19,21,22) SK 6 土師器杯(26) SE 2 黑色土器鉢(28) 鉢(32)
SE 3 須惠器鉢(33)



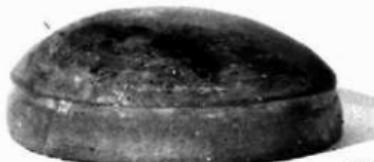
2. 第4層土師器杯(138~143) 鉢(144~148) 羽釜(149,150) 盆(151)



1



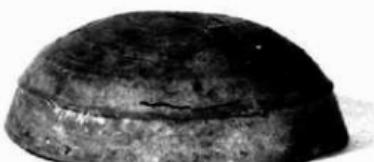
35



36



38



3



44



40



4

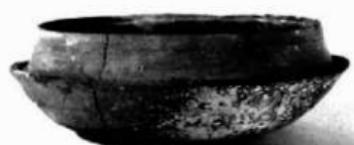
NR 1 土師器鉢(3) NR 2 須恵器杯蓋(35,36,38,40) 壺(44) 土師器壺(イ)



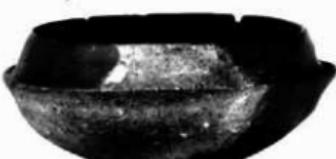
62



59



58



63



70



67



69



60



68



64

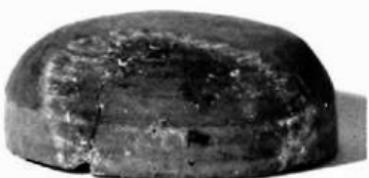
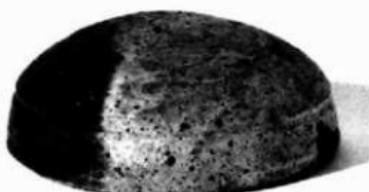


65



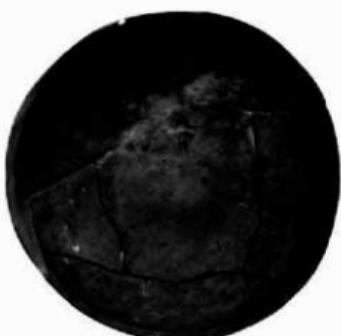
61

圖版三十八
須惠器・土師器



S D 65 須恵器杯蓋(53~57) 高杯(71) 土師器杯(73) 茗(74) 壺(75)

圖版三十九 須惠器・土師器

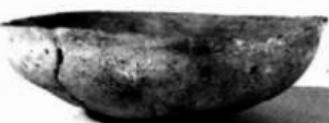


104



106

103



97



99



96



78



79



109

S D67 須恵器杯蓋(78,79) 土師器杯(96,97,99) 高杯(103,104,106) 羽釜(109)



91



90

S D67 提瓶



193



88



89



195



194

S D67 蘭(88,89) 第5層蘭(193,194) 塵(195)

圖版四十二
須恵器・土師器



111



2



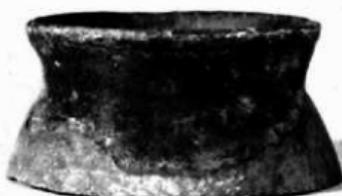
112



52



107



108

S K26 土師器羽釜(2) ピット 壺(52) S D67 壺(107) 壺(108) S K25 須恵器高杯(111) 壺(112)



116



118



114



117



113



115

圖版四十四 漢式系土器・土師器



122



119



120



123



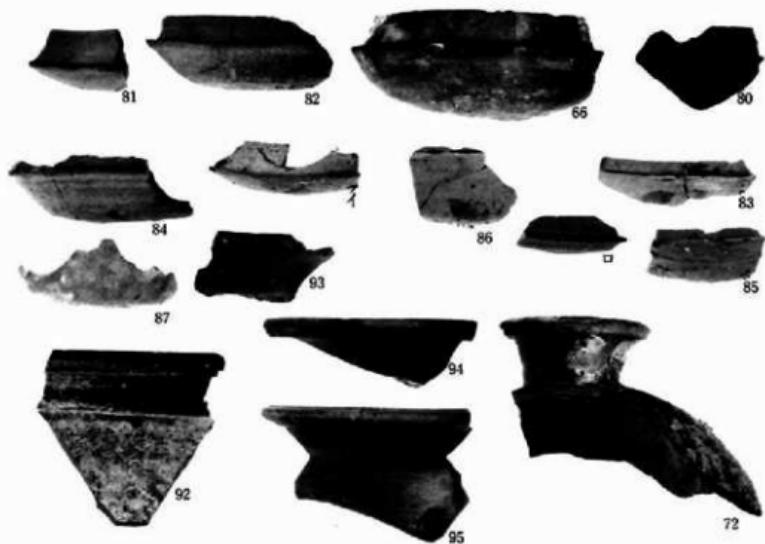
121



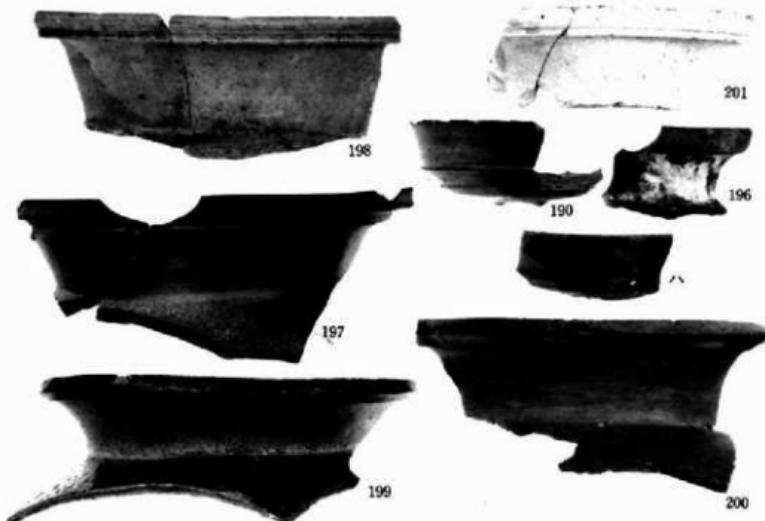
124

S K25 漢式系土器壺、土師器杯、壺、鉢

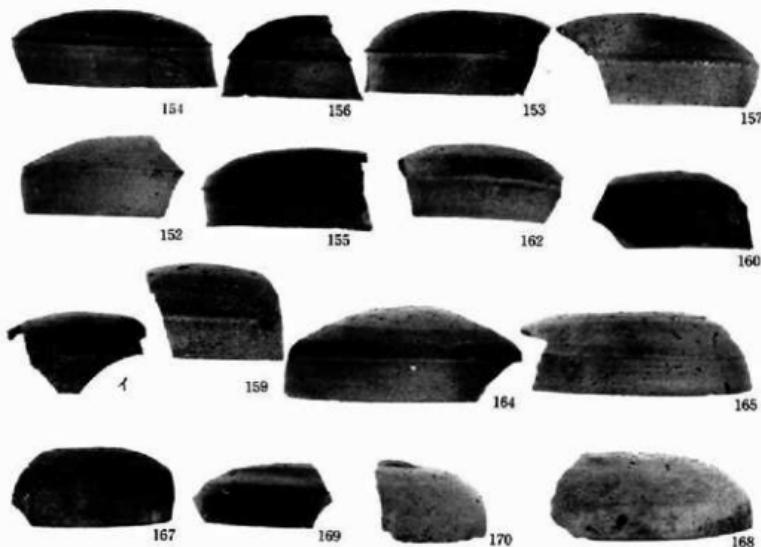
図版四十五
須恵器



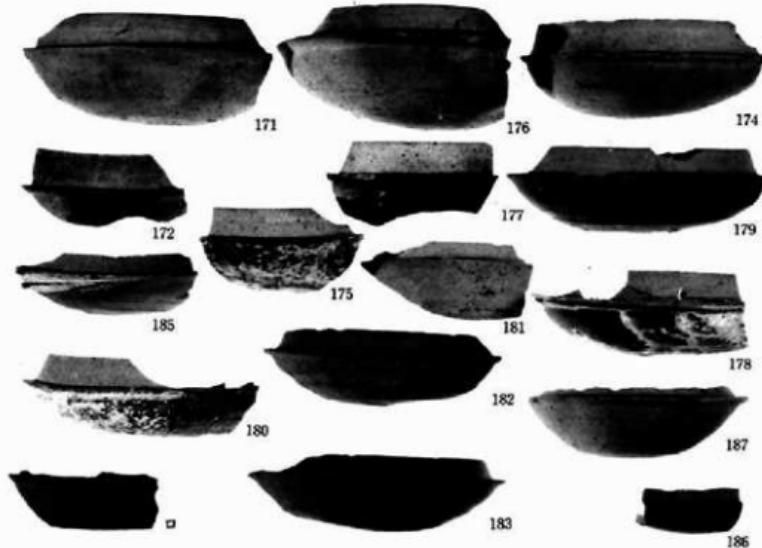
1. S D65 杯身(66) 提瓶(72) S D67 杯身(80~87、1、口) 壺(92~95)



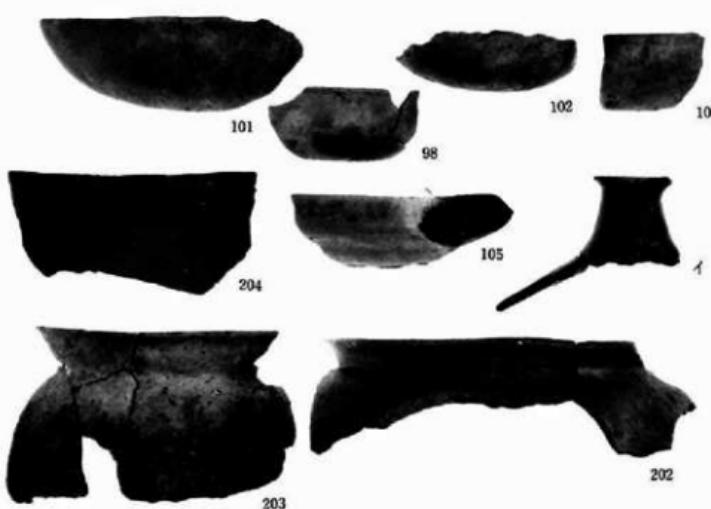
2. 第5層 壺



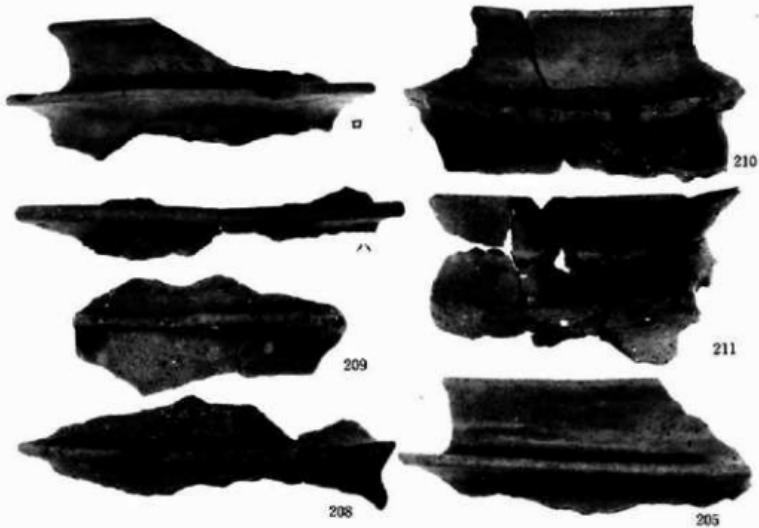
1. 第5層 杯蓋



2. 第5層 杯身



1. S D67 杯(98,100~102) 高杯(105). 第5層 壺(202~203) 高杯(1)



2. 第5層 瓦釜



イ



188



212



133



191

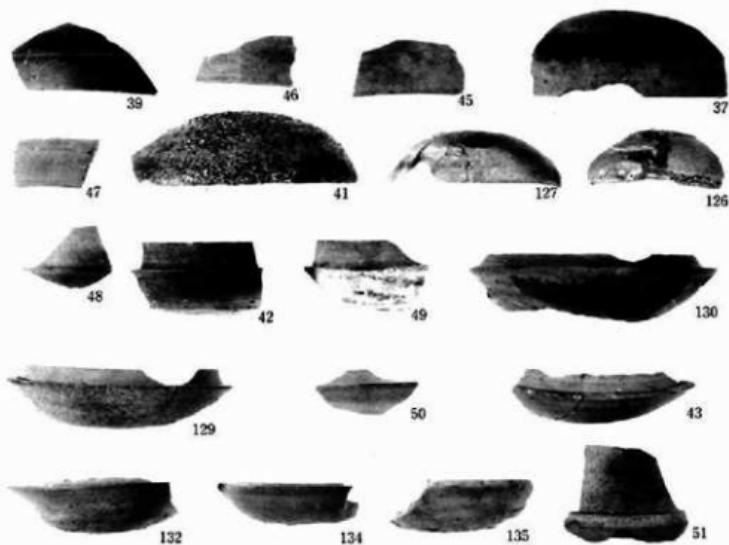


137

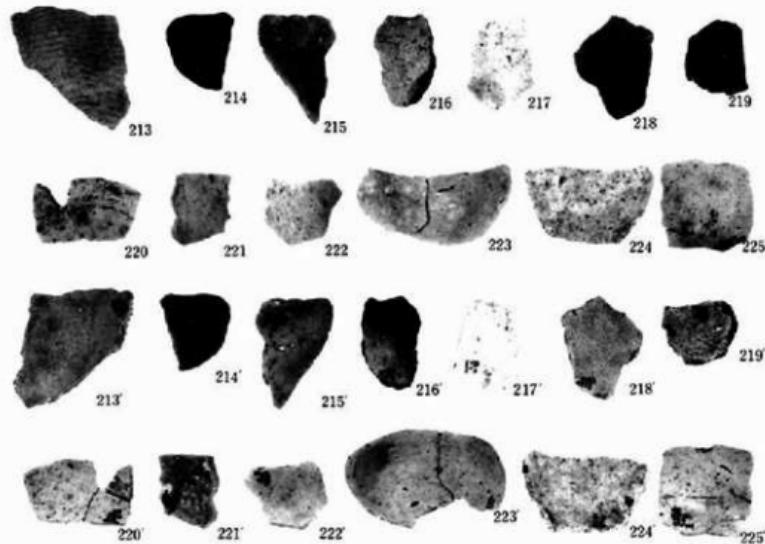


136

第4附 須恵器杯身(133) 壺(136) 鉢(137) 第5附 須恵器杯身(188,イ) 高杯(191) 土師器体(口) 壺(八)
ミニチュア上器(212)



1. 須恵器 N R 2 杯蓋(37, 39, 41) 杯身(42, 43) ヒット 杯蓋(45~47) 杯身(48, 49) 高杯(51)
第4層 杯蓋(126, 127) 杯身(129, 130, 132, 134, 135)



2. 製塙土器 S D65 (213, 214, 216, 218, 219, 220, 222, 223, 224)
第5層 (215, 217, 221, 225)



227

231



226

228

229



232

230

石鋸(226, 227) 有孔円板(228) 管玉(229) 滑石製筋轆車(230)

分銅型石製品(231) 鉄鋸(232)

*229のみ S = 1.5/1 その他は S = 1/1

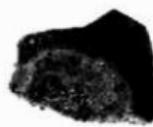
圖版五十一 繩文土器・弥生土器



235



237



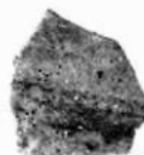
238



234



233



236

1. 包含層 深鉢・浅鉢



5



6

2. 壺棺1・壺棺2

圖版五十二
弥生土器



243



245



246



247



239



241



257



253



259



295

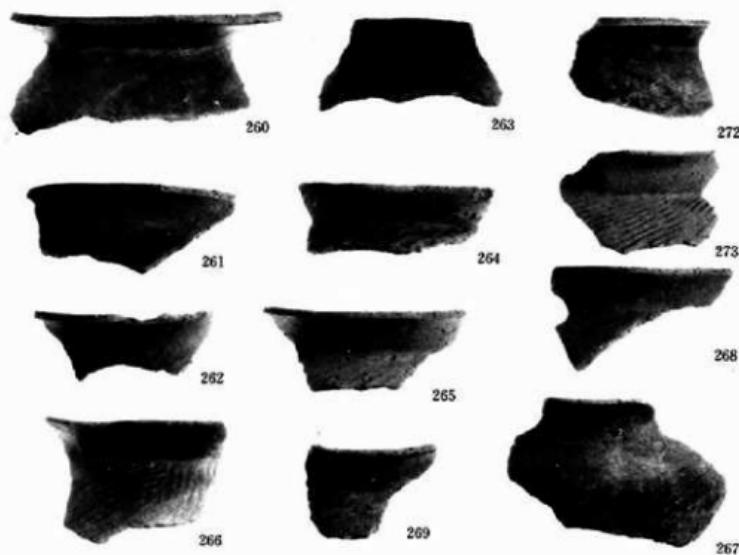


251

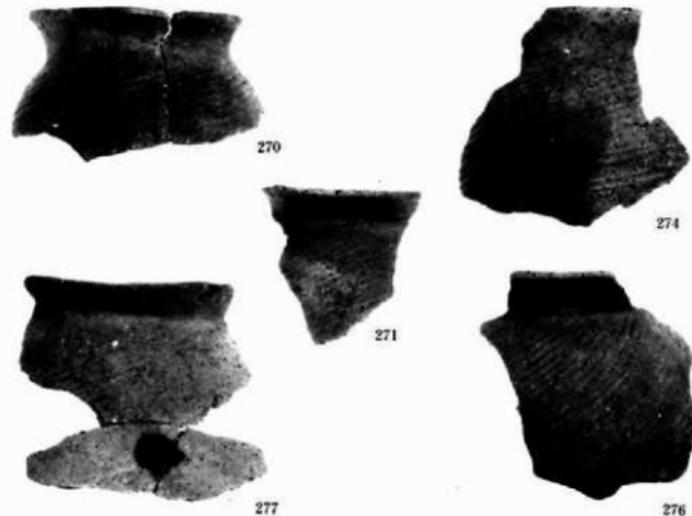


250

圖版五十四
弥生土器



1. S D78 製



1. S D78 製



298



297



302



300



297



299

S D78 高杯脚部



323



308



328



309

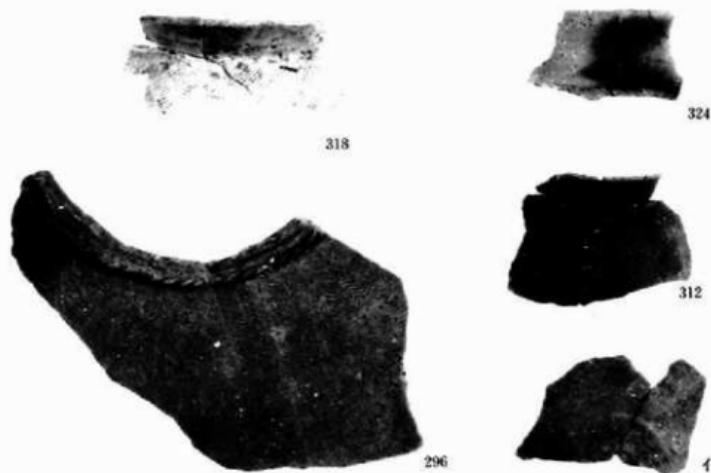


313

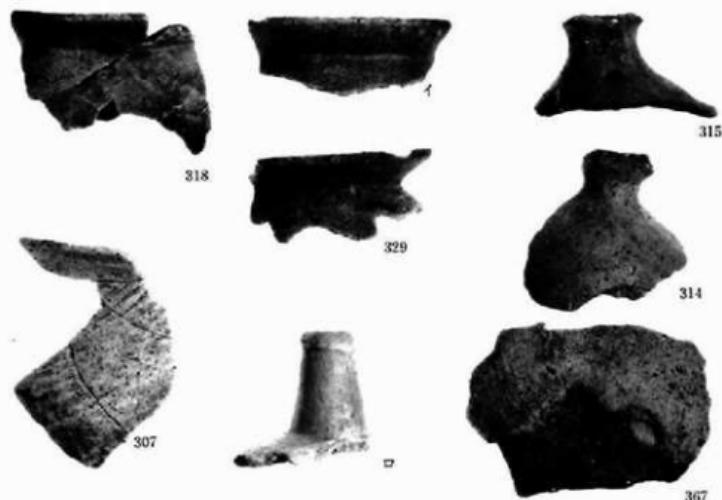


310

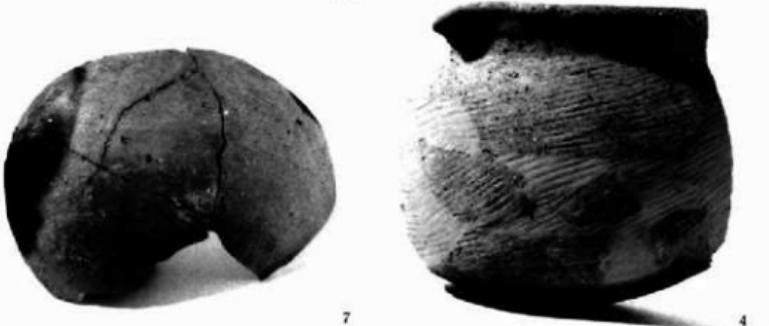
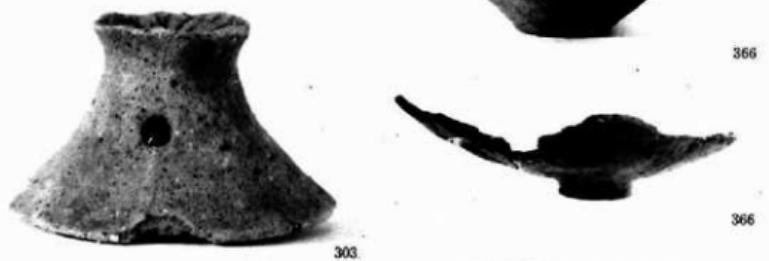
S D83 壺(308-309) 壺(310) S D85 壺(313) S D81 高杯(323) 壺328



1. S D80 壺(318) S D83 壺(312) S D81 壺(324)(1) S D78 壺(296)



2. S D80 高杯(314-315)壺(318) S D81 壺(329·1)高杯(□) S D82 壺(307) S E 6 壺(367)



S D78 裹(275)高杯(303) S D80 裹(320) S E 5 第1層鉢(344)裹(363) 壺棺1片口鉢(4)
臺棺3壺(7)



301

398



304

イ



398

258

S D78 高杯(258・301・304・イ) 包含層高杯(397・398)

圖版六十
弥生土器



345



343



350



362



360



365

S E 5 第1層高杯(343) 小型鉢(345) 第2層甕(350-360-362) 壺(365)



357



355



354



348



356



358



349

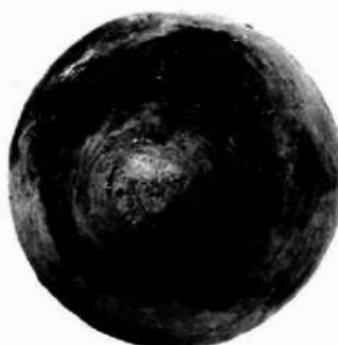
S E 5 第2層壺・甕・高杯・鉢・小型器台



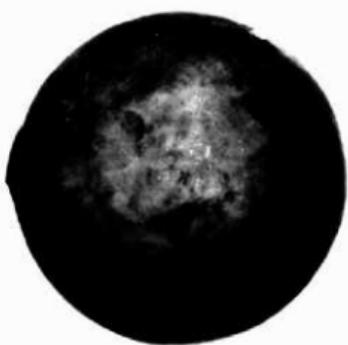
359



361



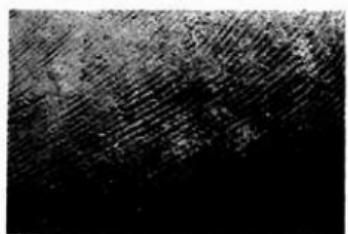
359'



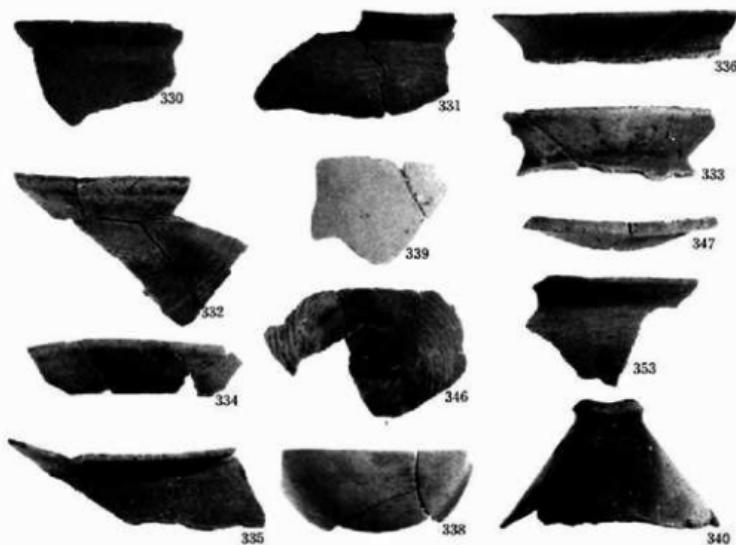
361'



359"



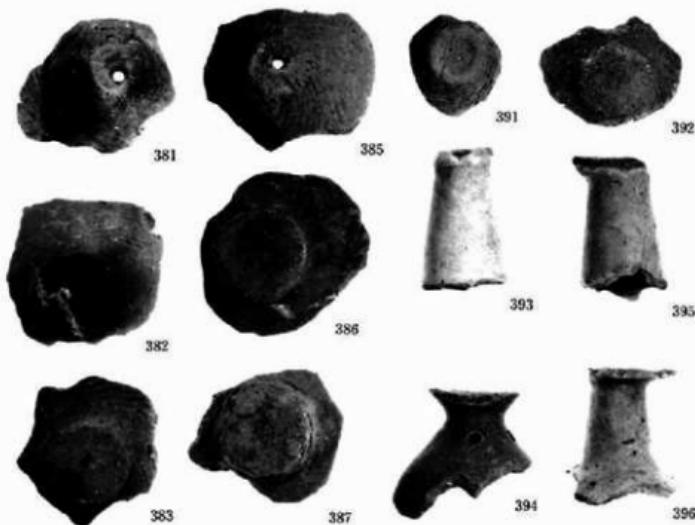
362"



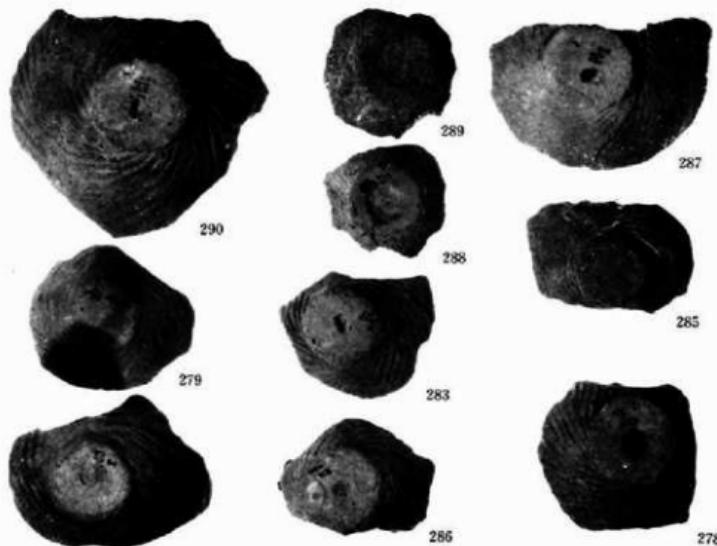
1. S E 5 第1層甕(330~336) 高杯(340) 跖(338·339) 第2層壺(347) 甕(353)



2. S E 6 壺



1. 包含層 袋底部・高杯脚部



2. S D78 袋底部

西の口遺跡第1次発掘調査概要
—市立繩手中学校分教場建設工事に伴う第1次調査—

1987年3月31日

発行 財團法人 東大阪市文化財協会
印刷 ドウミ印刷 広研社